

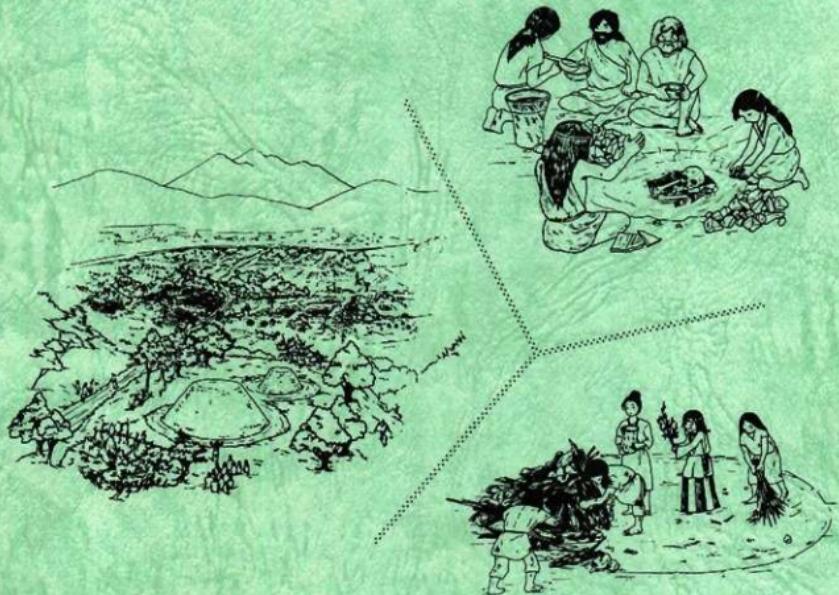
東八代郡境川村

—縄文時代前期後半の住居跡、

弥生～古墳時代の集落・低墳丘古墳・方形周溝墓の調査—

諏訪尻遺跡

境川分譲地造成事業に伴う発掘調査報告書



2000.3

山梨県教育委員会
山梨県土地開発公社

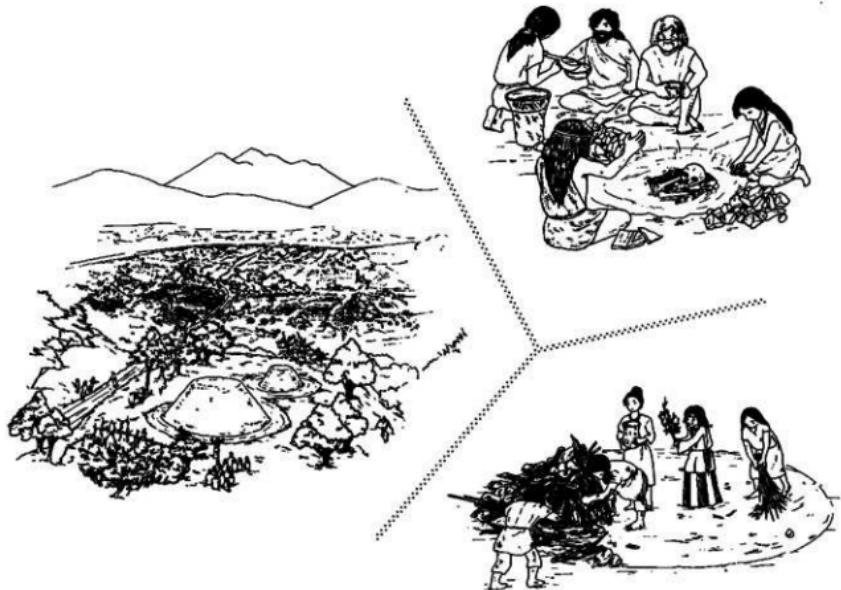
東八代郡境川村

－縄文時代前期後半の住居跡、

弥生～古墳時代の集落・低墳丘古墳・方形周溝墓の調査－

諏訪尻遺跡

境川分譲地造成事業に伴う発掘調査報告書



2000.3

山梨県教育委員会
山梨県土地開発公社

序

本報告書は、リニア実験線の国中地域に造られるトンネル掘削土を使った宅地造成事業に先立って、1997年と1998年の2年間にわたって調査された諏訪尻遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

山梨県の南東部、曾根丘陵の一角に位置する諏訪尻遺跡一帯は、縄文時代～古墳時代にかけて遺跡の密集する地域を構成する土地です。今回の諏訪尻遺跡の発掘調査によって縄文時代前期後半の住居跡3軒、同じく集石土坑1基、ほぼ同時期のものと考えられる土坑15基、弥生時代末ころの住居跡14軒、古墳時代初頭の住居跡10軒、低墳丘古墳2基、方形周溝墓1基などが発見されました。

縄文時代については 諸磯 b 式期の住居跡から、該期において県内ではほとんど見られない埋甕炉が発見され、またこれまであまり見られなかった 諸磯 a 式期～b 式期にかけての住居跡、土坑なども発見されています。また遺物についても県内では未だ20例に満たない前期土偶が出土しました。さらに北白川下層式という主に関西地方で使われていた土器などと共に県内初出土例となる同じく関西系の鷹島式土器が見つかっています。

弥生時代末では長軸13m、短軸9.8mという本県では最大級規模の住居跡が発見されました。この住居跡は焼けた状態を示しており、他にも2軒ほど確認された焼失住居と共にこの火災の原因がどんな要因によるものなのか、当時の社会的な背景を考える上でも貴重な事例になるものと思われます。また、これらの住居跡に残されていた炭化材を自然科学的に分析したところ1つの住居跡でも数種類の木材を使っていたこともわかりました。

また、統く古墳時代の住居跡についてもベッド状造構や土手をもつピットなど様々な居住施設が確認され、住居跡全体の中でのこれら居住施設の設置傾向や設置場所などの‘住’のあり方について興味深い資料を得ることができました。またこれらの時期とほぼ重なる方形周溝墓との関係にも興味がひかれるところです。

さらに低墳丘古墳が造られた時期は、出土した遺物などからすると5世紀中頃～後半代と考えられるもので、この時期は政治権力の中核であった中道町地域の衰退時期にあたっており本遺跡の低墳丘古墳がこの地域に見られる同時期の馬乗山1・2号墳などとのような関係を持っていたのか、ひいては中道町地域の勢力が衰退する中でどのような役割をもっていたのかを明らかにする重要な事例になるものと思われます。

今回の調査では以上に挙げたような、それぞれの時期で様々な興味深い造構・遺物が発見されています。なお現在遺跡は埋め戻されていますが、今後の造成事業の中でこれらの調査成果を生かして保存されれば望外の喜びと言えます。本書が学習・研究の資料として活用されることを念じてやみません。なお、末筆となりましたが本調査にご協力を賜った関係各位、ならびに直接調査に関わった方々に厚くお礼申し上げます。

2000年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚初重

例　　言

1. 本報告書は、山梨県東八代郡境川村藤垈字諫訪尻3883-11番地外に所在する諫訪尻遺跡の発掘調査告書である。
2. 本事業は、宅地造成事業に先立つて1997年と1998年に実施したものである。
3. 発掘調査および整理作業は山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
4. 本書の執筆は第1次調査については調査研究第2課長 坂本美夫の発掘調査の所見原稿をもとに整理作業による成果を足して、協議のもと文化財主事 野代恵子（旧姓：市川）がまとめ、第2次調査については野代が担当した。それ以外については文末に明記している。自然科学分析について委託した部分については執筆者を文頭に記した。編集については野代が行なった。
5. 写真撮影については現場においての遺構などはそれぞれの年度の担当者が行ない、遺物については小川忠博に委託した。
6. 表紙および本文中のイラストは大塚敦子による。
7. 遺物の接合・復原・実測・トレースおよび図版作成に至る過程においては、下記の整理作業員が実施した。なお、旧石器時代の石器については網倉邦夫（嘱託職員）が実測した。
石原 恵、石原道子、今沢美代、猪股順子、長田てる美、笠井真由美、北原和江、栗原礼子、佐々木富士子、志田幸江、土橋園子、中込星子、名取洋子、平川涼子、村田美由紀、望月かおり、森田良子、山崎靖子、山本有希
8. 発掘調査から報告書作成にあたっては、下記の方々からご教示・ご協力を頂いた。厚く感謝申し上げます。（敬称略）

河西 学・畠 大介（山梨文化財研究所）、野崎 進（境川村教育委員会）、渡井英善（富士宮市教育委員会）、泉 拓良（奈良大学）、松井忠春・河野一隆（（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）、丸山 潔（神戸市教育委員会）、伊庭 功・中村健二・鈴木康二（（財）滋賀県文化財保護協会）、近藤広（（財）栗東町文化体育振興事業団）、内堀信雄（岐阜市教育委員会）、小谷和彦・堀田一浩・近藤大典・増子 誠（（財）岐阜県文化財保護センター）、新名 強（三重県埋蔵文化財センター）、松宮昌樹（桜井市立埋蔵文化財センター）、岡田憲一（奈良大学大学院）、小川忠博（写真家）、大塚敦子、池谷建材

9. 報告書に関わる図面・出土遺物・写真などは山梨県埋蔵文化財センターに保管している。

凡　　例

1. 遺構・遺物の挿図の縮尺は原則として以下の通りである。
遺構：調査区全体図1/500、古墳1/200、方形周溝墓1/100、住居跡1/60、土坑・集石土坑1/30
遺物：土器1/4・土器拓影1/3、石器2/3・1/3、土偶・土製品1/2
2. 遺構平面図・断面図においてのスクリーントーンについては個々に記載している。

目 次

序

例言・凡例

諫訪尻遺跡でのくらし	1
第1章 調査の実施と経過	4
第1節 調査に至る経過	4
第2節 調査組織	4
第3節 調査区の設定と調査方法	5
第2章 遺跡の位置と立地	5
第1節 遺跡の位置	5
第2節 地理的環境	5
第3節 遺跡周辺の歴史的環境	5
第3章 第1次調査(1997年度)	8
第1節 調査の概要	9
第2節 遺構と遺物	9
1. 住居跡 2. 土坑 3. 墓穴状遺構 4. 墳墓	
第4章 第2次調査(1998年度)	54
第1節 調査の概要	55
第2節 遺構と遺物	55
1. 住居跡 2. 土坑・風倒木 3. 集石土坑 4. 墳墓	
第5章 遺構外出土遺物	83
第1節 旧石器時代の遺物	83
第2節 繩文時代の遺物	83
1. 土器 2. 石器 3. 特殊遺物	
第3節 弥生・古墳時代の遺物	100
第4節 奈良・平安時代、中世の遺物	100
第5節 陶磁器類	103
第6章 総括	104
第1節 旧石器時代	104
第2節 繩文時代	104
第3節 弥生・古墳時代	105
附編 自然科学分析	107
1 繩文土器(前期後半)の胎土分析	107
2 住居跡の放射性炭素年代	112
3 第13号住居跡出土炭化材の樹種同定	112
4 集石土坑のリン分析	113

挿図目次

- | | | | |
|------|---------------------|------|-----------------------------|
| 第1図 | 周辺遺跡分布図 | 第50図 | 第13号住居跡 炭化材出土状況と出土遺物 |
| 第2図 | 第1号住居跡 | 第51図 | 第17・18号住居跡 |
| 第3図 | 第1号住居跡 遺物出土状況 | 第52図 | 第17・18号住居跡 遺物出土状況 |
| 第4図 | 第1号住居跡 出土遺物 | 第53図 | 第17号住居跡 出土遺物 |
| 第5図 | 第2号住居跡 | 第54図 | 第18号住居跡 出土遺物 |
| 第6図 | 第2号住居跡 出土遺物 (1) | 第55図 | 第19・20号住居跡 |
| 第7図 | 第2号住居跡 出土遺物 (2) | 第56図 | 第19・20号住居跡 出土遺物 |
| 第8図 | 第3号住居跡 | 第57図 | 第28A号住居跡 |
| 第9図 | 第3号住居跡 出土遺物 | 第58図 | 第28A号住居跡 出土遺物 (1) |
| 第10図 | 第4号住居跡 | 第59図 | 第28A号住居跡 出土遺物 (2) |
| 第11図 | 第4号住居跡 出土遺物 | 第60図 | 第28A号住居跡 出土遺物 (3) |
| 第12図 | 第5号住居跡と出土遺物 | 第61図 | 第28B号住居跡 |
| 第13図 | 第6号住居跡と出土遺物 | 第62図 | 第28B号住居跡 出土遺物 (1) |
| 第14図 | 第7号住居跡 | 第63図 | 第28B号住居跡 出土遺物 (2) |
| 第15図 | 第7号住居跡 焼土検出状況 | 第64図 | 第28B号住居跡 出土遺物 (3) |
| 第16図 | 第7号住居跡 遺物出土状況・炉 | 第65図 | 第27・29号住居跡 |
| 第17図 | 第7号住居跡 出土遺物 (1) | 第66図 | 第13・16・17・18・19・21・22・23号土坑 |
| 第18図 | 第7号住居跡 出土遺物 (2) | 第67図 | 第16・17・18・23号土坑 出土遺物 |
| 第19図 | 第8号住居跡 | 第68図 | 第1号集石土坑・第24号土坑・風倒木 |
| 第20図 | 第8号住居跡 出土遺物 | 第69図 | 第24号土坑 出土遺物 |
| 第21図 | 第10号住居跡と出土遺物 | 第70図 | 第3号集石土坑 |
| 第22図 | 第11号住居跡 | 第71図 | 第3号集石土坑 出土遺物 |
| 第23図 | 第11号住居跡 出土遺物 | 第72図 | 第1号墳 |
| 第24図 | 第12号住居跡 | 第73図 | 第1号墳 (全体図) |
| 第25図 | 第12号住居跡 出土遺物 | 第74図 | 第1号墳 出土状況 |
| 第26図 | 第14号住居跡と出土遺物 | 第75図 | 第1号墳 出土遺物 |
| 第27図 | 第15号住居跡と出土遺物 | 第76図 | 第2号墳 |
| 第28図 | 第15号住居跡 出土遺物 | 第77図 | 第2号墳 遺物出土状況 |
| 第29図 | 第16号住居跡と出土遺物 | 第78図 | 第2号墳 磨出土状況 |
| 第30図 | 第21号住居跡と出土遺物 | 第79図 | 第2号墳 出土遺物 |
| 第31図 | 第22号住居跡と出土遺物 | 第80図 | 遺構外出土遺物 (旧石器時代) |
| 第32図 | 第23号住居跡と出土遺物 | 第81図 | 遺構外出土遺物 (縄文時代・土器1) |
| 第33図 | 第24号住居跡 | 第82図 | 遺構外出土遺物 (縄文時代・土器2) |
| 第34図 | 第24号住居跡 出土遺物 (1) | 第83図 | 遺構外出土遺物 (縄文時代・土器3) |
| 第35図 | 第24号住居跡 出土遺物 (2) | 第84図 | 遺構外出土遺物 (縄文時代・土器4) |
| 第36図 | 第25号住居跡と出土遺物 | 第85図 | 遺構外出土遺物 (縄文時代・土器5) |
| 第37図 | 第1・2・3・4号土坑 | 第86図 | 遺構外出土遺物 (縄文時代・土器6) |
| 第38図 | 第5・6・7・11号土坑 | 第87図 | 遺構外出土遺物 (縄文時代・土器7) |
| 第39図 | 第1・6・7号土坑 出土遺物 | 第88図 | 遺構外出土遺物 (縄文時代・異系統土器) |
| 第40図 | 第1号竪穴状遺構 | 第89図 | 遺構外出土遺物 (縄文時代・石器1) |
| 第41図 | 第1号方形周溝墓 | 第90図 | 遺構外出土遺物 (縄文時代・石器2) |
| 第42図 | 第1号方形周溝墓 遺物出土状況 (1) | 第91図 | 遺構外出土遺物 (縄文時代・石器3) |
| 第43図 | 第1号方形周溝墓 遺物出土状況 (2) | 第92図 | 遺構外出土遺物 (縄文時代・石器4) |
| 第44図 | 第1号方形周溝墓 出土遺物 (1) | 第93図 | 遺構外出土遺物 (縄文時代・石器5) |
| 第45図 | 第1号方形周溝墓 出土遺物 (2) | 第94図 | 遺構外出土遺物 (縄文時代・石器6) |
| 第46図 | 第1号墳と遺物出土状況 | 第95図 | 遺構外出土遺物 (特殊遺物) |
| 第47図 | 第1号墳 出土遺物 (1) | 第96図 | 遺構外出土遺物 (弥生・古墳時代) |
| 第48図 | 第1号墳 出土遺物 (2) | 第97図 | 遺構外出土遺物 (奈良・平安時代・中世) |
| 第49図 | 第13号住居跡 | 第98図 | 遺構外出土遺物 (陶磁器類) |

諏訪尻遺跡でのくらし・・・

この遺跡からはどんなことがわかったのでしょうか？　ここでの人々の暮らしを、ハイライトで綴ってみましょう。

葬られた穴—縄文時代前期後半（今からおよそ6,000年前）の墓？—

調査区の東隅には、こぶし大の石がたまつて顔を出している場所がありました。その場所を調査してみると、これらの石は一度穴を掘ったあとそこを埋めて元通りの状態になった上にのせられているものである事がわかりました。この穴は一体、何に使われたのでしょうか？

穴の上方にはたくさんの石がのせられていましたが、穴の底には土器が横たえて置いてありました。また穴の中には石匙（いしあじ）と呼ばれる石器がひとつ入れられていました。出てきた土器からこれは縄文時代前期後半に掘られた穴であることがわかっています。縄文時代にみられる穴には、食料などを蓄えるためのものや石焼料理などに使ったもの、お墓として使われたものなどがあります。ここで発見された穴からは骨などの決定的証拠は見つかっていませんが、穴の観察や他遺跡の様々な事例などからおそらくはお墓などの非日常的な目的で使われたものだと考えられます。

現代でも人が亡くなれば「おじいちゃんの使っていたメガネをお墓にいっしょにいれてあげよう。」というように、その人が生きていたときに愛用していたものを一緒に葬る事はよくあります。今回発見された穴から出てきた石匙も、墓の主人の愛用の品だったのかも知れませんね。



古墳にはどんな人が葬られたのだろう？－古墳時代前期（今からおよそ1,600年前）の墓－

この地は甲府盆地が眼下に広がるとても景色のよい場所です。この墓の主も自分の治めた地を見守りながら永遠の眠りについたのでしょう。この場所に程近い中道町には弥生時代末～古墳時代初頭（今から1,700年くらい前）にかけての権力者達のお墓がたくさん残されていますが、その時期以降のお墓はぐんと減ります。そのかわりに増えるのはこの境川村一帯なのです。

ここから発見された古墳もちょうど境川村一帯に古墳が増え始める頃に造られたものと考えられます。この主は中道町に眠る人々とはどのような関係にあったのでしょうか。



現場検証をしてみよう！

この遺跡からは弥生時代末～古墳時代初頭（今から1,700年くらい前）にかけての家が25軒ほど見つかっていますが、そのうちの3軒は焼けた家でした。この時期には一定数の焼けた家がみられるのはよくあることですが、なぜ焼けているのでしょうか？ その理由としては、

- ①火の不始末で火事になった
- ②となりの家の火事が燃え移って焼けた
- ③戦（いくさ）による放火
- ④いらなくなってしまった家に火をつけ始末した

などが考えられますが、この遺跡での事例はどれに当てはまるのでしょうか？

ケース 1 … (第7号住居跡)

- ・長軸13mのとても大きな家
- ・床一面に焼けた土が残されている
- ・使っていた土器が残されている

ケース 2 … (第13号住居跡)

- ・長軸7mのやや大きめの家
- ・家の中には焼け落ちて炭化した炭、焼けた土が残る
- ・炭化した柱が家の片隅に寄せられている
- ・家の中には同時に焼けた土器がほとんど残っていない

ケース 3 … (第24号住居跡)

- ・長軸6mの普通サイズの家
- ・家の中心部に炭化した柱がかたまって残る
- ・家の中には焼けていない土器片が多量に散らばっている

◆◆ヒントはその火事が、不慮のものか否かにあります。◆◆



こたえ ○ ● ○

ケース 1 … ③大きな家はムラの長（おさ）のものと考えられ、敵に狙われ火を放たれて
焼けたとすれば不意の出火で土器などの家財道具が残されているのもうなづ
けます。

ケース 2 … ④家のなかに、日常に使ったと思われる土器が全くない事、焼けた柱などが
片隅に寄せられている事などから、片付けた様子が目に浮かびます。

ケース 3 … ?この場合、焼け落ちた家の窓みに割れた土器などが捨てられていることか
らここがゴミ穴のような形で使われていると考えられます。土器のなかには
家と一緒に焼けたものがほとんどないことから④の可能性が強いですね。

第1章 調査の実施と経過

第1節 調査に至る経過

（第1次調査）

平成9年4月25日 文化庁に発掘通知を提出する。
同 5月19日 発掘調査を開始する。
同 12月11日 発掘調査を終了する。
同 12月15日 石和警察署へ発見通知を提出する。

（第2次調査）

平成10年6月9日 文化庁に発掘通知を提出する。
同 6月22日 発掘調査を開始する。
同 10月20日 発掘調査を終了する。
同 10月29日 石和警察署へ発見通知を提出する。

第2節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会 教育長 水上和彦（第1次）

教育長 奥石和雄（第2次）

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター 所長 大塚初重

次長 藤田修

埋蔵文化財指導幹 田代孝（第2次）

調査担当 山梨県埋蔵文化財センター

（第1次調査）

副主幹 文化財主事 坂本美夫

主査 文化財主事 保坂一英

主任 文化財主事 熊谷栄二

" 崎田哲

文化財主事 長田雅巳

平成9年度海外技術研修員 王魯茂（中国四川省文物考古研究所）

（第2次調査）

主任 文化財主事 熊谷栄二

文化財主事 市川恵子

発掘調査従事者

調査員 渡辺かおり

作業員 赤岡敦、今沢陽光、猪股順子、石原恵、石井千秋、出月ます江、一瀬一浩、長田可祝、梶原初美、笠井真由美、北原和江、栗原礼子、久保田明義、越石力、佐々木富士子、志茂博、間口愛子、田辺秋太郎、武田きく江、玉越ゆかり、近山智一、土橋園子、中込幹一、中込よしミ、永井由美子、宮坂晴幸、村田美由紀、森田良子、山崎靖子、山本由紀、八木玲子

第3節 調査区の設定と調査方法

諫訪尻遺跡は曾根丘陵の南北に突出した舌状台地部分にあり、調査対象地は試掘調査において確認された範囲2,400m²と丘陵下における須恵器窯跡の確認調査範囲3,600m²である。

調査は、丘陵の尾根に直交する方向に道路に沿って20mの幅で調査区を設定し、南から北へA B C…、東から西へ1 2 3…というように5×5mのグリッドを設定して調査を実施した。須恵器窯跡の確認調査については該当する丘陵斜面部に、斜面に対して平行する形でバックホーにより5本程度のトレンチを入れたが、遺構などは全く確認されず、遺物の散布も見られなかった。

第2章 遺跡の位置と立地

第1節 遺跡の位置

諫訪尻遺跡の所在する東八代郡境川村は、甲府盆地の南東部に位置する。東を八代町、西を中道町、南は御坂山脈の稜線を芦川村に接する南北約7km、東西約5.5kmと、やや東西に細長い村域を持つ北面傾斜の村で、そのほぼ中央に標高392.4mの坊ヶ峯が位置している。西側の境に間門川が、村の中央付近を境川がおおむね東から西に向かって流れ、村の西南部で笛吹川と合流する。諫訪尻遺跡はこの村域の西端近くで両河川に挟まれた曾根丘陵の一枝丘上に位置する。

甲府駅より直線で南東方向10km、中央自動車道下り線境川サービスエリアの背後の丘陵上に所在する。

第2節 地理的環境

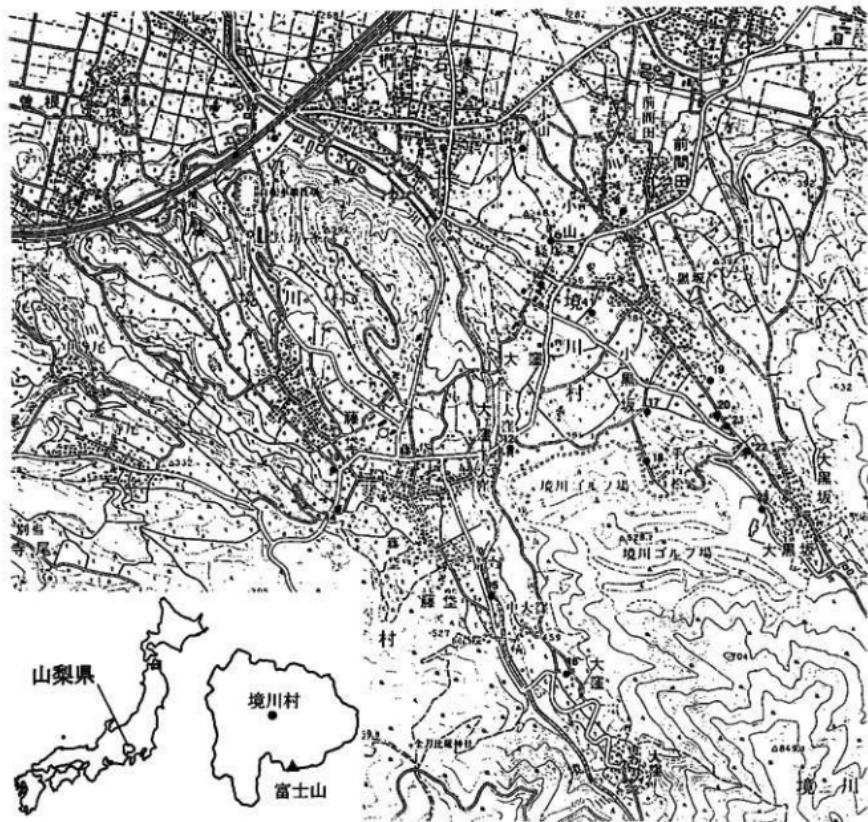
境川村は標高1,000mを超える御坂山地が背後にひかえ、村のほぼ中央あたりに位置する大黒坂付近より山間地の様相を強める。御坂山地の前面には曾根丘陵がほぼ東西方向に連なるが、境川村域は僅かな北西面の冲積地を除いて大部分がこの曾根丘陵上にある。曾根丘陵は盆地に向けて大小多数の支丘を突き出しているが、諫訪尻遺跡は間門川と境川とに挟まれた中央付近の一枝丘の先端に位置している。標高はおよそ365mで、丘陵下の冲積地との比高差は100mほどである。

第3節 遺跡周辺の歴史的環境

諫訪尻遺跡は甲府盆地の南縁に所在する。この一帯は御坂山脈の北側支脈が曾根丘陵の高位段丘面と接する山麓側の部分にあたり、遺跡の立地をみると御坂山脈から曾根丘陵に向かって半島状に突き出した南北に細長い尾根状の北向緩斜面の先端近くに沿ってその分布をみせている。この曾根丘陵の一帯は古くからわめて良好な生活空間を提供してきた。

これまでにも旧石器時代より平安時代に至る数多くの遺跡が丘陵のいたるところからみつかっている。この中でも特に濃密な遺跡の分布が認められるのは標高320m付近を中心に広がる中位段丘面であり、本遺跡付近に限ってみても立石南（繩文）、立石北（繩文）、一の沢（繩文）、金山（繩文）、間の田（繩文・平安）、柳原（繩文）、浅間塚古墳、京原（旧石器・繩文・平安）、中村（弥生）、西原（旧石器・繩文・弥生・平安）などの遺跡が存在する。このうち京原・西原遺跡は旧石器より繩文・弥生・平安時代にわたる複合集落であることが発掘調査によって明らかになっている。また、これに対して、曾根丘陵の高位段丘斜面から御坂山脈にかけての北側山麓部については、前述の中位段丘部に比べると遺跡の分布は全体的にきわめて稀薄となることが指摘されてきた。前田地区に位置する中原遺跡（繩文）、大庭地区に所在する温湯北遺跡（平安）などはこの地域における数少ない遺跡として挙げられよう。

旧石器時代については曾根丘陵一帯の地城では古く米倉山や下向山出土の石器群が唯一の資料として知られるにすぎなかったが、丘陵中央部の東山南麓部に位置する立石遺跡の調査などで該期の資料が発見され、かつての資料をも含めた研究がなされている。境川村内では発掘調査によって確認されたものはまだないが、諫訪尻遺跡の所在する藤塙地区において、辻遺跡から黒曜石の縦長剥片、小字帯石から半円錐形の黒曜石の石核が表採されている。この他小山地区的西原や寺尾ではナイフ形石器が表採されている。今回の諫訪尻遺跡の調査においても、ナイフ形石器や尖頭器などが見つかっており、藤塙地区の一帯が該期の生活中適した土地であったことを物語つ



- | | | | |
|------------|---------|----------|----------|
| 1 お文殊さん古墳 | 7 西原遺跡 | 13 菊在家遺跡 | 19 浅間塚古墳 |
| 2 泰門神社古墳 | 8 中村遺跡 | 14 牛居沢窯跡 | 20 一の沢遺跡 |
| 3 馬乗山1・2号墳 | 9 京原遺跡 | 15 水口遺跡 | 21 間の田遺跡 |
| 4 下向窯跡 | 10 柳原遺跡 | 16 温湯遺跡 | 22 立石南遺跡 |
| 5 石橋条理製造構 | 11 金山遺跡 | 17 立石遺跡 | 23 机遺跡 |
| 6 諸訪尻遺跡 | 12 辻遺跡 | 18 寺平遺跡 | |

第1図 周辺遺跡分布図

ている。

縄文時代にはいると、一の沢遺跡群や京原遺跡などの拠点となる集落と想定される遺跡が点在する。一の沢遺跡群や京原遺跡は遺跡の立地としてはかなりの急斜面に立地するが、曾根丘陵に目を移すと高位段丘にあたる東山南麓の上の平遺跡・立石遺跡などは盆地内部に向かって逆に高くなる緩斜面に立地することから、曾根丘陵上の遺跡との占地の違いを指摘できよう。早期においては一の沢遺跡群周辺で、本遺跡の南の標高500mに位置する机遺跡で若干の土器がみつかっている。前期になると遺跡は全城に散見できる。特に一の沢遺跡群、さらに上位の段丘に立地する寺平遺跡では住居跡が検出され前期に限れば本地域は該期の遺跡が集中するといえ、前期集落の立地の一端を示すものであろう。諸訪尻遺跡からもこの時期の遺構が発見されている。中期にはいると県内

においては遺跡数もその内容も今までとは比べものにならないほど充実し集落の展開・変遷をも窺える調査も見られる。一般的には拠点となる集落は広大な緩斜面部に占地し、連続して集落が営まれ、狭小な緩斜面部には小規模で断続的な集落が営まれる傾向がある。境川地域においては中期後葉曾利式期においてまとまった資料をもつ遺跡が見られる。一の沢遺跡群周辺などでも中期前葉の資料に乏しく中期中葉から後葉の遺跡が多くなり全体として集落の立地が移動したことが窺える。諫訪尻遺跡においても前期後半の遺構・遺物に比して、中期については遺構は全く見られず、遺物についても中期前葉の土器が僅かに見られる程度で、前述のような時期ごとの遺跡立地に間わる傾向を踏襲しているといえよう。後期になると笛吹川沿いの資料は少なく先行する中期後半の繁栄からすれば激減するといつてもよい。晚期はさらに資料が減り、この地域ではほとんど確認されないとあってもよい。

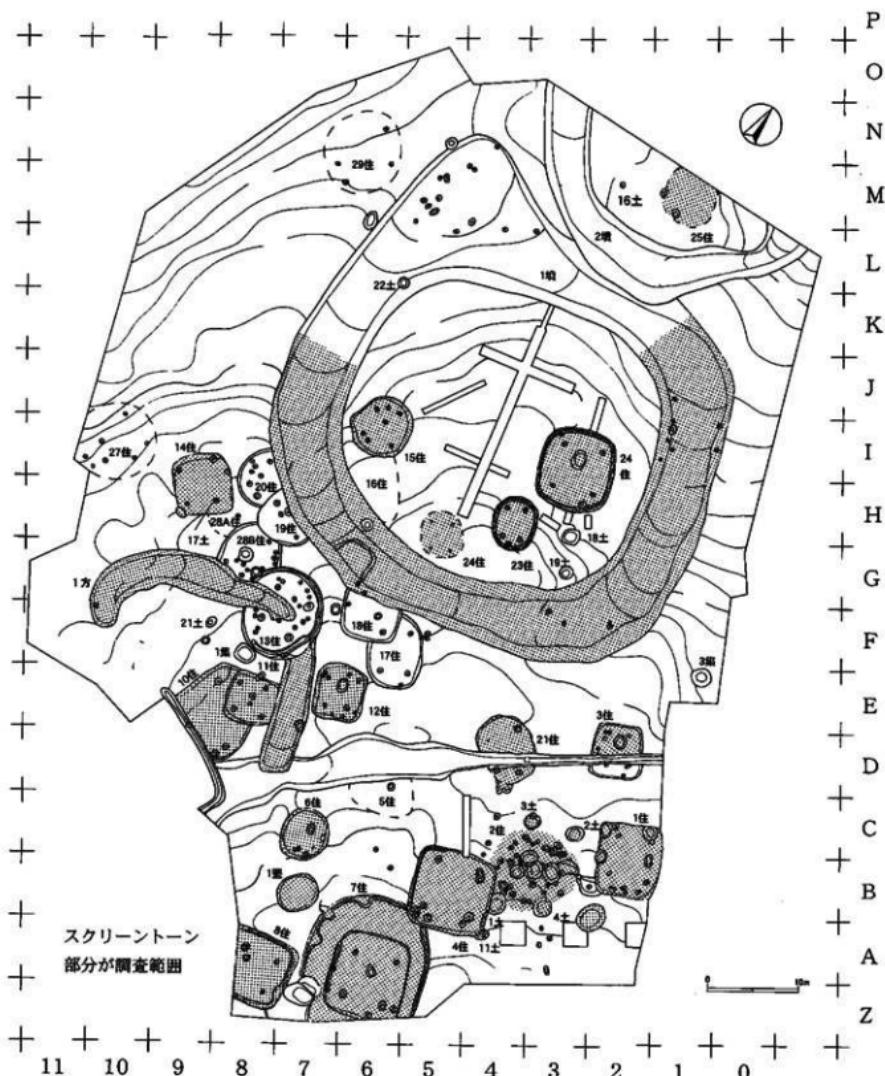
弥生時代については前期・中期の遺跡については今のところこの周辺では確認されていないが、隣接する八代町岡では中期に比定される土偶容器が出土している。しかしながらこれは調査によるものではなく表探の域を出るものではない。このような遺跡数の激減は、この時期水稻農業が生業の中心となり社会構造が一変することによる集落立地の大幅な変化によるものだろうか。下って弥生時代終末から古墳時代初頭に至ると西原遺跡、立石北遺跡、中村遺跡、京原遺跡などで方形集溝墓や住居跡が見られるようになる。周囲に目を移してみると曾根丘陵東山南麓の上の平遺跡で128基の方形周溝墓が確認され、東山頂部の東山遺跡では古墳時代に属する円形周溝墓も見られる。これらのことから、この一帯がひとつの核地域となっていったものと考えられる。

方形周溝墓の時代に統く古墳時代前期においては4世紀～5世紀前半にかけて曾根丘陵の東山・米倉山を中心とし平沢古墳(前方後方墳・全長45m)、跳子塚(前方後円墳・全長169m)・丸山塚(同・全長90～120m)・丸山塚(円墳・直径70m)という県内最古の大型古墳が出現し、一大勢力地帯を形成していったことが窺える。その勢力範囲は古墳などの状況から東は中道北部および境川西部、西は三珠町、北は笛吹川を越えた甲府市南部あたりまでの広範な地域が考えられている。このように考えると境川地域もこの勢力圏に含まれていたことになるが、これを裏付けるように境川村域内においては教育委員会で把握している57基を含めて総数では80基を下らない古墳が存在していたと考えられており、時期的に見るとこれらの古墳が造られたのは5世紀中頃からのことと、曾根丘陵にあった勢力が弱った後、境川村地域に古墳の造営のピークが移ったことを示唆している。

本遺跡の西側の丘陵には旭1号墳、天神山古墳といった5世紀後半代の古墳が、また東隣の支丘上には馬乗山1・2号墳、丘陵下に表門神社古墳、お文殊さん古墳といった5世紀中頃以降の古墳が連続と造営されている。このように境川地域は特に5世紀後半代前後に活発に古墳の造られた地域で、次の6世紀の古墳時代後期に至っても造墓が盛んに行なわれている。古墳時代の居住遺跡については、前期初頭の京原遺跡、手古松遺跡では後期の火災住居1軒、同じく後期の蔚在家遺跡などというように点在しているが、前述のような古墳造営を背景とすれば大規模な集落が存在したこととも充分に考えられる。

奈良・平安時代では京原遺跡、西原遺跡、温泉遺跡、石橋条里製造構、物見塚遺跡などの集落遺跡が知られている。物見塚遺跡では羽口や鉄滓などが出土した土坑が確認されており、平安時代の鍛冶間連遺構であることが指摘されている。またこの他に境川村内では、牛居沢窯跡・下向窯跡などの須恵器窯跡が確認されていることを特筆できる。県内での他の窯跡については敷島町の天狗沢瓦窯などが知られるのみである。窯はいずれも台地の傾斜面という登り窯をつくるのにふさわしい地形が選定されており、これらの窯では古墳時代後期に至って、県内に供給する須恵器を一定量生産していたものと考えられる。諫訪尻遺跡のある尾根状台地においても、地形などからこのような窯の存在が想定されたが試掘調査の結果、遺構・遺物などは全く確認されなかった。このほか、京原遺跡と坊ヶ峯の頂上付近からは藏骨器が出土している。

第1次調査



第3章 第1次調査（1997年度）

第1節 調査の概要

第1次調査においては、第1～8・10～12・14～16・22～25号住居跡（第2号住居跡を除き弥生時代末～古墳時代初頭：第2号住居跡は縄文時代前期後半 諸磯b式期）、第1～8・11号土坑（縄文時代前期後半）、第1号整穴状遺構（時期不明）、方形周溝墓1基、低墳丘古墳1基（第1号墳）についての調査を行なった。なお、第1号墳については北側の約1/4ほどの部分を次年度に繰り越した。特筆すべきものとしてはまず、弥生時代最終末に位置付けられる第7号住居跡の規模の大きさを挙げられる。これは現存で11.9×9.8mという大きなもので、焼失住居であった。また弥生時代末～古墳時代初頭に比定される第24号住居跡からは廃棄された住居が少しづつ埋没していく過程で多量の土器片を投棄した状況を表わす出土状況を確認できた。この他の住居跡についても、ベッド状遺構や土手をもつpitなど様々な居住施設が確認されており、住居内の居住空間を考える上でも新たな資料提供となった。また方形周溝墓からは多くの供獻土器が出土しており、これらの土器の中にはブリッジをはさんで接合関係がみられるものもあった。これらの土器からこの方形周溝墓は4世紀後半～5世紀初頭というかなり新しい時期のものであることがわかっている。また、第1号墳は5世紀後半の時期が考えられるがこの周溝からは太刀も出土しており、古墳の形態やこの時期の周辺地域との関係と合わせて考えても興味深い。

第2節 遺構と遺物

1. 住居跡

第1号住居跡（第2・3図）

位 置 B・C-1・2グリッド

規模・形状 5.0m×5.8m。隅丸長方形。

床・壁 西壁の一部で確認された高さ10cmほどが最も残りの良いところであった。床は堅く叩き締められ、ほぼ平らに造られている。

炉 地床炉で住居のほぼ中央に、2か所の焼土がみられる。規模が大きく、枕石をもつ西よりの炉の掘り方は61cm×52cm、深さは16cm程度。焼土層は5cmくらいの厚みを持つ。もう一方は炭化物の入った土坑を隣接してもつ焼土の薄い堆積で30cm×20cm程度の広がりがあり、厚さは5cmを測る。なお、住居跡の中央やや南寄りの床面にも直径20cm程度の焼土化した部分が見られた。

その他施設 主柱穴が4基確認された（pit1～pit4）。いずれも直径20cm、深さ40cm前後である。南壁沿いに小穴が5基ほどみられるが、炉の位置などとも考え合わせると、これらは入り口施設の可能性もある。また、東壁と西壁のそれぞれに平行して床面が数cmほど高いベッド状遺構が確認された。炉のそばに22cm×20cmの平たい石が置かれている。

出土遺物（第4図）

住居中央のGラインからは台付甕、Hラインからは折り返し口縁の甕・単純口縁甕・小形鉢などが出土した。その他では細片のものが多かったが、高壺や壺の底部破片、ミニチュア土器の脚部、土製勾玉の頭部なども見られる。これらの出土遺物などから本住居跡は古墳時代前期（II期前半）に属するものと考えられる。

第2号住居跡（第5図）

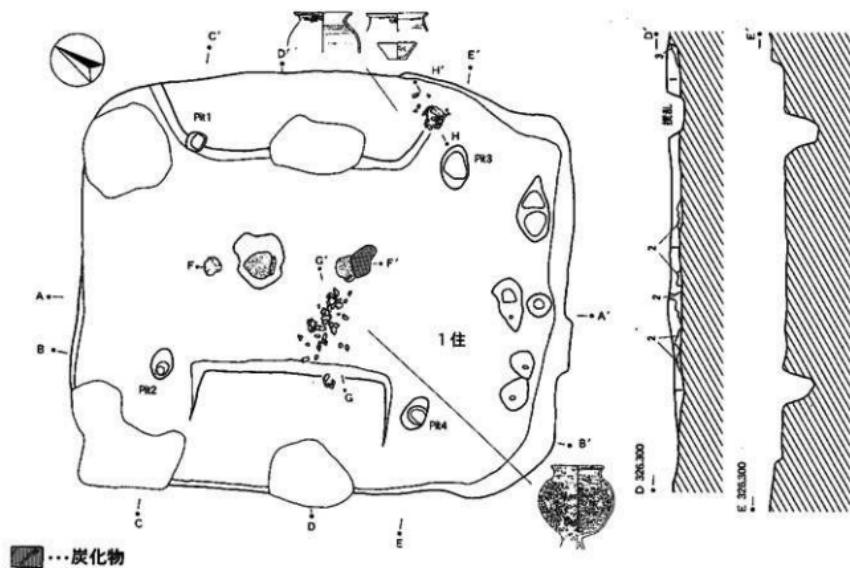
位 置 B・C-3・4グリッド

規模・形状 6.5m×5.5m。不整形円形。

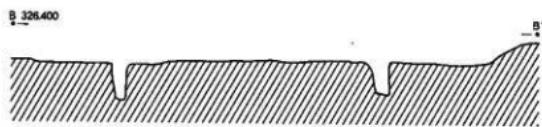
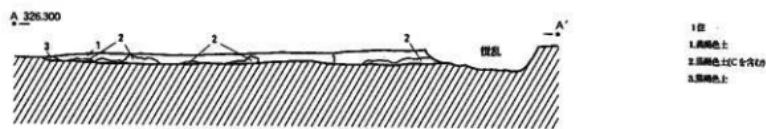
床・壁 床・壁とともに極めて不明瞭だが、床面はなだらかな掘り鉢状を呈する。

炉 炉と想定される箇所が土坑に切られており、検出できなかった。

その他施設 pit19基あまりが確認されたが、そのうち深さ50cm程度のpitが1.5mほどの間隔で横円を描くようにまわっておりこれらが壁沿いにめぐる柱穴と考えられる。このうち南側のpit1とpit2の間隔が他に比べてやや広い事からここが入り口部分と考えられる。



■…炭化物



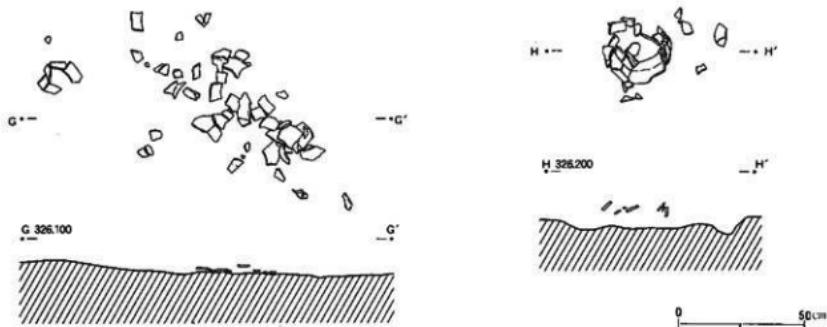
0 2m

(1住炉)

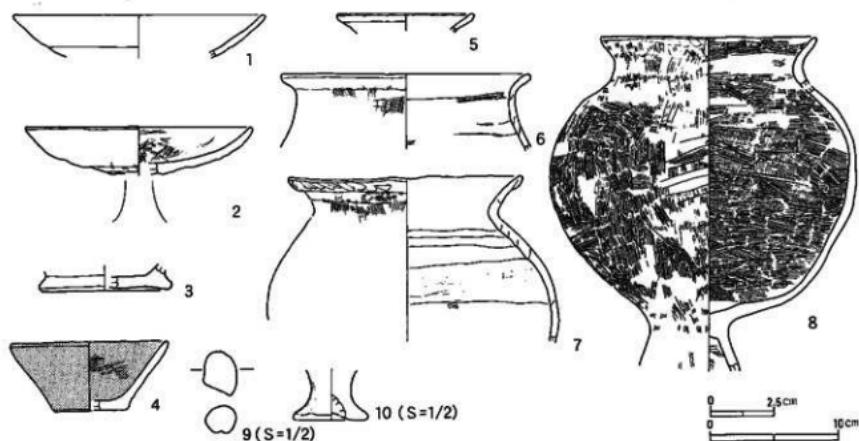


1住炉
1.褐色土被灰子・C含少
2.褐色土C含少
3.褐色土C含少
4.褐色土C含少
5.褐色土

第2図 第1号住居跡



第3図 第1号住居跡 遺物出土状況

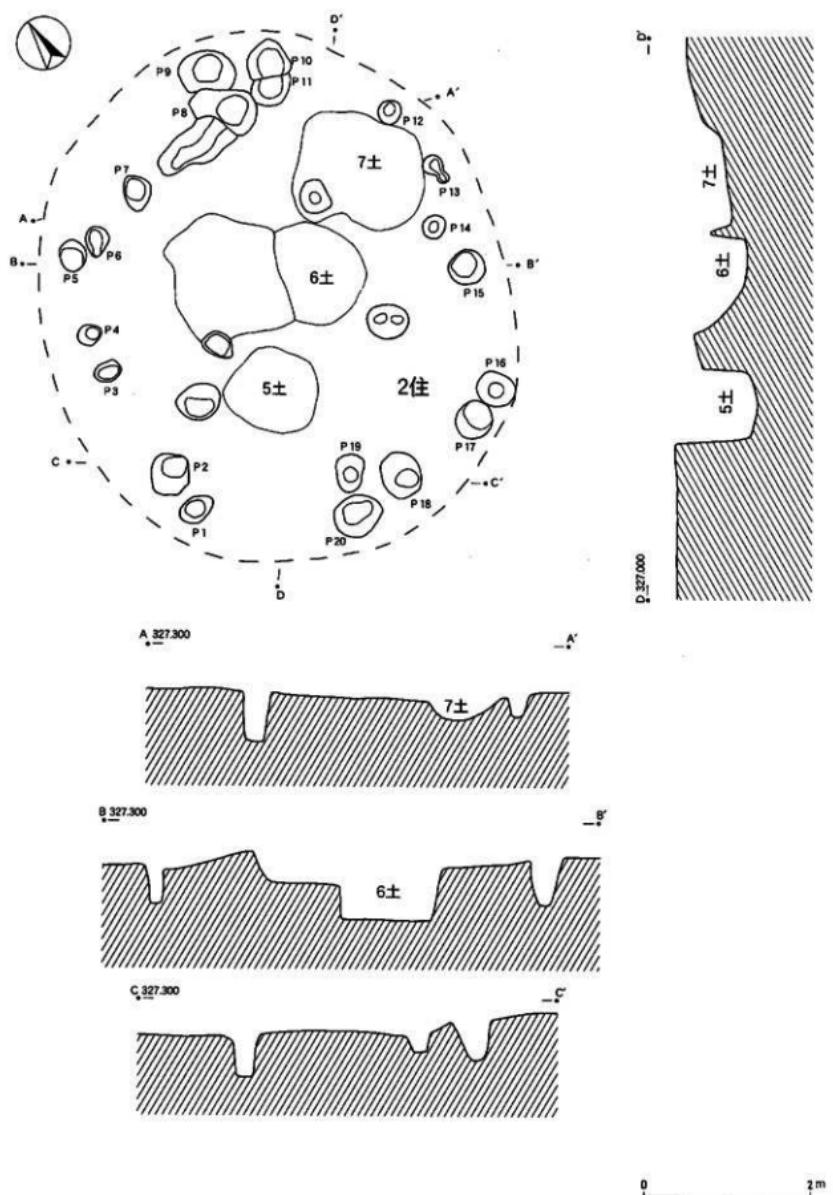


第4図 第1号住居跡 出土遺物

出土遺物 (第6・7図・第1表)

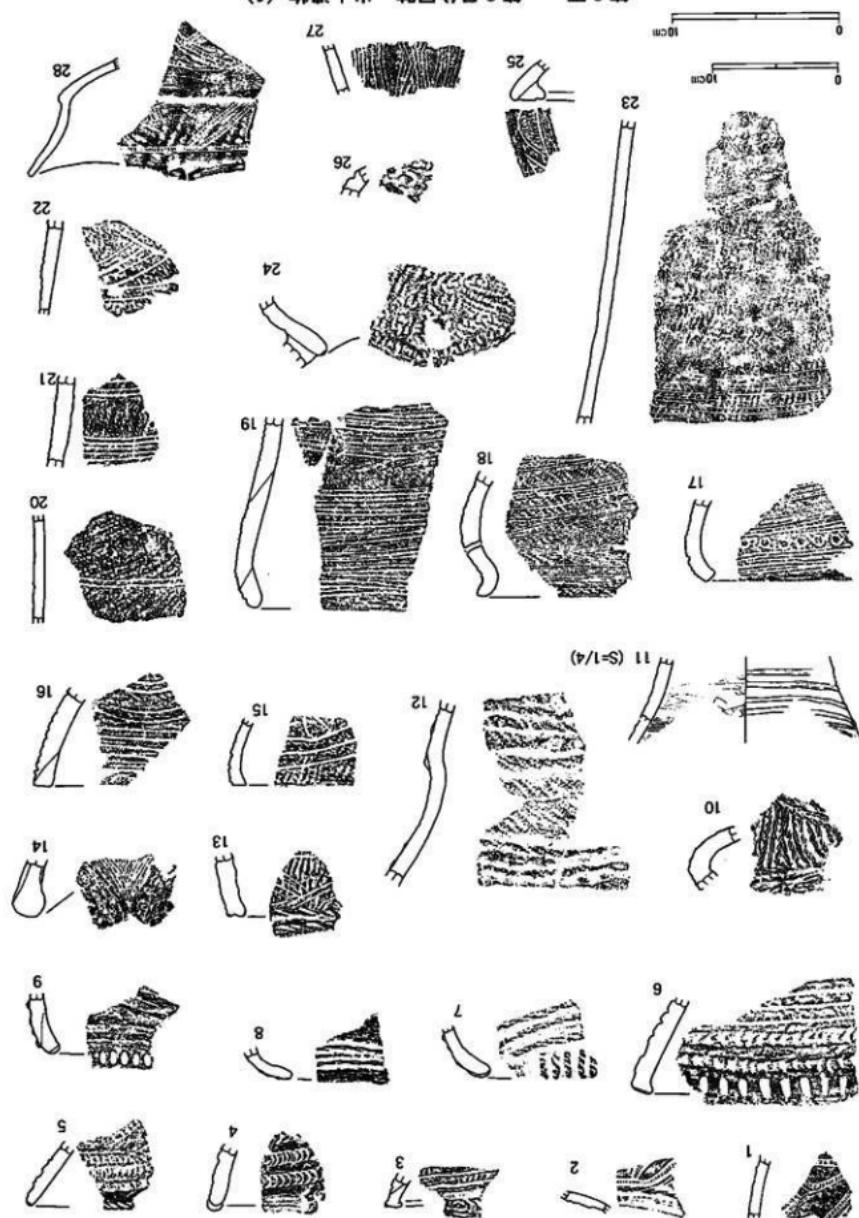
出土した土器のほとんどは諸穢式である。1~6は爪形文がみられる土器で特に1・2には幅が狭く細かい爪形文が施されている。7~12は浮線文系、13~23は沈線文が施された土器である。13の口縁には内面端部と外面端部にそれぞれ斜方向の刺みが施される。17には半裁竹管による円形刺突文も施されている。24は比較的粗い縦文が施された口縁部である。口縁直下の突起は欠損している。25は浅鉢、26には爪形状の刺突が施されている。27はタテ方向に展開する沈線文が施された諸穢c式である。28は薄手の作りで粗い縦文地に細く細かい連続爪形文でモチーフを描く。屈曲部はやや肥厚しハの字状の刺突が施される。胎土は灰白色、外面には赤彩されていた痕跡が残る。これは関西系の北白川下層IIb式に比定される。

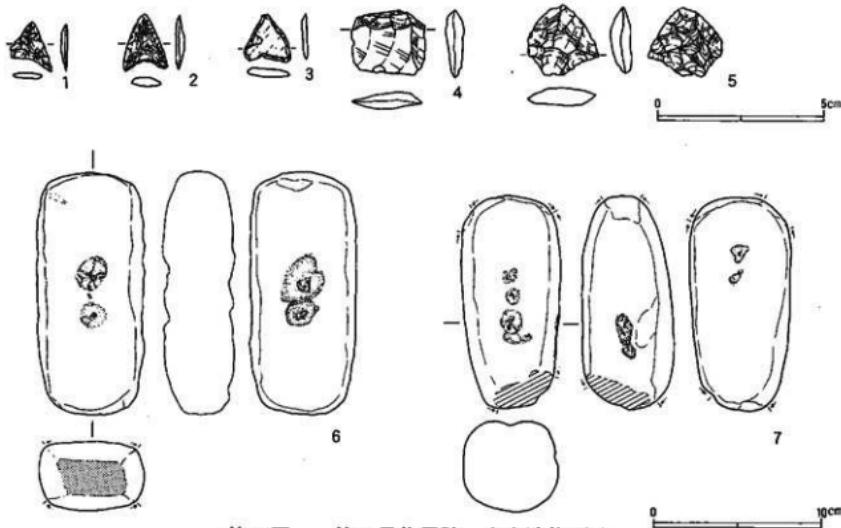
石器については黒曜石製石鎌(1・2・3)、黒曜石製抉入棒器(4)、黒曜石製の両面に調整をもつ剥片(5)、凹石(6・7)がある。3の石鎌は未製品、6・7の凹石はともに磨石としても使われている。



第5図 第2号居住跡

第6圖 第2号住居跡 出土遺物 (1)





第7図 第2号住居跡 出土遺物(2)

第1表 第2号住居跡出土石器一覧(第7図)

器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土位置	備考
1 石鏃	黒曜石	1.5	1.2	0.2	0.22	2住	
2 石鏃	黒曜石	1.7	1.4	0.3	0.47	2住	
3 石鏃	黒曜石	1.4	1.4	0.2	0.43	2住	未製品
4 挟入搔器	黒曜石	2.1	2.2	1.4	0.20	2住	
5 -	黒曜石	2.1	1.1	0.6	1.86	2住	両面に調整あり
6 凹石	砂岩	14.2	6.3	4.1	60.0	2住	磨面・敲打痕あり
7 凹石	砂岩	12.5	6.1	5.4	63.2	2住	磨面あり

第3号住居跡(第8図)

位置 D・E-2グリッド

規模・形状 4.1m×4.1m。隅丸方形。

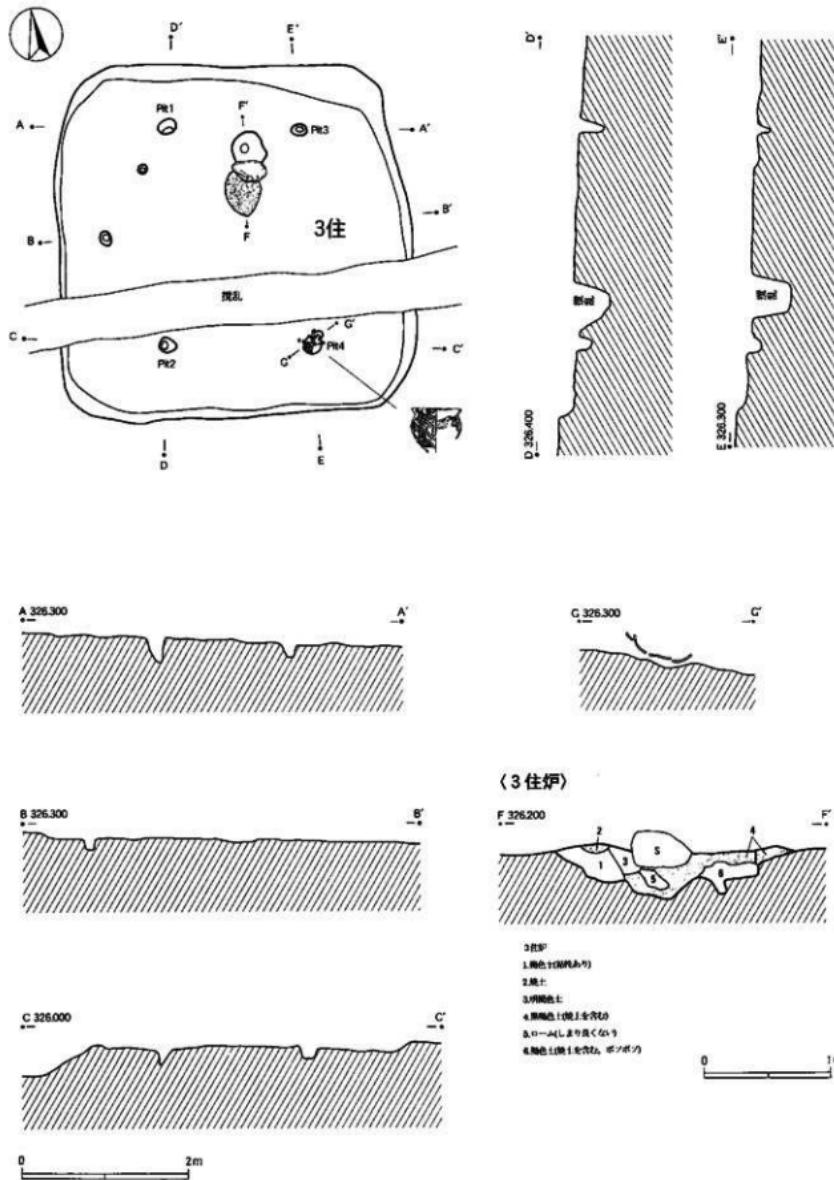
床・壁 東壁の南隅から北隅にかけて高さ15cm前後の残存を確認できた。床はほぼ平らに作られている。

炉 枕石を付設した地床炉で枕石の南側に燃焼部がある。枕石の北側にも多少の焼土などが認められた。焼土の厚さは5cm程度で、炉の範囲は55cm×42cm。

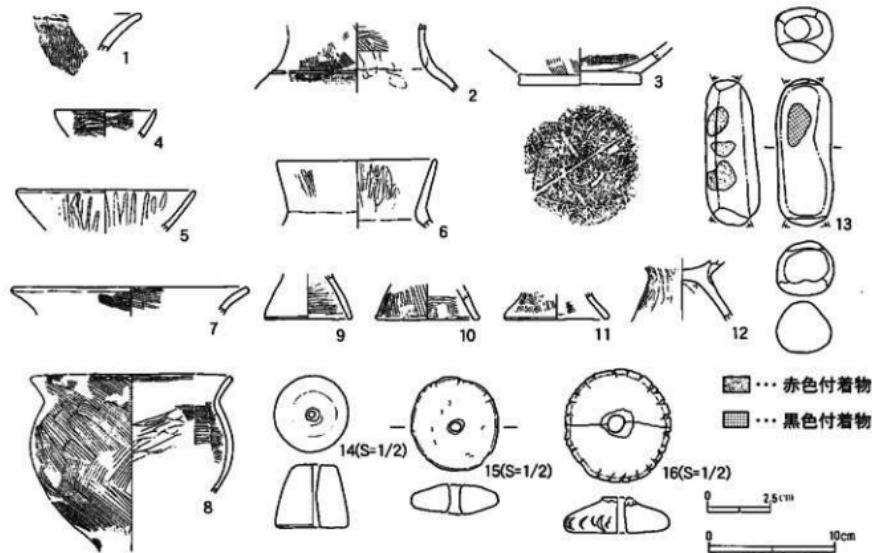
その他施設 主柱穴4基(pit 1-pit 4)。直径は20cm、深さ10~30cmほどである。他にも小pitが2基ほど確認されている。

出土遺物(第9図)

南東隅のGラインで一固体分ほどの口縁部に刻目をもつ単純口縁台付甕、北西隅あたりから紡錘車などが出土した。このほか、単純口縁台付甕、高坏、肩部に弱い沈線をもつ壺などがある。本住居跡からはそれぞれ形状の異なった紡錘車が3点出土しているが、このうち16は半分を欠損していたが第17号住居跡出土の紡錘車と接合した。また表面がよく摩滅して光沢を持つ棒状の石が出土しているが(13)、この石は、長さ8.6cm、幅3.3cm、重さ146gの泥岩で両先端部分に擦痕がみられ、黒色・赤色物質の痕跡も認められる。用途は不明であるが、この種の石は海成堆積層中に見られるもので本遺跡周辺にはこの層がないことから、意図的に遺跡内に持ちこまれたものと考えられる。出土土器から本住居は古墳時代前期(II期後半)ころに比定される。



第8図 第3号住居跡



第9図 第3号住居跡 出土遺物

第4号住居跡（第10図）

位 置 A・B・C-4・5グリッド

規模・形状 東西・南北共に6.3m程度。隅丸方形。第1・12号土坑を切る。

床・壁 壁は南側と西側で確認できたがほぼ垂直に造られている。床は西側半分程度が確認できたに過ぎないがほぼ平らでよく叩き締められている。

炉 残った床側では確認できなかった。

その他施設 主柱穴4本で（pit1-pit4）、いずれも直径40cmほどである。このうちpit4では柱穴内にさらに直径10cmほどの小pitがみられる。南西隅には「コ」字状土手付きpit（pit5）がある。このpitの大きさは直径・深さ共に30cm程度である。また南壁中央やや西よりの壁際から内側に向かって幅・深さ共に10cmほどの間仕切溝が見られる。また南壁の中央付近を除き幅・深さともに10cmの周溝がめぐる。南西隅には扇状に周りより5cmほど低く掘りこまれその中に直径40cm、深さ80cmほどのpitがみられる（pit6）。貯蔵穴か？。

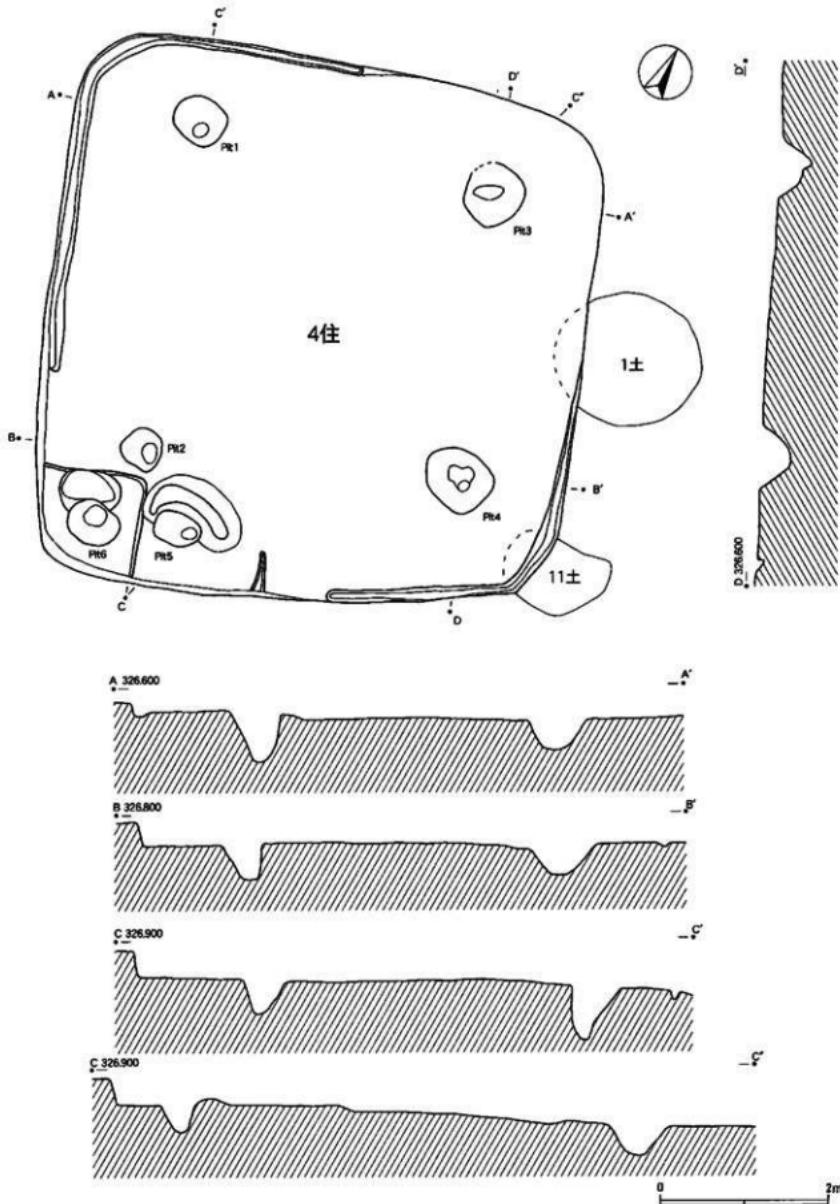
出土遺物（第11図）

貯蔵穴からS字状口縁台付壺の胸部破片が数点まとまって確認された。このほか、壺、単純口縁壺、口縁部に刻目をもつ単純口縁壺、棒状土製品（9）などがある。これらから古墳時代前期（II期後半）ころの時期と考えられる。

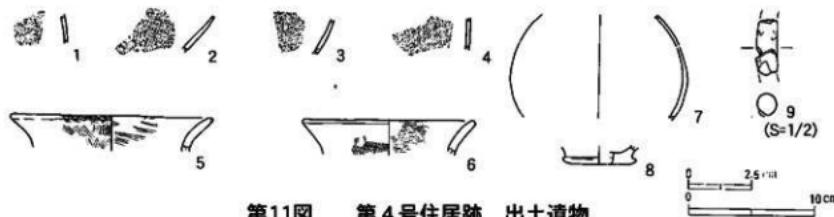
第5号住居跡（第12図）

位 置 C・D-4・5グリッド

規模・形態 5.0m×2.7m（残存）。橢円形。



第10図 第4号住居跡



第11図 第4号住居跡 出土遺物

床・壁 壁は南側の一部が確認されたのみ。床はほぼ平らでよく叩き締められている。

炉 地床炉。45cm×25cmの範囲。焼土は5cmほどの厚さをもつ。

その他施設 柱穴は明確な形では確認されなかった。

出土遺物（第12図）

頸部の長い形態と考えられる折り返し口縁壺、台付壺の脚部などがある。頸部の長い折り返し口縁壺の存在などから、弥生時代終末から古墳時代前期初頭（I期前後）の住居跡と考えられる。

第6号住居跡（第13図）

位置 C-7グリッド

規模・形態 4.25×3.65m。楕円形。

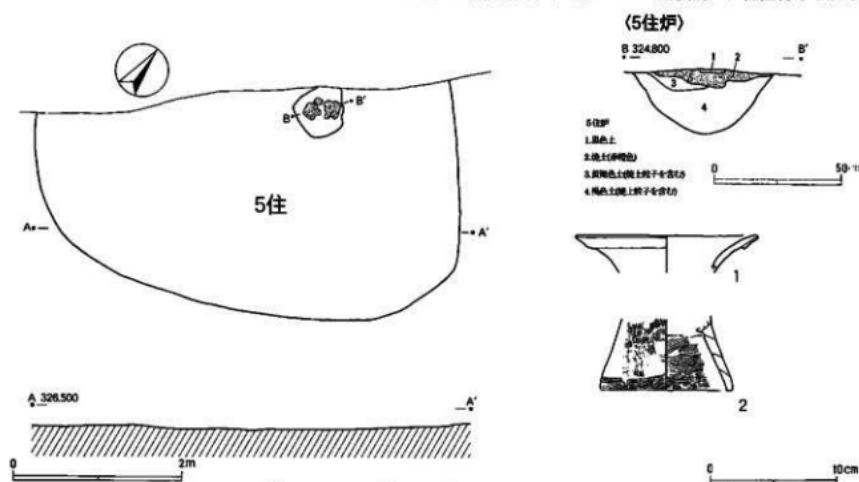
床・壁 壁は全周にわたり20~50cmほどの高さで確認され、ほぼ垂直に造られている。床はほぼ水平で堅く叩き締められているが壁際ではやや軟弱である。

炉 直径60cm程度の地床炉。焼土の厚さは5~10cmほど。

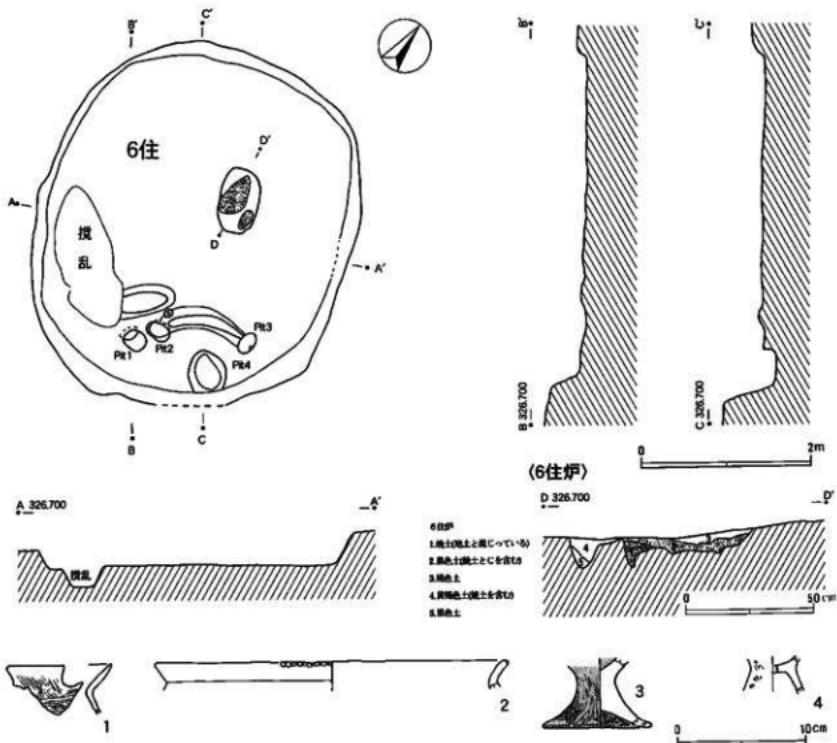
その他施設 柱穴については明確にできなかった。U字状の土手が2重にまわるpitがあるが（pit 4）このpitは直径・深さともに30cm前後である。

出土遺物（第13図）

口縁部に刻み目を持たない単純口縁壺、台付壺の台部、高壺の脚部などが出土している。遺物は良好ではないが、楕円形の住居プランなどから弥生時代終末から古墳時代前期初頭（I期ないしI期以前）に位置付けられる。



第12図 第5号住居跡と出土遺物

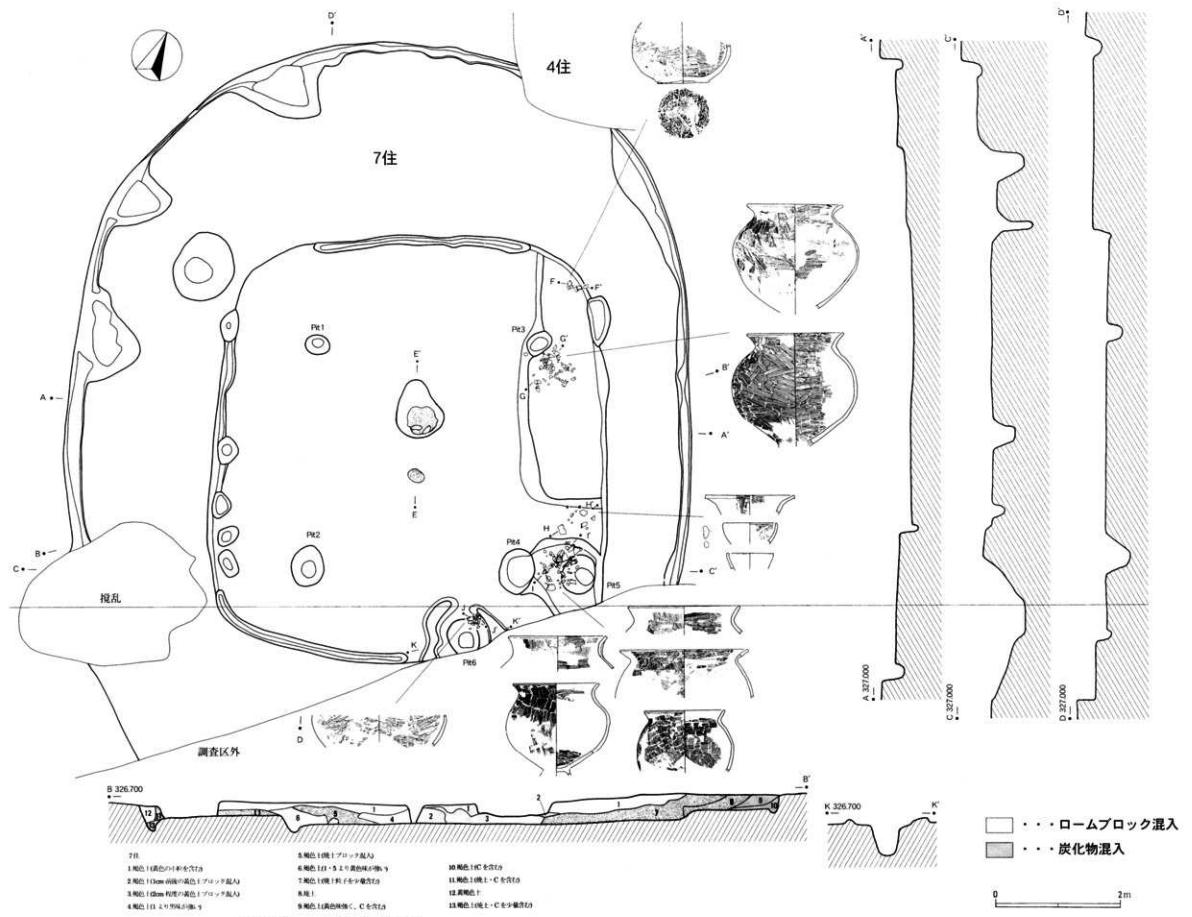


第13図 第6号住居跡と出土遺物

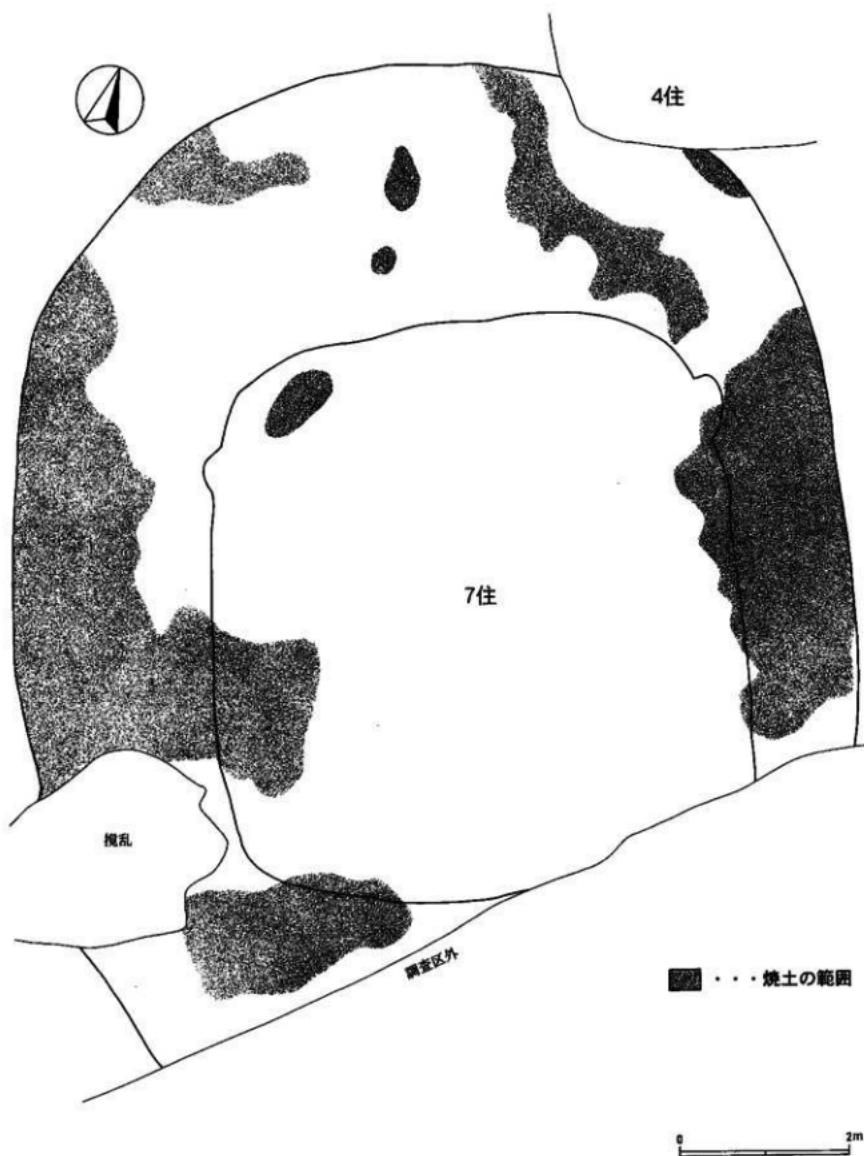
第7号住居跡（第14・15図）

位 置 Z・A・B-5・6・7グリッド

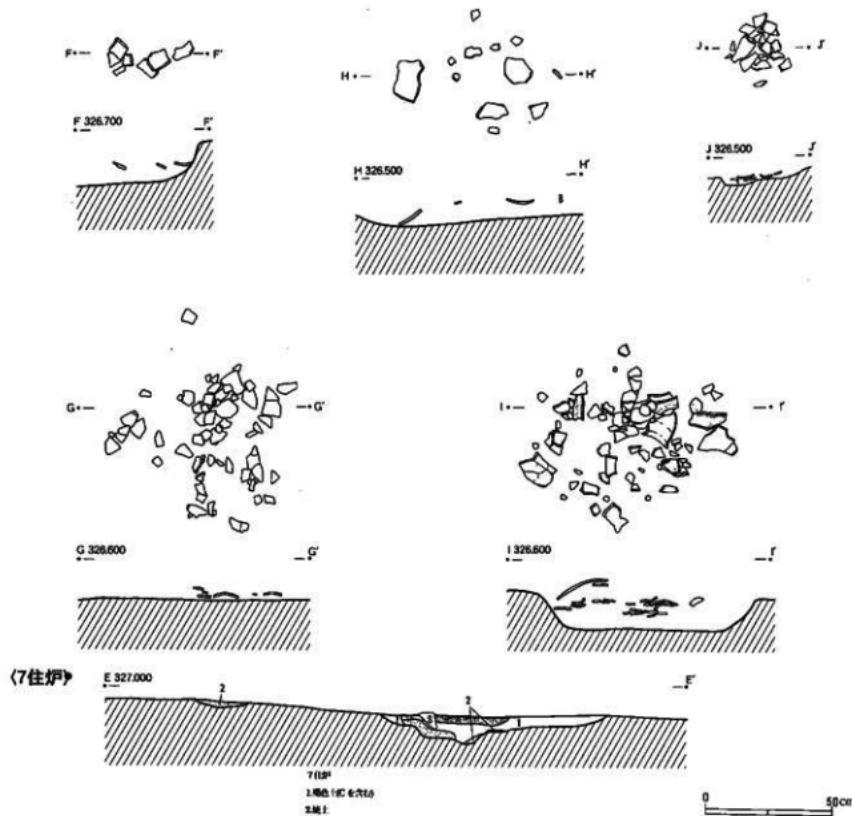
規 模・形 状 $11.9 + \alpha \times 9.8\text{m}$, 楕円形。焼失住居。本住居跡は発掘調査時点では大形住居の中央にもう1軒別々の住居が掘りこまれているという2軒重複の住居であると認識されていたが、土層の観察や焼土の分布範囲などから中央部分の掘りこみも、外側の住居の掘りこみと同時に存在した事が確認された。このことから、住居の形態は規模の大きなベッド状造構を周囲に伴う珍しい形となる。遺物の出土状況は下段の床面などに多く見られることから、居住空間はこの下段を中心としたものと考えられるが柱穴は下段に見られるのみで、これらの柱穴と下段の掘りこみから考えると屋根をかけた時の規模は通常の住居規模と変わるものではなく上段の幅広のベッド状の施設がどのような状態で使われていたのか不明である。また上層を詳しく観察すると、焼土が壁際から中央へ向かって流れ込んでいる様子が見られるが、これら焼土とともに黄褐色のロームブロックを多く含む土も住居中央付近で特に多く見られる。これは焼け落ちた住居の窪みに多量の土をかけたことによるものと考えられる。すなわち消火を早めるためだと、火事の痕跡を早く消し去るなどという何らかの理由によって、鎮火後意図的に土をかけたものと想定される。以下、住居跡の第9については欠番として記載を進める。



第14図 第7号住居跡

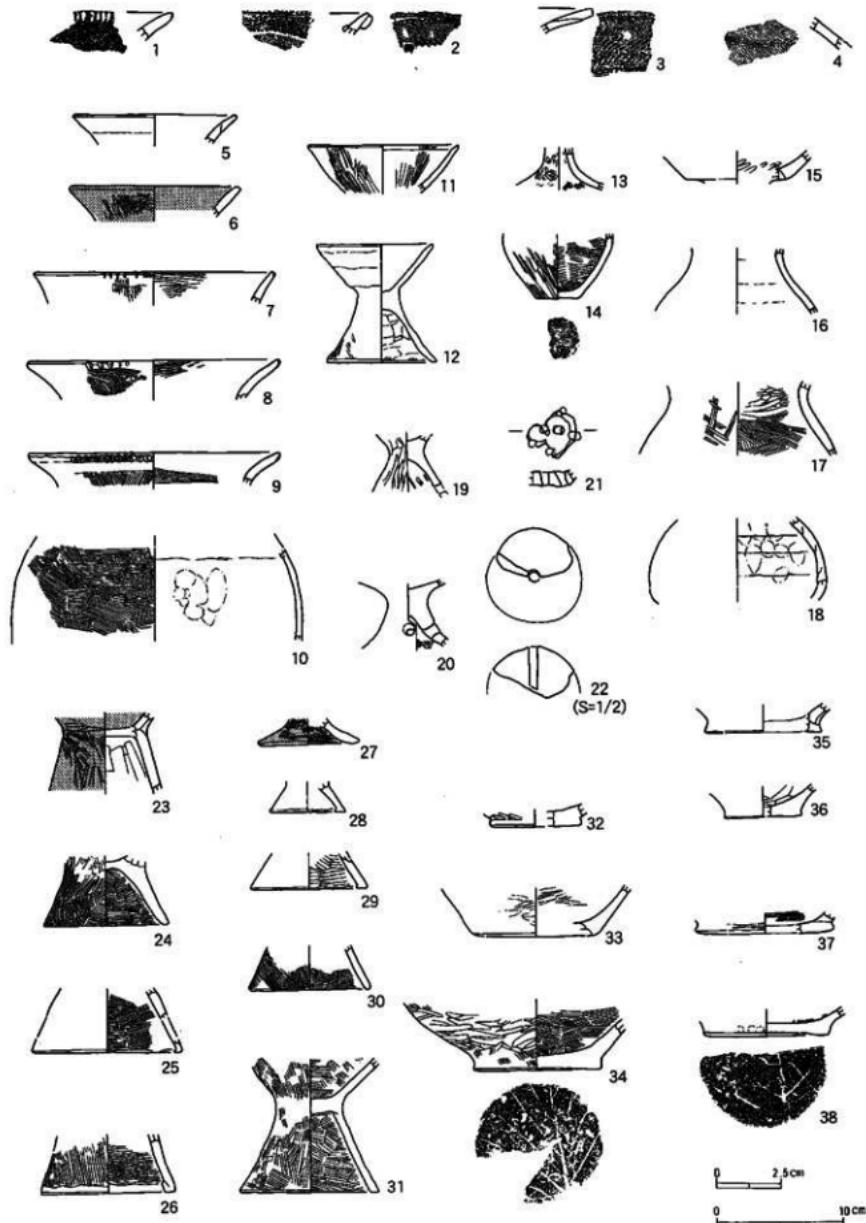


第15図 第7号住居跡 焼土検出状況

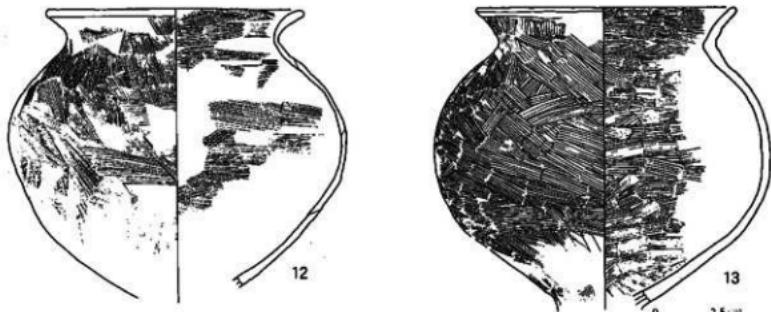
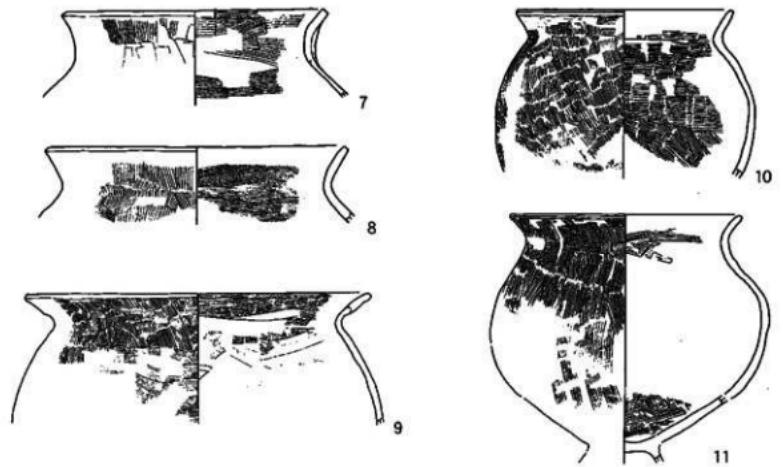
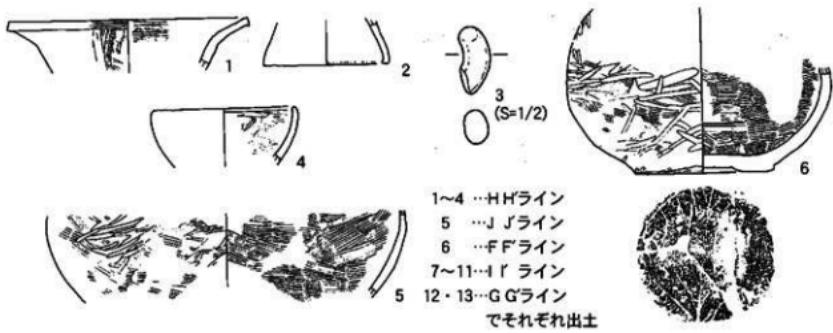


第16図 第7号住居跡 遺物出土状況・炉

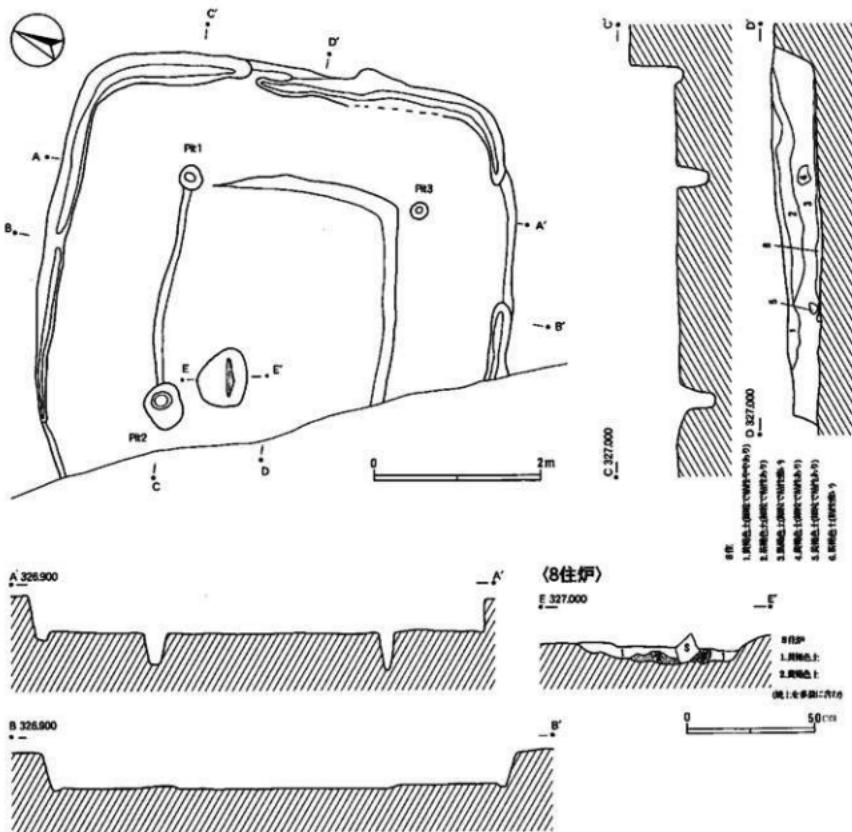
- 床・壁** 床は堅く叩き締められた良好な状態で検出された。多少の凹凸は見られるものの全体としてはほぼ平らに造られている。上段部分についてもよく叩き締められている。この上段の床面からはほぼ全周にわたって焼土が検出されているが、直に接した部分では熱のため床が細かくひび割れていた。壁については上段では高さ約20cmほどの残りで南壁などを除き確認された。下段については南東隅付近を除き高さ15cmほどで確認された。
- 炉** 2個の枕石を持つ地床炉で住居跡の中央やや北よりに位置する。周囲には炭化物が飛散している。炉の範囲は90cm程度でその南側にも焼土が認められた。焼土の厚さは5cm程度。
- その他施設** 下段において主柱穴が4基確認された(pit 1～pit 4)。いずれも直径30cm、深さ50cmの大きさである。上段の北西側の壁際では直径40cm前後、深さ60cm前後のpitが4基確認された。壁柱穴の可能性も指摘できよう。同じようなpitは下段の北西壁際でも見られる。下段の南壁東よりには半円形の土手を持つpit 6が、また南東隅では直径50cm、深さ40cm程度のpit 5がみられる。pit 5・pit 6からはそれぞれ土器が出土している。これらは貯蔵穴であろうか。また下段の東壁北よりでは高さ5cm前後のベッド状遺構が確認された。下段・上段とともに幅10～20cm、深さ10cm程度の周溝がほぼ全周している。



第17図 第7号住跡 出土遺物 (1)



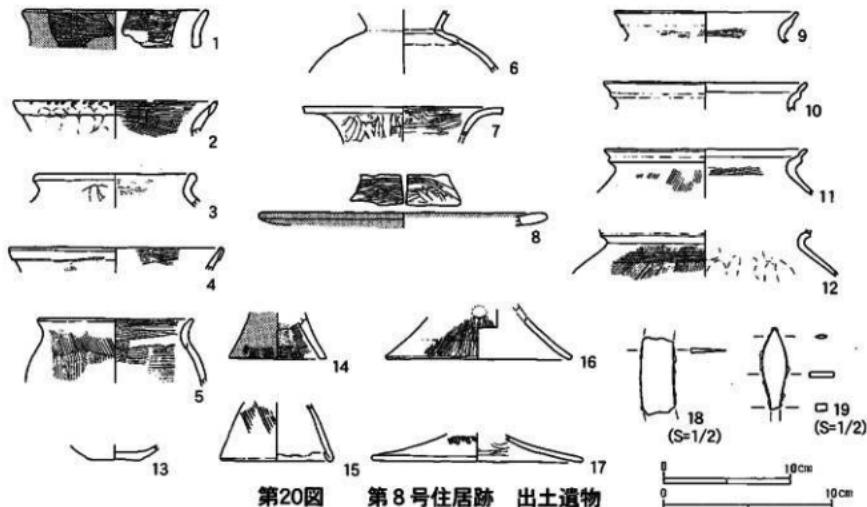
第18図 第7号住居跡 出土遺物 (2)



第19図 第8号住居跡

出土遺物 (第17・18図)

遺物は下段において多量にみられた。上段からの出土はきわめて少ない。ベッド状遺構の上、Fラインからは壺の胴部下半 (第18図-6) が、同じくGラインからは単純口縁台付壺の台部を欠損したものが2個体 (第18図-12・13) 出土した。Hラインからは壺口縁部や小形鉢、土製勾玉などの細かい破片が集中している (第18図-1~4)。pit 5からは単純口縁壺が破片も含めて数個体出土した (7~11)。この他口唇部に刻みをもつ壺の口縁 (第17図-1・7・8・9) や繩文帯をもつ壺 (第17図-2・3・4)、高坏の完形品 (第17図-12) や複数の孔をもつ壺 (第17図-21)、S字状口縁台付壺の影響を受けたと考えられる台部 (第17図-26)、小枝状の棒に粘土を巻きつけて形作った痕跡が中心部に残る土製品 (第17図-22) などがある。このようななつくりの土製品は第1号墳でも出土している (第75図-11)。住居形態、遺物などから弥生時代最終末～古墳時代前期 (I期前半～II期前半) の住居跡と考えられる。



第20図 第8号住居跡 出土遺物

第8号住居跡（第19図）

位置 Z・A-7・8グリッド

規模・形状 $5.1(+\alpha) \times 5.6m$ 。隅丸方形。

床・壁 床は堅く叩き締められ、多少の凹凸は見られるものの全体的にほぼ平らに造られている。壁は西壁の全てと南壁の一部が切られているほかは、高さ50cm前後でほぼ垂直に立ちあがっているのが確認された。

炉 枕石を持った地床炉で炭化物などが5cmほど堆積しておりその下に厚さ5cmほどの焼土が確認された。

その他施設 柱穴は直径30cm、深さ60cm前後のものが3基確認された（pit 1～pit 3）。4基目のpitは調査区外にあるものと考えられる。また途切れ途切れではあるが幅・深さとともに10cm前後の周溝が巡っている。その他、柱穴間を結ぶようにして南東北壁沿いに「コ」字状のベッド状造構が確認された。

出土遺物（第20図）

単純口縁甕、口縁部に刻目を持つ単純口縁甕、S字状口縁台付甕、高环、器台などがある。1の外面、8の壺口縁の内面、14の脚部外面には赤彩が施されている。このうち9～12のS字状口縁台付甕は口縁部に刺突が見られず肩部に横走するハケ目をもつものである。またこの住居跡からは鉄製品も2点出土している（18・19）。19は鎌であろう。住居跡形態や遺物などから、古墳時代前期（II期後半前後）の時期の住居跡と考えられる。

第10号住居跡（第21図）

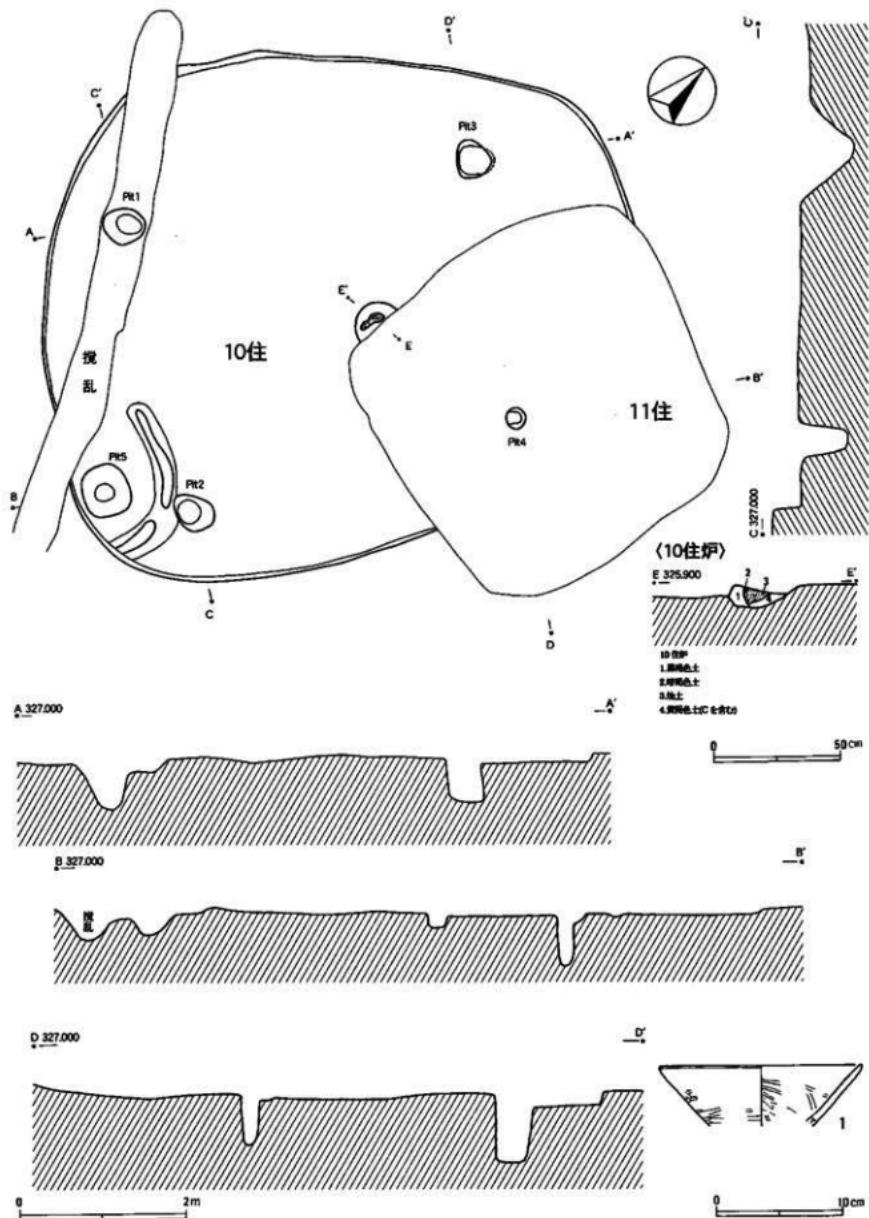
位置 D・E-8・9グリッド

規模・形態 $6.0 \times 7.1m$ 。楕円形。第11号住居跡に切られる。

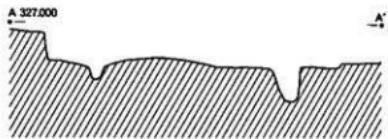
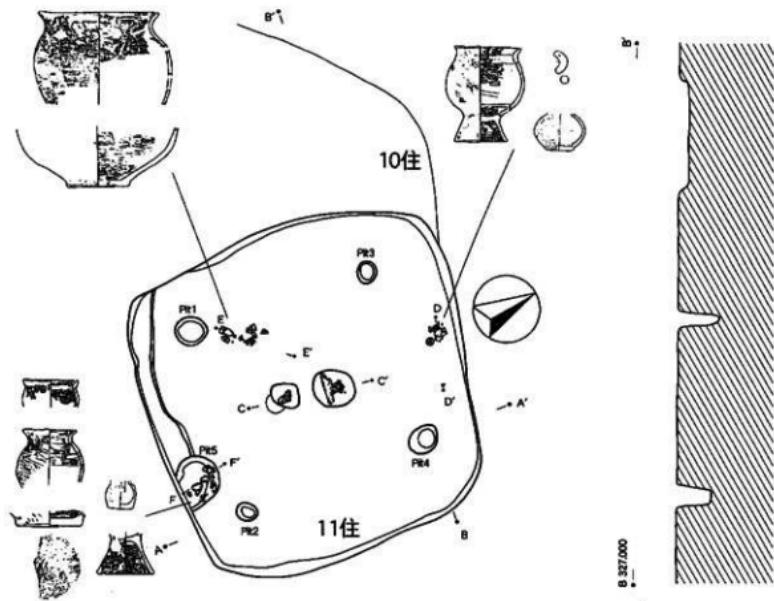
床・壁 床は一部が削平されている他は堅く叩き締められた良好な状態で検出された。壁は南東部分で30cmほどの残りが確認できたほかは極めて不明瞭な状態であった。

炉 地床炉であるがその大半を第11号住居跡によって削平されており、焼土部分が僅かに残っているにすぎない。直径40cmほどの範囲と考えられる。

その他施設 柱穴は4基確認されたが（pit 1～pit 4）いずれも直径・深さとともに30cm前後である。なおpit 4は第11号住居跡の炉に切られて検出された。東南隅において弧状にまわる土手をもつpit（pit 5）が

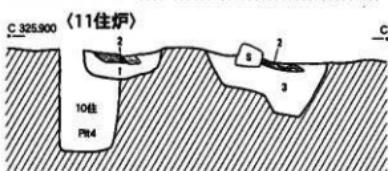


第21図 第10号住居跡と出土遺物



-A'

0 2m



-C'



-E'

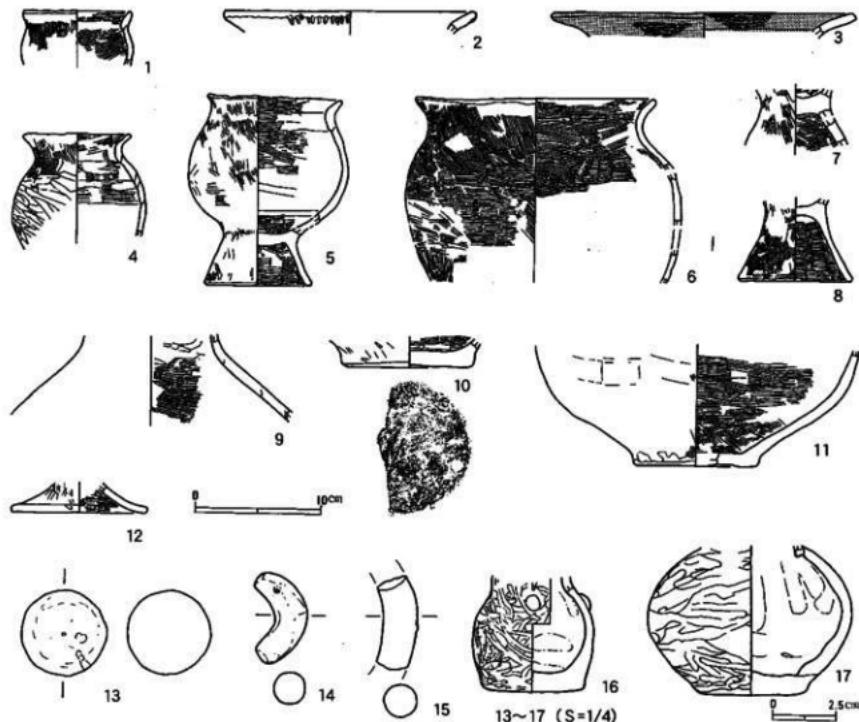


-D'



0 50cm

第22図 第11号住居跡



第23図 第11号住居跡 出土遺物

確認された。直径は60cm程度、深さは25cmほどである。

出土遺物（第21図）

遺物はきわめて少量で、図示できたものには高杯がある。住居形態、遺物などから弥生時代終末～古墳時代前期初頭（～I期前半）の時期に比定される。

第11号住居跡（第22図）

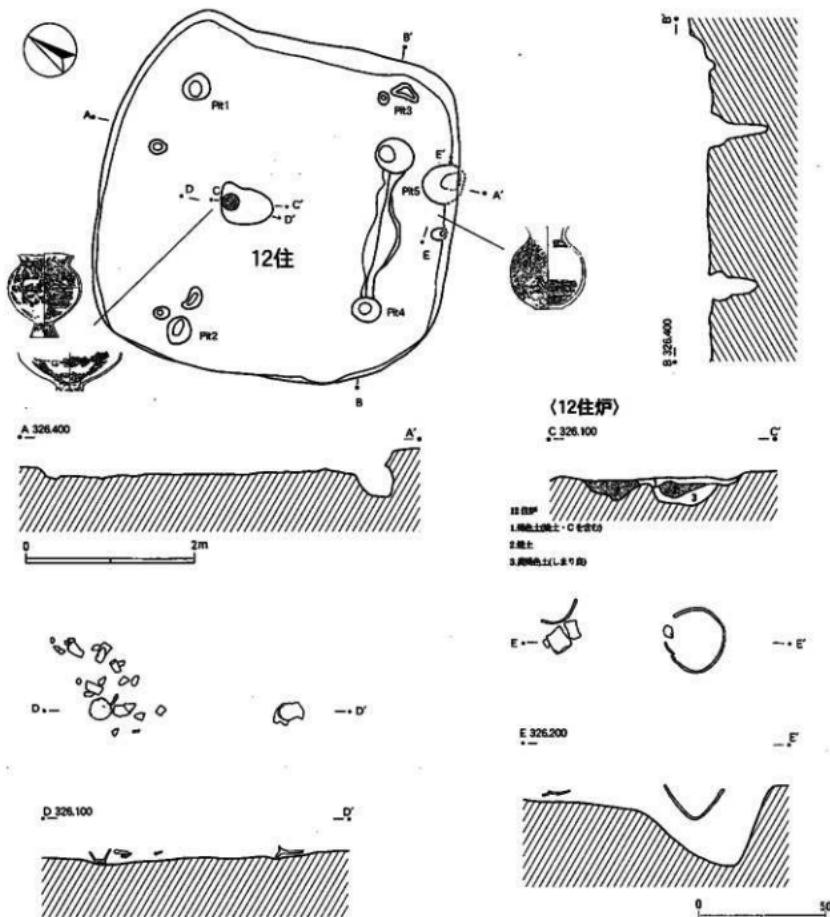
位置 E-8グリッド

規模・形態 3.9×3.8m。隅丸方形。切り合い関係でみると新旧関係は、新しい順に第1号方形周溝墓→第11号住居跡→第10号住居跡である。

床・壁 床は堅く叩き締められた良好な状態で確認された。壁は南東隅で30cmほど、北壁で10cm前後の高さが確認された。

炉 北側の枕石を持った地床炉はその範囲が50×45cmで厚さ10cmほどの焼土が確認できた。南側の焼土は厚さが8cm程度で40×30cm程度の範囲で確認された。この南側の焼土は第10号住居跡のpit 4を切ってつくられている。

その他施設 柱穴はpit 1～pit 4で、いずれも直径20cm、深さ40cm前後で検出された。南壁の一部に高さ5cm

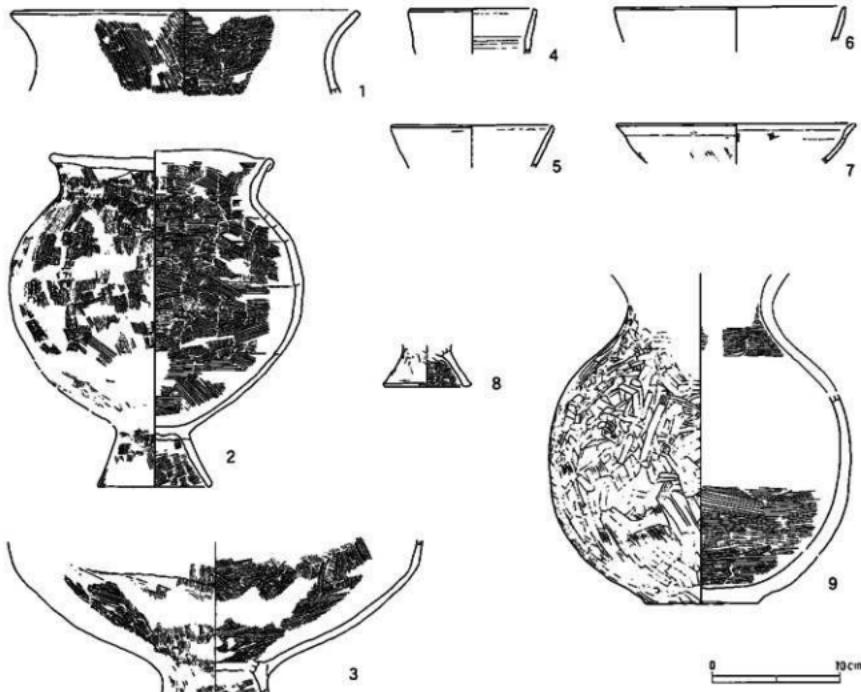


第24図 第12号住居跡

程度のベッド状遺構が見られる。そのベッド状遺構の切れ目には直径50cmほどのpit 5がみられ、中からは土器が出土している。貯蔵穴であろうか。

出土遺物（第23図）

南壁沿いのpit 5のFラインから小形壺や台付壺の脚部、壺底部、壺形のミニチュア土器が出土した。このミニチュア土器（16）は口縁部を欠くが良く磨かれ、外面は黒色を呈す。また外面の肩部には円形浮文が1つ付けられている。北壁よりのDラインからは小形台付壺（5）とミニチュアの壺形土器（17）、土製勾玉の完形成品（14）が出土した。またpit 1付近のEラインからは台付壺の胴部上半と底部が出土しているがこれは同一個体ではない。このほか棒状土製品（15）や球形の石（13）なども出土している。住居形態・遺物などから古墳時代前期（二期後半前後）の時期と考えられる。



第25図 第12号住居跡 出土遺物

第12号住居跡（第24図）

位置 E-6・7グリッド

規模・形状 $4.0 \times 4.22m$ 、隅丸方形。

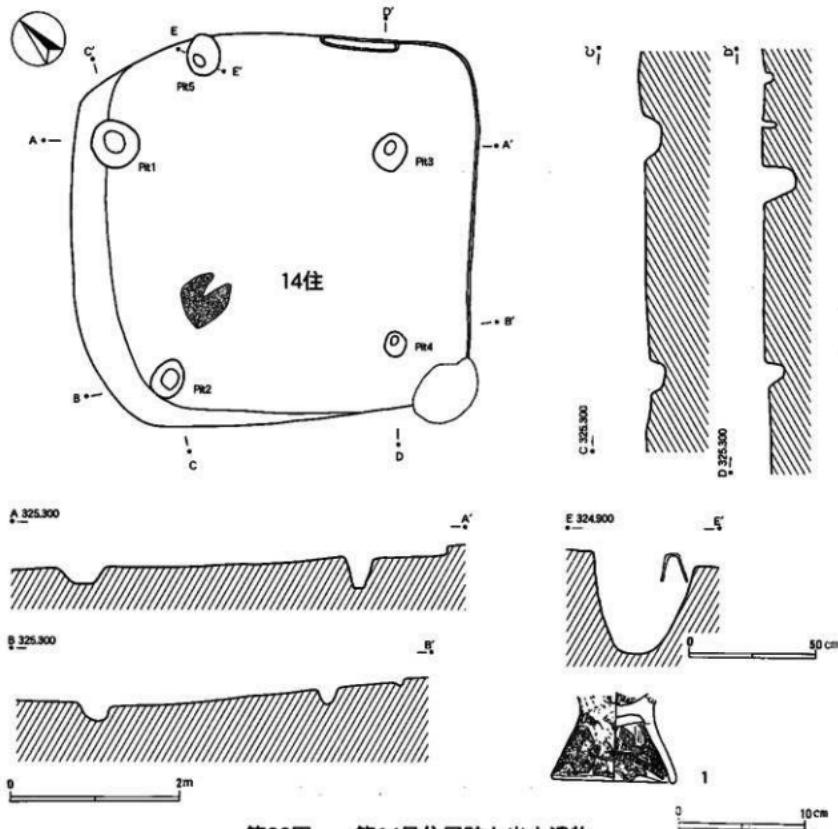
床・壁 床はよく叩き締められれば平らに造られている。壁は南壁を除き高さ10cm前後で確認された。

炉 地床炉で焼土は12cmほどの厚さである。60×40cmの範囲。

その他施設 柱穴はpit 1～pit 4で直径20cm、深さ50cm前後である。pit 3とpit 4とをつなぐようにして高さ5cmほどの土手状の高まりが見られる。この南側には壁に沿ってpit 5があるがこの中から土器が出土している。これは貯蔵穴の可能性もある。

出土遺物（第25図）

炉とはほぼ重なるDラインにおいて台付甕の完形個体と同じく台付甕の胴部下半～台部にかけての破片が出土した。この完形個体（2）は折り返し口縁で内外面ともにハケ調整がなされる。内面のハケについては口縁部付近ではナデ消されている。またpit 5からは口縁部を欠く壺（9）が出土している。この他高杯の破片や小形台付甕の台部などが出土している。遺物などから古墳時代前期（II期前半後）の時期に比定される。



第26図 第14号住居跡と出土遺物

第14号住居跡（第26図）

位 置 H・I-8・9グリッド

規模・形状 4.75×4.65m。椭円形。第28A号住居跡を切る。

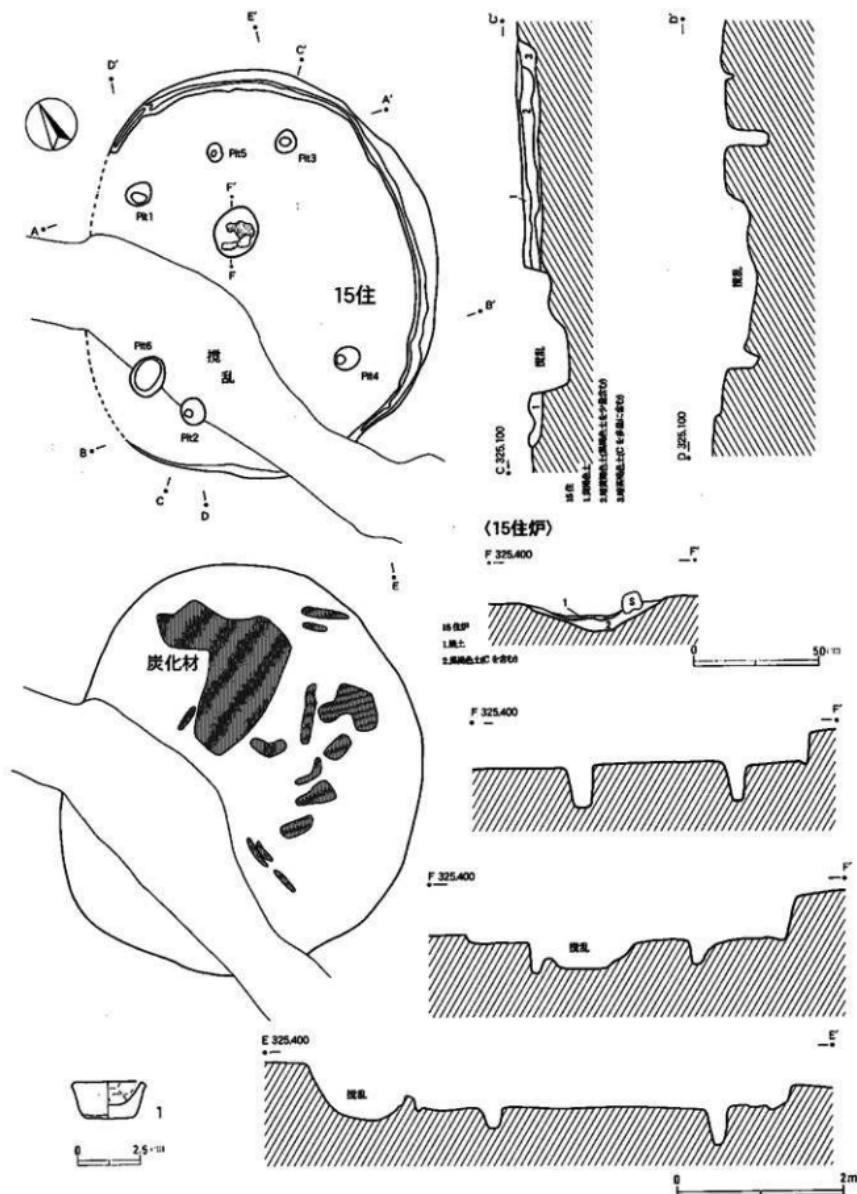
床・壁 床は南側の1/3程度が残っているに過ぎない。壁についても輪郭が確認できたのみである。

炉 削平されているため形態は把握できないが住居跡の中央やや北寄りに焼土ブロックが残っており、ここが炉の位置であると考えられる。焼土の範囲は60×50cm程度。

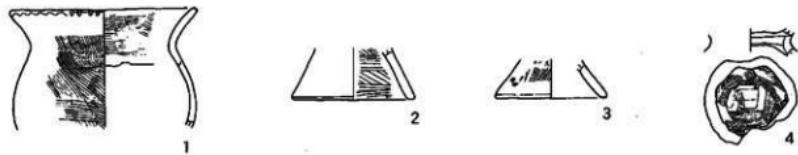
その他施設 柱穴はpit 1～pit 4で直径25cm～55cm、深さ30cm前後である。また第2次調査において北東壁ぎわにpitが確認されこの中から台付甕の脚部が出土した。周溝は南壁でごく一部に確認されたが全周しているかどうかは不明である。

出土遺物（第26図）

遺物はpit 5から台付甕の台部が出土した以外は、土器片が少量確認されたのみである。住居跡の形態などから弥生時代末ころが考えられる。



第27図 第15号居住跡と出土遺物



第28図 第15号住居跡 出土遺物

第15号住居跡（第27図）

位置 I・J-5・6グリッド

規模・形状 4.92×4.06m。梢円形。焼失住居。

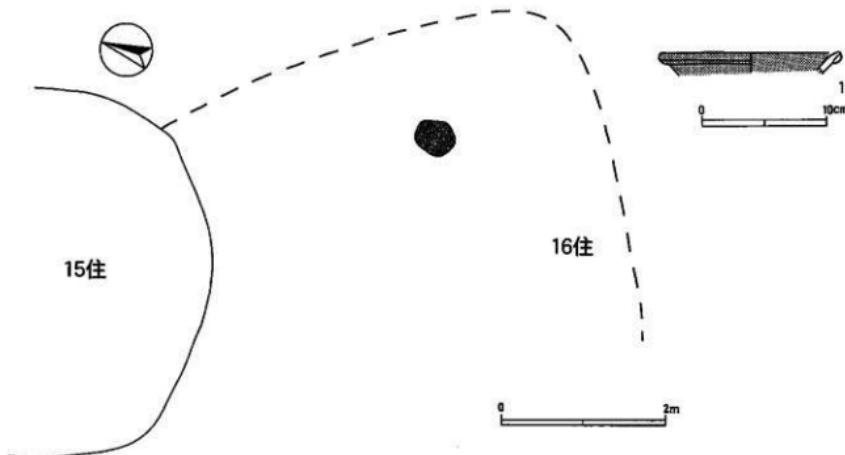
床・壁 床は堅く叩き締められれば平らに造られている。壁は搅乱を受けた箇所以外は高さ50cmほどの良好な状態で確認された。

炉 枕石をもつ地床炉で枕石は「く」字状に2個据えつけられている。枕石の北側に焼土・炭化物などの混じった土が堆積しており、その下には焼土が5cmほどの厚さでみられる。

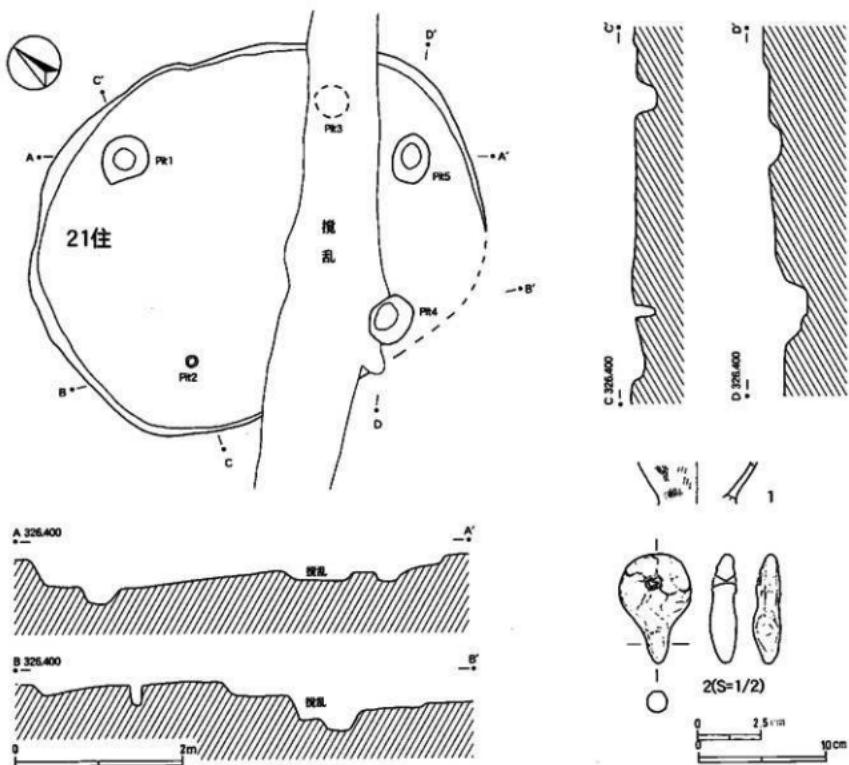
その他施設 柱穴は6基確認されいずれも直径20cm、深さ30cmほどである(pit 1～pit 6)。このうち主柱穴としてはpit 1～pit 4が考えられ、その他のものについては補助的な役割があったものと思われる。また南東隅に半円形状の土手があったものと考えられるが土手の内側にpitは確認されなかった。住居内からは特に北側で多くの炭化材が検出された。

出土遺物（第27・28図）

遺物量は極めて少なく、固化できたものにはミニチュア土器、口縁部に刻目をもつ単純口縁壺、高杯などがある。遺物などから弥生時代最終～古墳時代前期初頭（～I期前半）ころの住居跡と考えられる。



第29図 第16号住居跡と出土遺物



第30図 第21号住居跡と出土遺物

第16号住居跡（第29図）

位置 H-6グリッド

規模・形状 規模は不明だが平面形態は梢円形ないし隅丸方形と考えられる。

床・壁 床は堅く叩き締められほぼ平らに造られている。壁については確認された部分がほとんどなかった。

炉 直径30cmほどの焼土化した部分が認められこの付近に炉があったものと考えられる。

その他施設 柱穴・周溝などは確認されなかった。

出土遺物（第29図）

遺物は土器の細片がわずかにみられたのみであるが折り返し口縁甕などがある。弥生時代末から古墳時代前期ころの時期が想定できる。

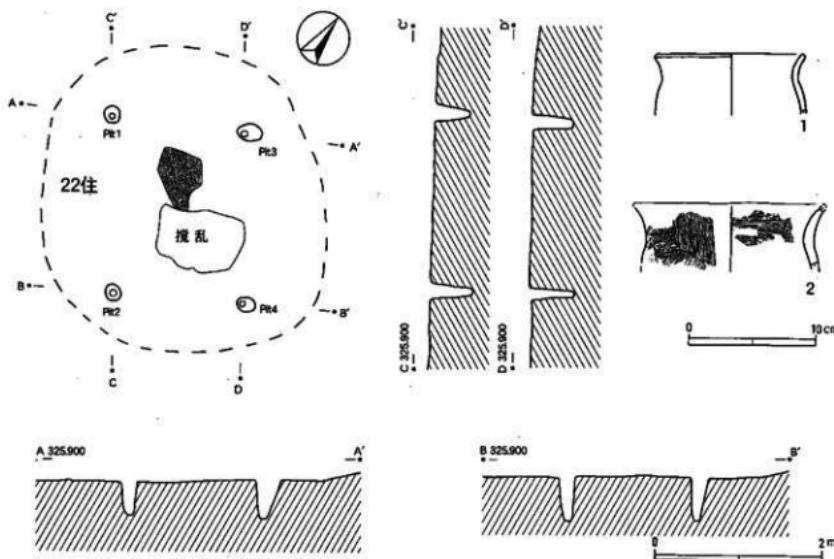
第21号住居跡（第30図）

位置 D-E-3-4グリッド

規模・形状 $3.1(+\alpha) \times 4.2m$ 梢円形。

床・壁 床・壁ともに搅乱のため残りがよくないが、床については残存部分を見る限りでは堅く叩き締められほぼ平らに造られているようである。

炉 住居跡のほぼ中央付近に炭化物・焼土などが薄く認められ、この辺りに炉を想定できる。



第31図 第22号住居跡と出土遺物

その他施設 柱穴は4基検出されているが規格性は認められなかった。擾乱中に柱穴が1基あったとすれば、4本柱穴で形づくりされていた可能性もある。

出土遺物（第30図）

遺物はごく僅かで図化できたものは台付壺と土製品1点のみであるがその他、内外面に赤彩が施された土器片もあった。この土製品には孔が開けられており装身具の一種であったのかも知れない。時期的には弥生時代終末～古墳時代前期ころが考えられる。

第22号住居跡（第31図）

位置 G・H-5グリッド

規模・形状 3.5×3.0m程度の範囲。

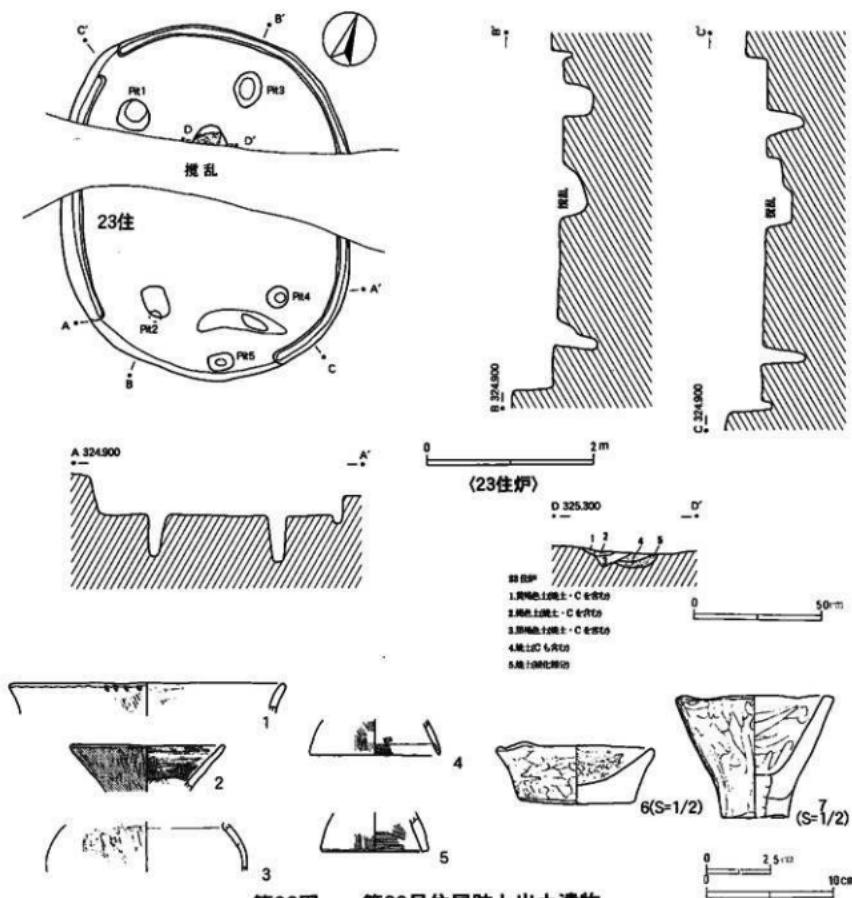
床・壁 床の残る部分では、よく踏み固められほぼ平らに造られている。壁についてはほとんど残っていないかったため、詳細は不明である。

炉 住居跡の中央やや北寄りに焼土の薄い堆積がみられることから、ここが炉であったのであろう。枕石を抜き取った痕跡などは確認されなかった。焼土は一部擾乱に切られている。

その他施設 主柱穴が4基確認された（pit1～pit4）。いずれも直径20cm、深さは40～50cm程度である。

出土遺物（第31図）

1・2ともに小形単純口縁甕の口縁部である。2には内外面ともにハケ調整がみられる。土器・住居形態から時期的には弥生時代末～古墳時代前期ころが考えられる。



第32図 第23号住居跡と出土遺物

第23号住居跡（第32図）

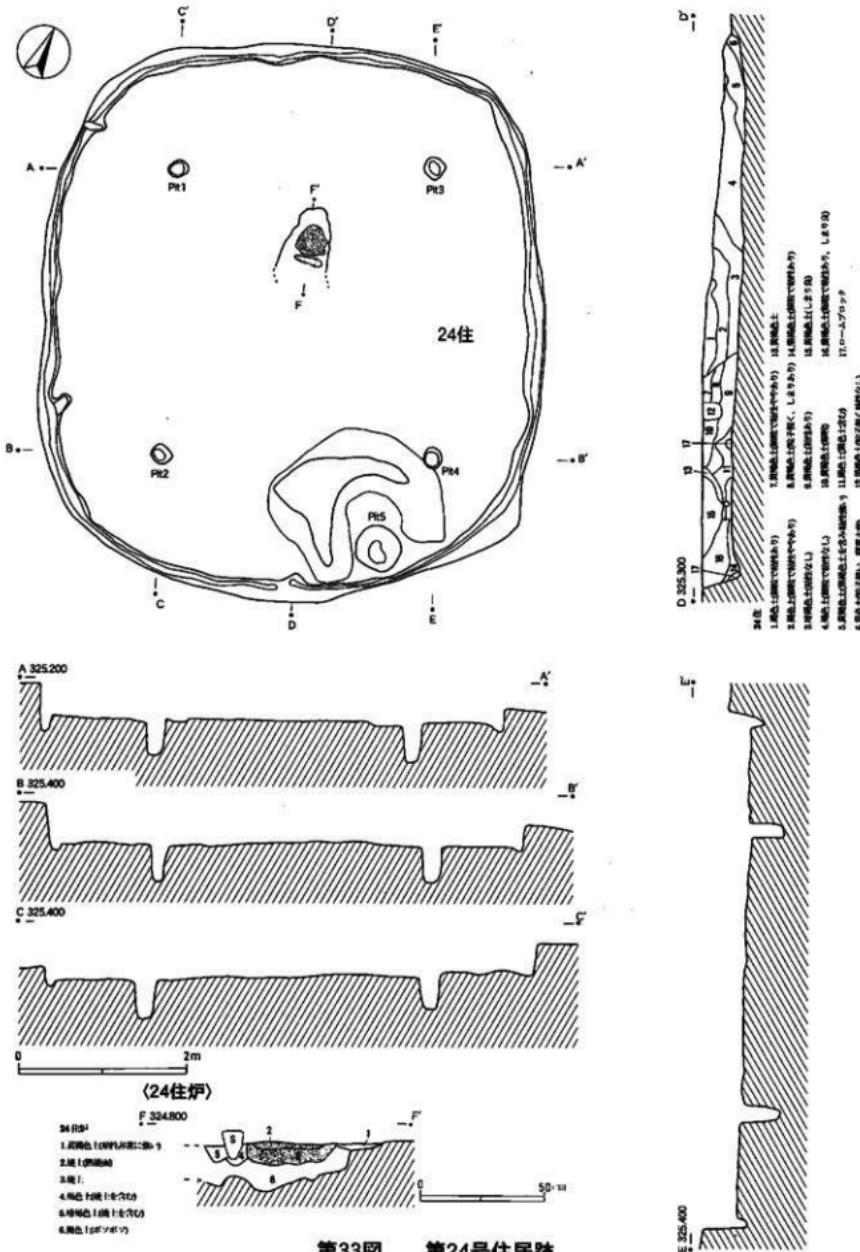
位置 G・H-3・4グリッド

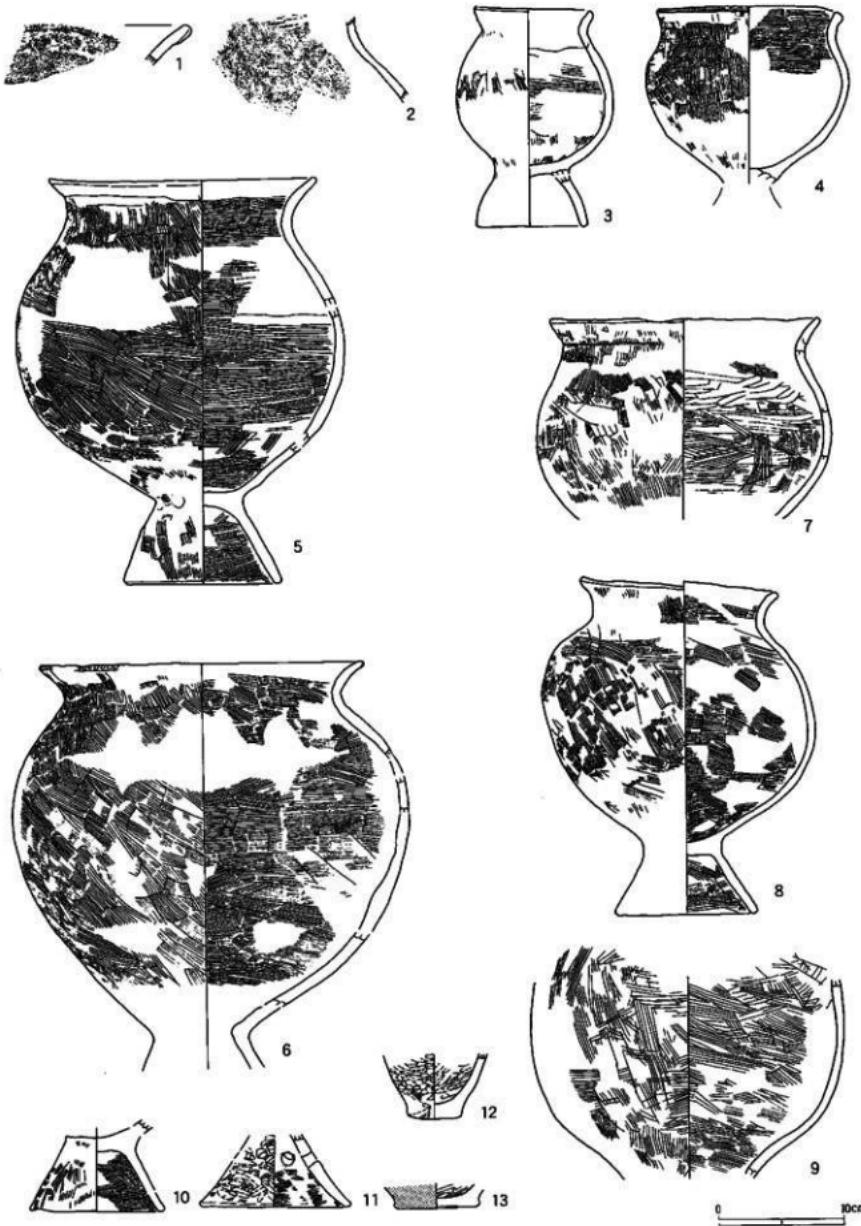
規模・形状 4.05×3.45m。楕円形。

床・壁 床は堅く叩き締められほぼ平らに造られている。壁は南側で30cm前後、北側で20cm前後の高さで確認された。

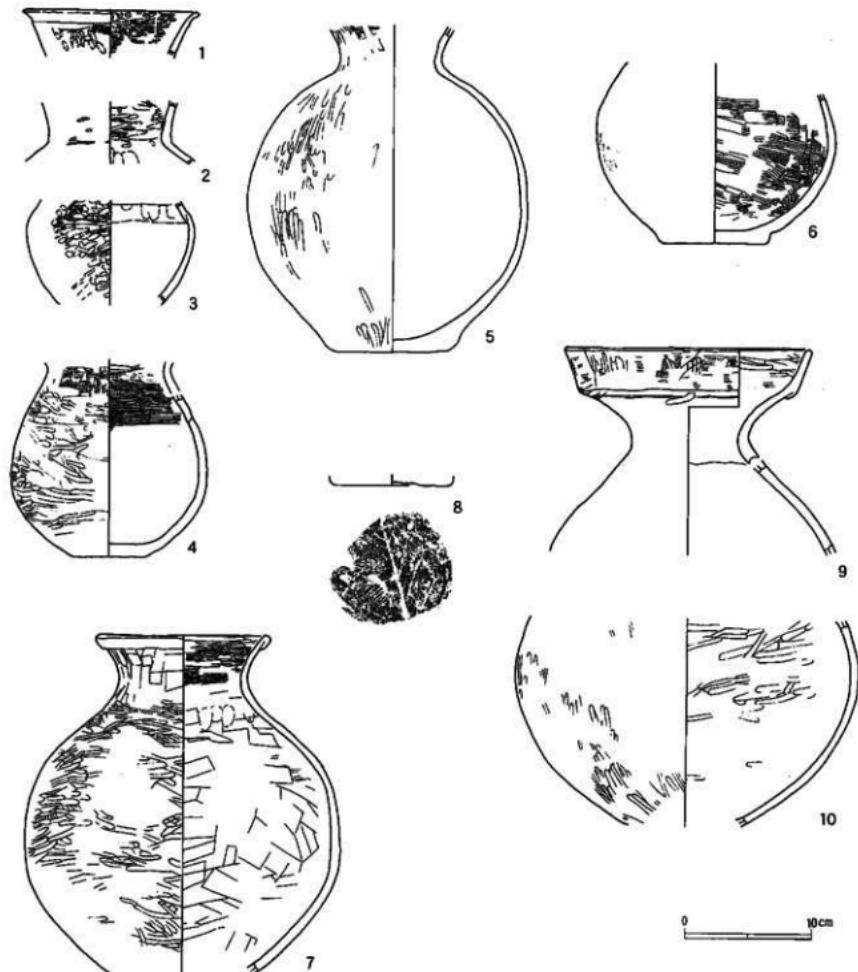
炉 地床炉で炭化物などの入った褐色土を掘り下げる直径20cmほどの焼土面が確認できた。南半分は搅乱により切られているが直径40cmほどの範囲であったものと考えられる。

その他施設 柱穴は4基確認されたがいずれも直径25cm、深さ20cmほどである（pit 1～pit 4）。南壁付近に弧状の土手をもつ直径・深さともに20cm程度のpit 5がある。幅20cm、深さ10cm前後の周溝が南側を除く全周で確認された。炉の位置や周溝の切れ目などからこの南側が入り口部であると考えれば、pit 5は入り口施設の可能性がある。





第34図 第24号住居跡 出土遺物 (1)



第35図 第24号住居跡 出土遺物（2）

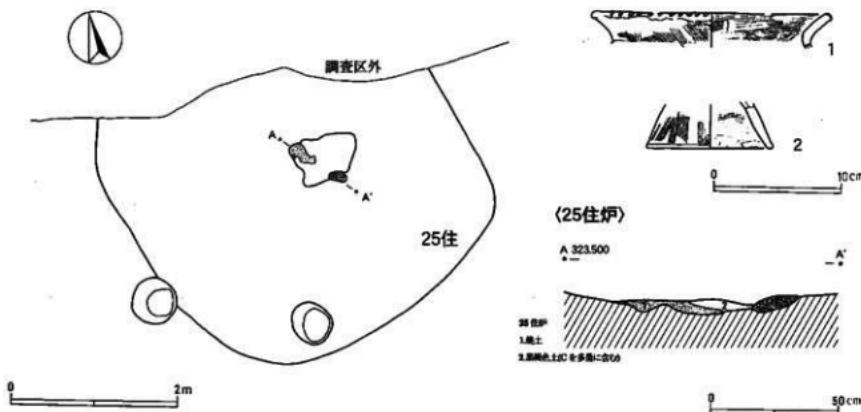
出土遺物（第32図）

図化できたものには口縁に刻目をもつ単純口縁台付甕、壺、赤彩された壺の口縁部（2）などがある。また2点のミニチュア土器が出土した（6・7）。このほか内外面に赤彩をもつ破片や外面に黒彩のみられる破片などがあった。これらの遺物などから弥生時代終末～古墳時代前期初頭（～I期前半）の時期の住居跡と考えられる。

第24号住居跡（第33図）

位 置 H・I-2・3グリッド

規模・形状 5.96×6.51m。隅丸長方形ないし稍円形。焼失住居。



第36図 第25号住居跡と出土遺物

- 床・壁** 床は平らに造られ堅く叩き締められている。部分的に3面ほどの貼り床が確認されたところもあり、補修をしながら生活していたことが窺える。壁は西側で50cm前後、北側で20cm前後で確認された。
- 炉** 枕石を持つ炉で枕石の北側に直径30cmほどの範囲で厚さ2cmの焼土がみられたが中に砂粒状の鉱物の混入がみられることから粘土敷きの地床炉と考えられる。
- その他施設** 柱穴は4基確認されたがいずれも直徑25cm、深さ50cm程度のものである(pit 1 ~ pit 4)。南東隅のpit 5は高さ5cmほどで幅のやや広い半円形状の土手をもつ。この土手付きpitの北側において白褐色の粘土塊が置かれているのが確認された。周溝は幅10cm、深さ15cm前後でほぼ全周する。本住居からは多量の焼土と共に炭化材が出土した。この炭化材を分析したところクヌギが使われている事がわかった(附録-3参照)。

出土遺物(第34・35図)

住居跡の北東部分において、広範囲に渡り夥しい量の土器片が検出された。これら土器片は厚さ数cmの焼土、炭化物の混ざった土層の上面に見られるもので床よりやや浮いた状態で出土した。また、接合関係はそれほどみられず個体土器が潰れている状況ではなく、いろいろな土器片が投棄されたような状況であった。固化できたものには小形台付甌、単純口縁台付甌、有段口縁甌、小形甌、口縁に刻目をもつ単純口縁台付甌、高坏などがみられる。これらの遺物などから弥生時代最終末~古墳時代前期初頭(~I期)の時期の住居跡と考えられる。

第25号住居跡(第36図)

位置 M-1グリッド

規模・形状 $4.0 \times 3.4 (+\alpha) \text{ m}$ 。隅丸長方形ないし梢円形を呈するものと考えられる。

床・壁 扰乱を受けているため床・壁ともにはっきりとは確認できなかった。

炉 住居跡の中央付近において直径50cmほどの焼土や炭化物の飛散がみられた為、この辺りに炉を想定できる。焼土の厚さは10cm程度。

その他施設 柱穴は確認できなかった。

出土遺物（第36図）

遺物は僅かで圓化できたものは口縁に刻目を持つ単純口縁台付隻の口縁部と台付隻の台部のみである。遺物などから弥生時代最終末～古墳時代前期初頭（～I期）の時期と考えられる。

2. 土坑

第1号土坑（第37図）

位置 A・B-4グリッド 第4号住居跡に切られる。

規模・形状 直径1.5m、深さ80cm程度。壁はほぼ垂直に近い状態で立ちあがり壁面は縦方向に筋状の凹凸が全面にわたってみられる。また底面近くには焼土混じりの土が30cmほどの厚さで堆積している。この中から焼土の付着した土器片が出土した。

出土遺物（第39図-1～5）

いずれも諸磯b式であるが、1・2は浮線文系、3は沈線文が施された土器である。4・5は浮線文系の浅鉢口縁部である。

第2号土坑（第37図）

位置 C-3グリッド

規模・形状 1.4×1.3m、深さ20cm程度の皿状を呈する土坑である。

出土遺物 諸磯b式の土器片が出土したが圓化できるものはなかった。

第3号土坑（第37図）

位置 C-3グリッド

規模・形状 直径1.3m、最も深いところで深さ30cmほどの円形の土坑である。

出土遺物 覆土中から諸磯b式の破片が出土したが圓化できるものはなかった。

第4号土坑（第37図）

位置 B-3グリッド

規模・形状 直径1.6m、深さ50cmの円形の土坑で、底はほぼ平らである。

出土遺物 覆土中から諸磯b式の破片が出土しているが圓化できるものはなかった。

第5号土坑（第38図）

位置 B-4グリッド 第2号住居跡を切る。

規模・形状 直径90cm、深さ90cmほどの円形の土坑である。底は平らで壁はオーバーハングして立ちあがる。壁面は縦方向に筋状の凹凸が全面にわたりみられる。

出土遺物 覆土中から諸磯b式土器の破片が出土したが圓化できるものはなかった。

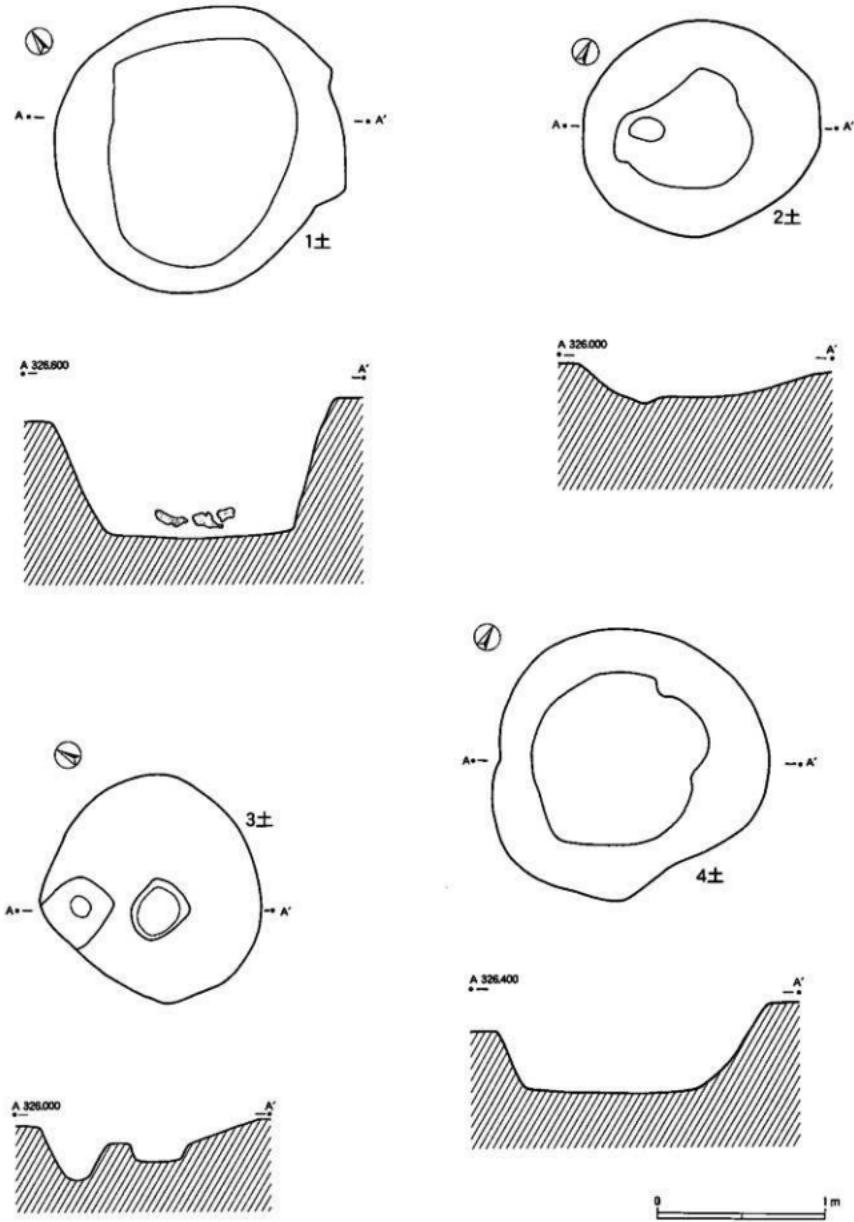
第6号土坑（第38図）

位置 B-3グリッド 第2号住居跡に切られる。

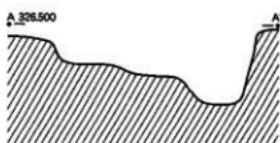
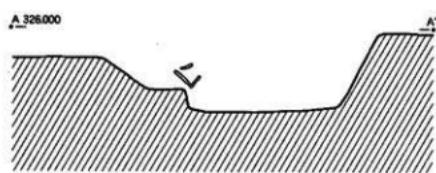
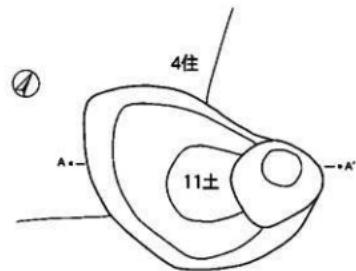
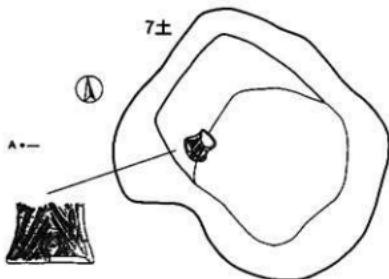
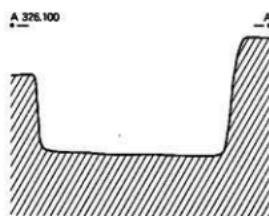
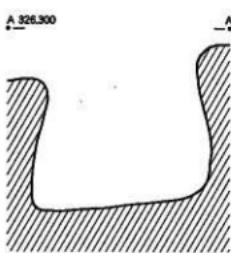
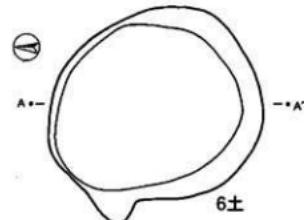
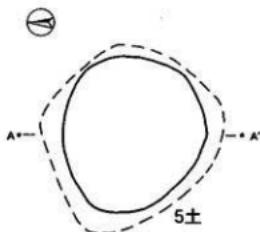
規模・形状 1.4×1.1m、深さ70cmほどの円形の土坑である。底は平らで、壁はほぼ垂直に立ちあがっている。壁面には縦方向に筋状の凹凸が確認できる。

出土遺物（第39図-6～14）

6・7・11は繩文地に沈線でそれぞれ6・11は入組弧線文、7は蕨手文のモチーフを描く。7・11は半裁竹管による平行沈線で文様が描かれている。8は米字文、9は無地に沈線で木の葉状のモチーフを描く。10は内面にミガキの施された台付の小形の鉢形土器である。12はやや器壁の薄い土器で、粗い構文地に沈線が引かれている。13・14はともに器壁が薄く胎土は灰褐色を呈する。文様モチーフや胎土などから関西系の北白川下層IIc式と考えられる。



第37図 第1・2・3・4号土坑



0 1m

第38図 第5・6・7・11号土坑

第7号土坑（第38図）

位置 B-3グリッド 第2号住居跡を切る。

規模・形状 1.7×1.2m、深さ40cmほどの不整椭円形を呈する土坑で、テラス状の張り出しを持つ。このテラス部分から諸磯c式の底部が出土した。壁面は縦方向に筋状の凹凸が確認できる。

出土遺物（第39図-15~19）

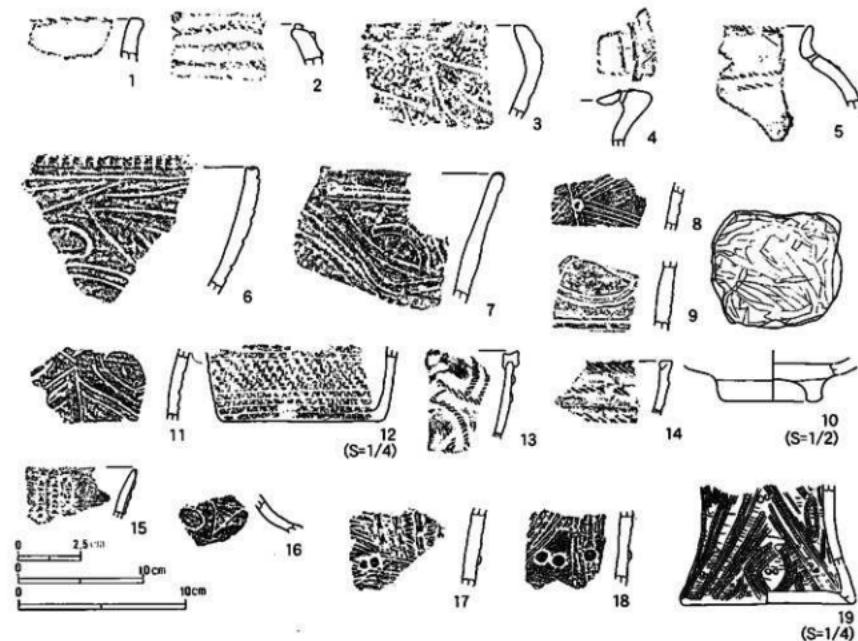
15・17・18は諸磯c式である。19は深鉢の底部で半裁竹管による連続爪形文をもつ浮線と小さな円形浮文によって飾られている。16は三角形や丸形のモチーフが沈線によって描かれ、モチーフ外の繩文は磨り消されている。このような手法は諸磯a式の新段階～諸磯b式の古段階にかけてみられるが、該期のモチーフが半裁竹管による平行沈線によって描かれるのに対して、これは単線の沈線によって描かれるところがやや特異である。

第11号土坑（第38図）

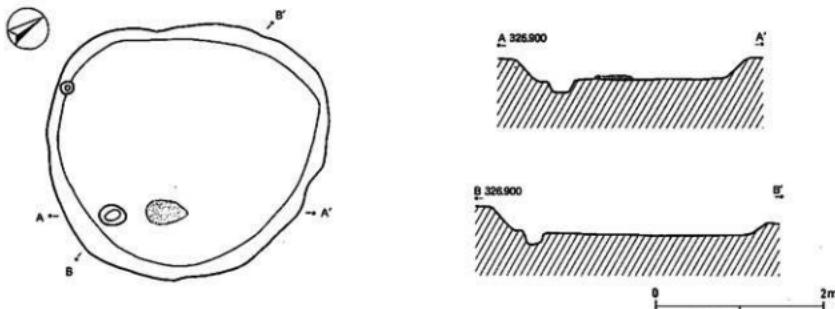
位置 A-4グリッド 第4号住居跡に切られる。

規模・形状 1.5×0.9m、深さ30cmほどの不整円形の土坑である。土坑底部には直径30cm、深さ30cmほどのpitがみられる。底は大小の浅い瘤みがみられ若干の凹凸がみられる。

出土遺物 覆土中より諸磯b式土器片が出土している。



第39図 第1・6・7号土坑 出土遺物（1土…1~5、6土…6~14、7土…15~19）



第40図 第1号竪穴状遺構

3. 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構（第40図）

位置 B-7グリッド

規模・形状 3.2×3.0m、深さ30cmの竪穴状を呈する遺構である。壁は緩やかに立ちあがり、底はほぼ平らである。通常の住居跡に比べては規模が小さく、柱穴や炉などの明確な住居施設は確認されなかつたが南よりの箇所に50×30cmの範囲で焼土がみられた。またpitも2基ほどみられた。

出土遺物 図化できるものはなかった。

4. 墳墓

第1号方形周溝墓（第41～43図）

位置 C～G-6～9グリッド

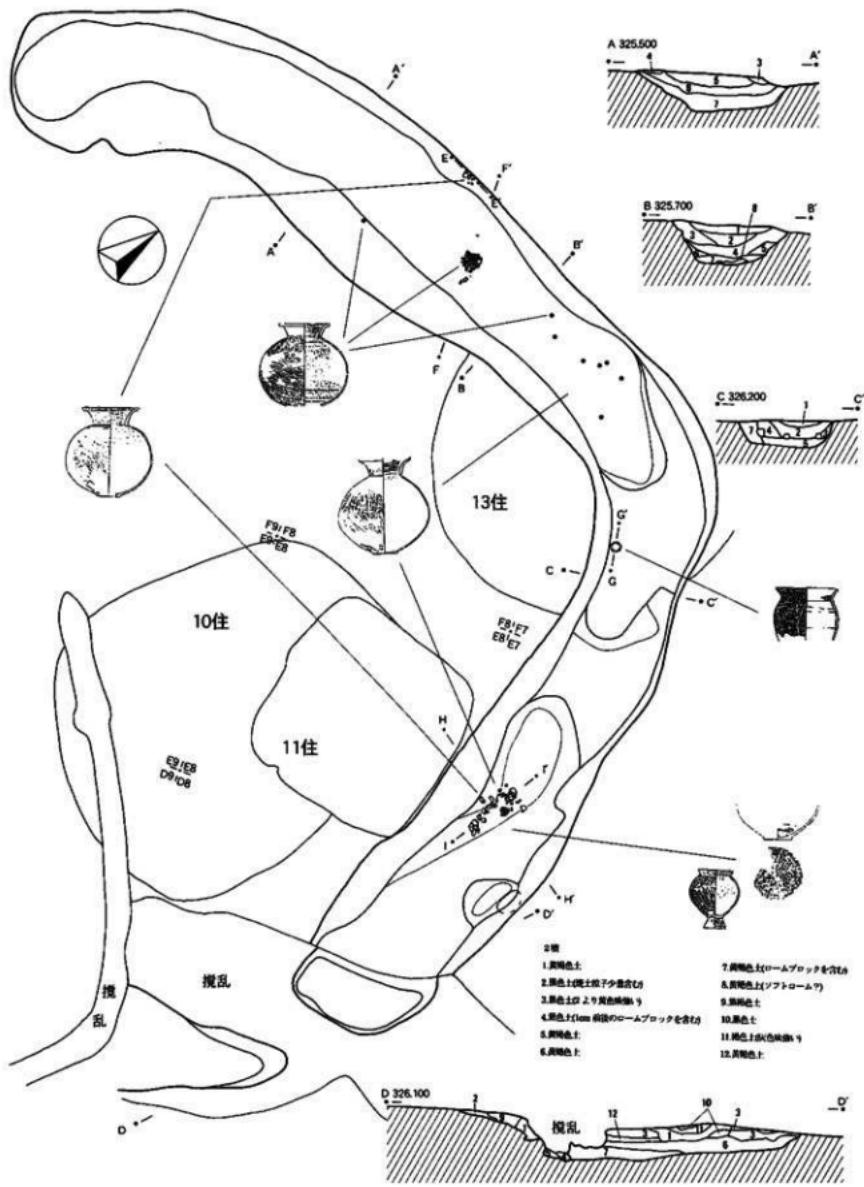
規模・形態 南北41.6m、東西36.8mで北側は大きく削平され残っていない。

主体部 台状部については削平が著しく盛土部分は残っておらず、主体部も確認できなかつた。

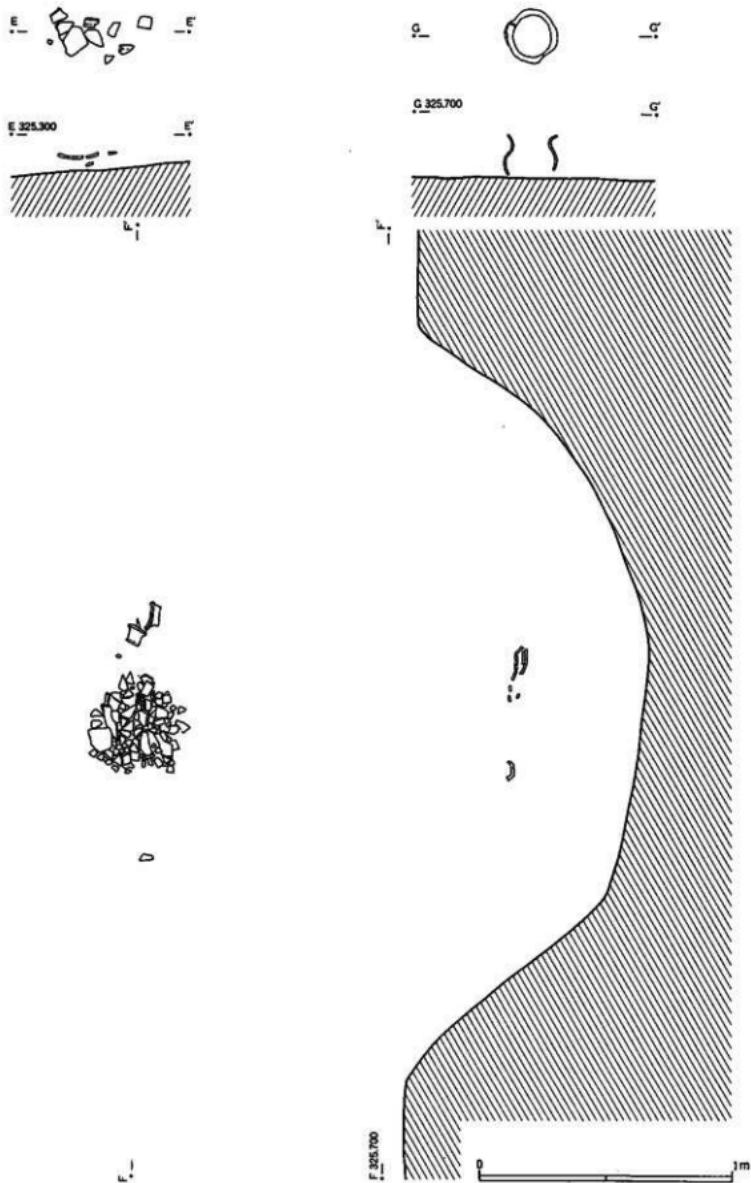
周溝 周溝はローム層などを掘りこんでおり幅4.5～12.0m、深さ1.0mほどである。周溝の底面は自然地形に沿って南東から北西方向にかけてゆるやかに低くなっている。法面については相対的に急斜面に造られているようである。西辺溝の北寄りで周溝の切れる箇所があり、ブリッジの様相を見せてゐる。また東辺溝の北寄りには底面が2段に掘りこまれた状況が見られ、これはブリッジを指向する様相を示す可能性もある。また、この他にも第13号住居跡と重複する箇所で、ちょうど北東コーナーにあたる部分に住居跡の床面が残っているが、この周辺で土器が集中して出土していることなどからもこれもブリッジと考えるのが自然なのかも知れない。

出土遺物（第44～45図）

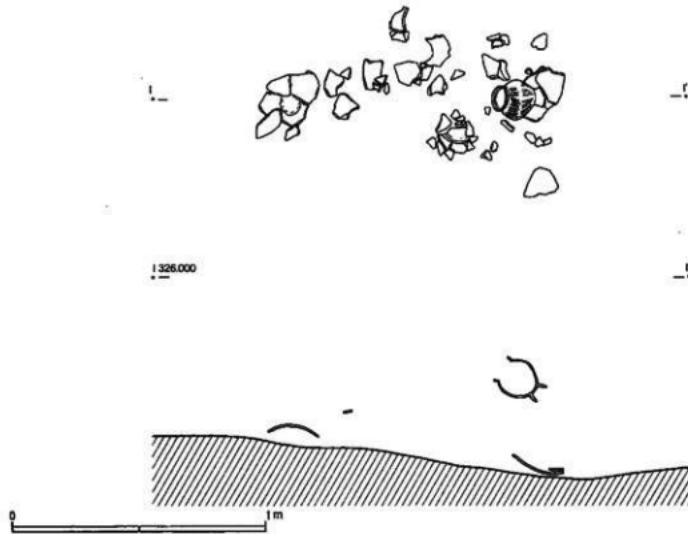
周溝からは多くの土器が出土しているが、これらの土器の出方をよく観察すると一體の土器も北辺溝と東辺溝とにわかれて出土しているものもあった。特にIラインとブリッジを挟んだ北辺溝で出土した13の壺はIラインからは脣部～底部にかけてが、北辺溝からは主として口縁部が出土している。このIラインの13の壺の上からは小形のS字状口縁台付壺6が底面から20cmほど浮いた位置で出土した。この廃棄状況を観察すると、第44図-2・第45図-10はほぼ溝底面から出土しており、6・11・12などは溝底からかなり浮いた状態で出土している。ここにみられる壺は全て東海系と考えられるが、形式的には明確な時間差は見出せない。しかしながら、その廃棄の時期については、出土レベルによりある程度の時間差が存在したものと考えられる。また、溝底面から出土した2の台付壺は口縁部の刻みが残る点、脣部の張りが弱い点で他の出土土器にくらべて若干古い様相を示すものと考えられる。第45図-9は刺突をもつ二重口縁壺で、月の輪平遺跡（静岡県富士宮市）第62号住居跡などに類例がみられる。このような出土状況や出土土器の形式的な時間差から本方形周溝墓に対する祭祀は限られた一時期ではなく、ある程度継続してほぼ同様の方法で行われていた事と言えよう。方形周溝墓の築造時期について



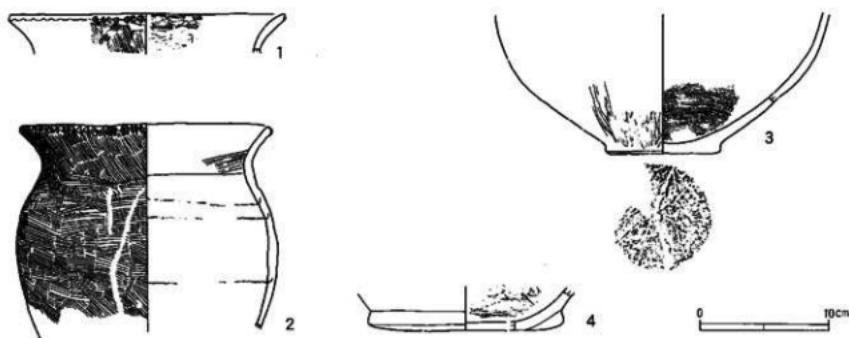
第41図 第1号方形周溝墓



第42図 第1号方形周溝墓 遺物出土状況（1）



第43図 第1号方形周溝墓 遺物出土状況(2)



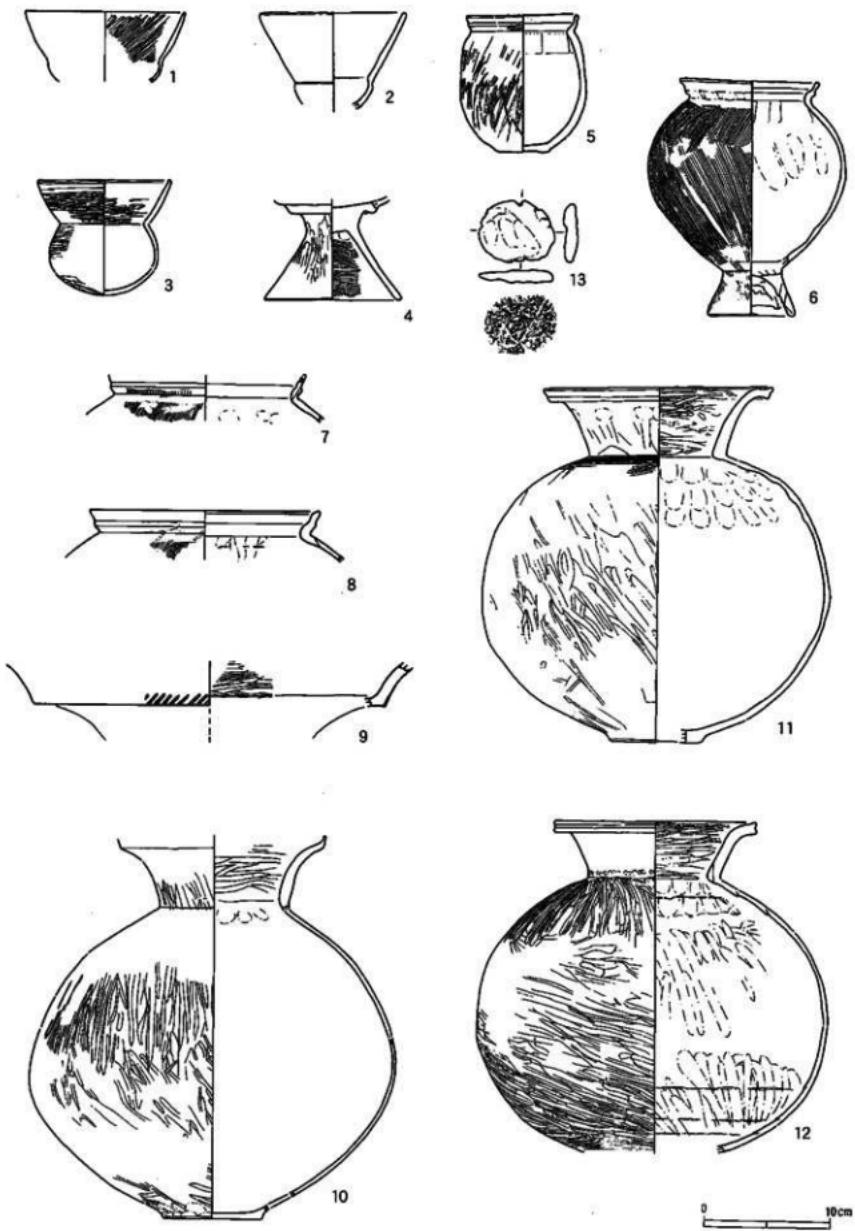
第44図 第1号方形周溝墓 出土遺物(1)

は底面に近い位置で出土している土器から4世紀後半代～5世紀初頭の時期が考えられる。なお本方形周溝墓から出土している土器の大半は東海系である点も興味深い。

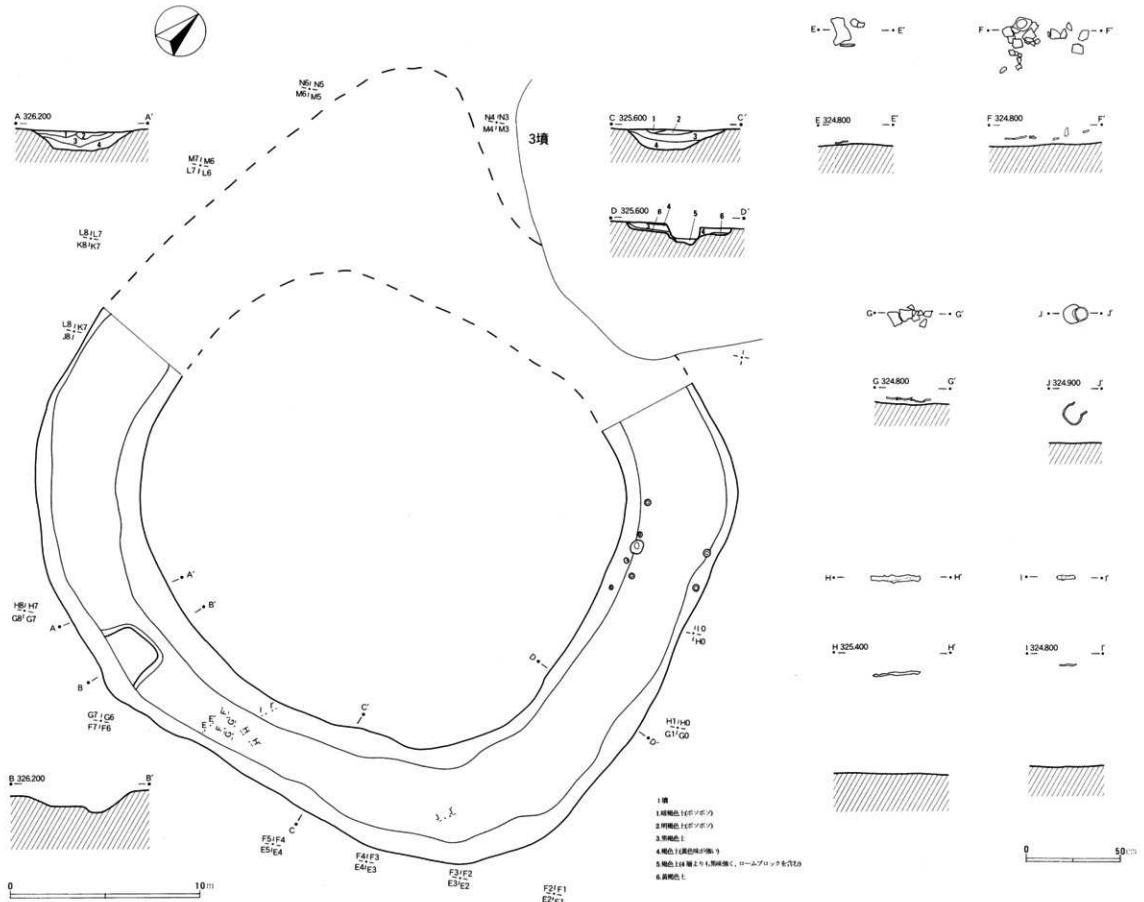
第1号墳（第46図）

位 置 F～M-0～8グリッド 第2号墳に切られる。

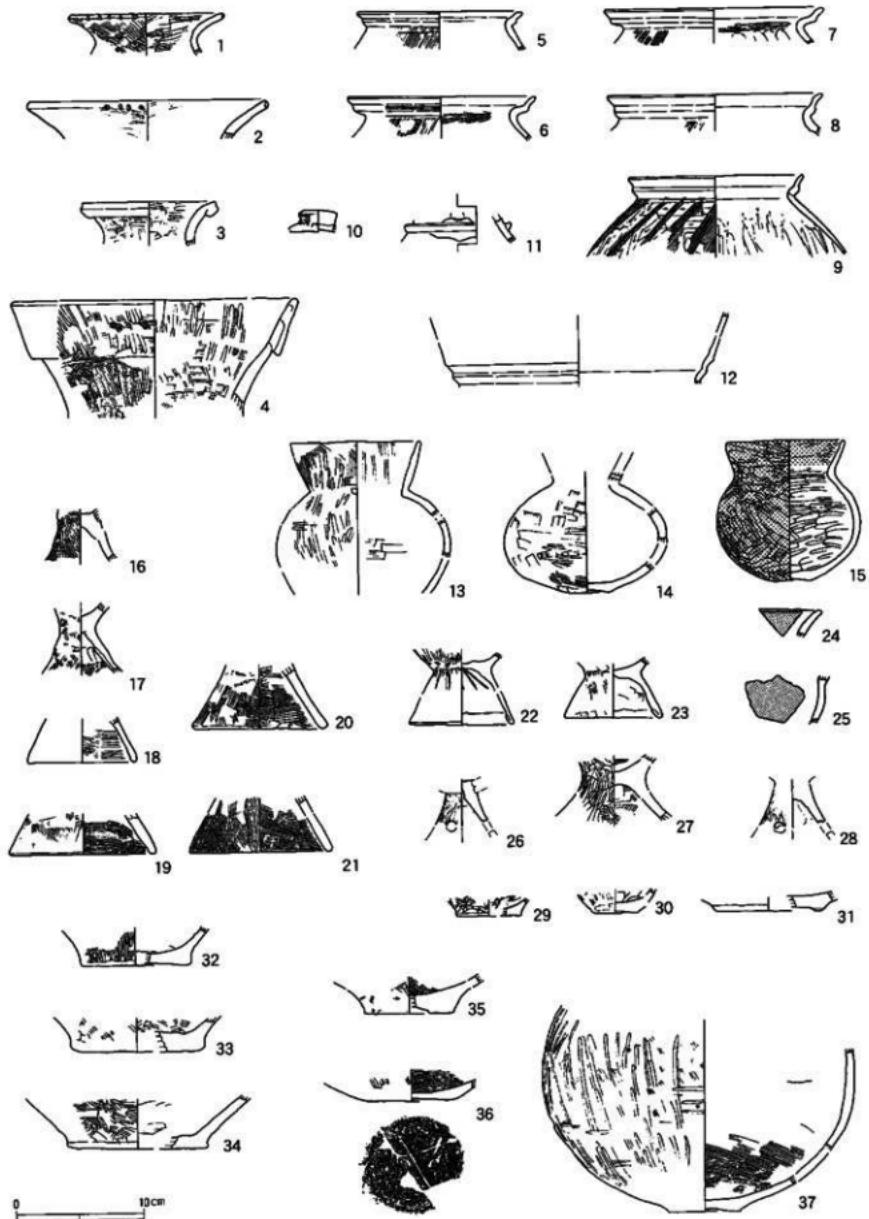
規 模・形 状 南北42m、東西37mで橢円形を呈し、北側で一部大幅に広くなるものの幅5.5mほどの周溝がめぐる。墳丘については僅かに円錐状を呈するのを観察できるが、墳丘自体は大きく削平されており原形をとどめていない。このため墳丘の構築状況などについては明らかにできなかった。しかしながら土地所有者によれば大人の背丈ほどの高さの土を引き崩したということで、このことからそれは



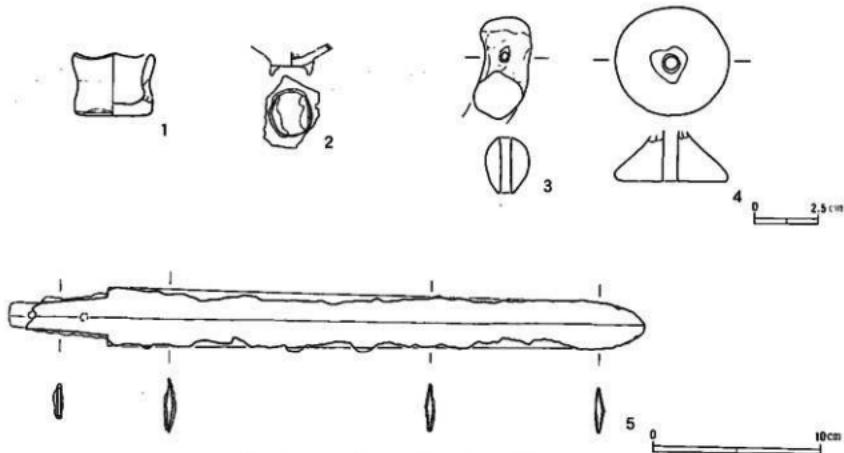
第45図 第1号方形周溝墓 出土遺物 (2)



第46図 第1号墳



第47図 第1号墳 出土遺物 (1)



第48図 第1号墳 出土遺物 (2)

ど高くない墳丘をもつ古墳を推定することができる。

主体部

主体部については確認することができなかつたが、周溝内から鉄剣が出土していることや上述の状況から考え合わせて墳丘部削平の際に主体部も破壊されたものと考えられる。

周溝

トレンチの土層観察などから周溝はローム層を掘りこんで造られている状況を確認できる。周溝自体は北側で盆地側に張り出している状況がみられるがこれは傾斜が南東から北西方向に向かって低くなることに起因する可能性もあり、自然地形の中に周溝が吸収される形態に近かったためと考えられる。周溝の底面や法面には掘削時の工具痕などが確認できる箇所もある。周溝内の堆積状況はまず褐色土が両端から比較的急角度で崩れ落ちて周溝を埋めているのが観察できる。これは主に法面が崩れたものと思われるが、その崩れた量については外側に比べ墳丘側がはるかに多い。その後に両端から流れ込んだ褐色土がV字状の堆積を見せ、さらにこの上に黒色の腐植土が堆積している。土層観察などからこの黒色土が堆積するまでの時間が比較的長かったのではないかと思われる。

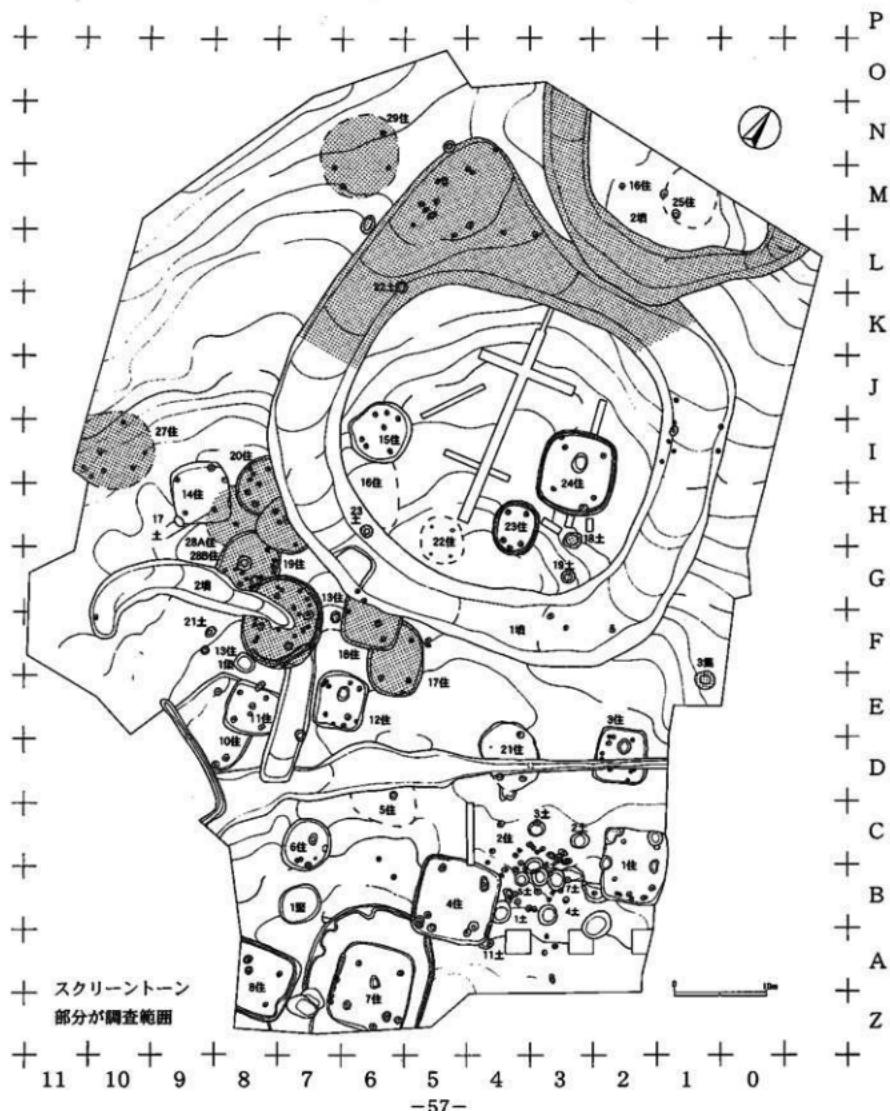
その他施設

周溝の南西部底面において、高さ50cm前後の方形状の突出部分が外側から内側へ張り出して造られている。これは掘り残しではなく意図的に造られたものー例えば陸橋や何らかの祭祀にかかるるものーであると考えられる。県内の類例では桜井畠遺跡(甲府市)第3号方形周溝墓などがある。

出土遺物 (第47・48図)

副葬品については主体部が破壊されているために確認できなかつたが、周溝内の黒色土中から鉄剣が出土していることから黒色土が堆積していた頃に何らかの要因で主体部から取り出されて周溝中に混入したものと考えられる。鉄剣は茎部の一部を欠くが刃渡り31.5cm、茎部5.1cmの全長36.6cmほどのものである。茎部は目釘孔の位置で欠損している。またその上部にも目釘痕がある。この他の遺物としては周溝内の底部から壙の破片などがかたまって出土している。Jラインで出土したのは15の壙であるが内外面ともに丁寧なミガキが施され外面と口縁部の内側には赤彩が施されている。4は有段口縁壙で内外面ともにハケ調整が行なわれた後粗いミガキを施している。この他S字状口縁台付壙の口縁部や脚部も出土している。このうち6や7には口縁内側の屈曲部にヨコハケが見られる。9の外面調整は不整方向のヘラケズリをおこなったのちタテ方向に間隔のあいたハケを入れている。12は器壁が薄い有段口縁壙と考えられる。このほか蓋のツマミも出土している。また、鉢や脚付皿のミニチュアや断面が三角形の土製紡錘車、孔の開けられた土製品なども出土している。これら出土遺物などから5世紀前半の中頃を中心とした時期を本墳の築造時期と考えることができる。

第2次調査



第4章 第2次調査（1998年度）

第1節 調査の概要

深訪戸遺跡第2次調査にあたる1998年度の調査では、第1次調査時点で確認されていた、第1号墳の北側1/4程度と第2号墳、第13・17・18・19・20号住居跡（弥生時代末～古墳時代初頭）についての調査、さらに第2次調査時点で新たに確認された第28A号住居跡（縄文時代前期後半 諸磯a～b式期）・28B号住居跡（同じく諸磯b式期）、27・29号住居跡（時期不明）と第16～19・22・23号土坑（いずれも縄文時代）、第1号集石土坑（時期不明）・第3号集石土坑（諸磯a式期）、風倒木1についての調査を行なった。なお、住居跡のNo.26と集石土坑のNo.2については欠番となっている。特筆すべきものとしては、弥生時代末に位置付けられる第13号住居跡の調査において炭化材が検出され、自然科学分析を行なった結果、少なくとも3種類の木材を使って構築されていたことが明らかとなった。また、諸磯b式期に比定される第28B号住居跡では埋甕炉が発見されているが、県内の該期においてはこれまで地床炉しか見られないのに対して、特異な例であると言えよう。いずれにしても弥生・古墳時代の造構はもとより、縄文時代においても造構の濃い場所であり、長期にわたって人々の生活空間として選ばれていた場所であることがよりはっきりとした。

第2節 遺構と遺物

1. 住居跡

第13号住居跡（第49・50図）

位置 F・G-7・8グリッド

規模・形状 7.0m×6.3m。不整円形。第28A号住居跡を切り、第1号方形周溝墓に切られる。焼失住居。

床・壁 床・壁ともに明確で、床には粘土を貼りしっかりと踏み固められている。

炉 地床炉で住居の中央西より、pit2とpit3との間に位置する。掘り方は75cm×70cm、深さは8cm程度。焼土の厚さは5cmほどである。

その他施設 壁面に沿って周溝がめぐる。主柱穴が4基で、pit1～pit4、その他小さなpitが15基ほど確認された。櫛土に焼土・炭化物を多く含み、床面にも炭化材がみられた。特に、南半分に炭化材・焼土が多くみられることから、焼け落ちた部材を一方に寄せ片付けているようである。炭化材は1本1本が割合はっきり区別できたので、その位置ごとにとりあげ樹種同定を行なった結果、クリ・カツラ・コナラという少なくとも3種類の材が使われていることがわかった（第50図-炭5…クリ、炭13…カツラ、炭22…クヌギ、炭23…クリ）。部材によって使用する樹種を変えている可能性もある（附録-3参照）。

出土遺物（第50図）

第2次調査では小形壺の底部破片（1）が1点出土しているが、火を受けた痕跡がみられることからこれはもともと住居内にあったものと考えられる。また、第1次調査時の第1号方形周溝墓の調査で設定されたトレーニング内より壺が出土しており、図面の出土位置・レベルなどからこれが本住居のものである事が判明した。2は広口壺で外面には丁寧なミガキ、内面には主としてヨコ方向のハケ痕が残る。外面には器面がはじけた痕跡がみられるが、これは焼成時のもので二次的に火を受けたことによるものではない。本住居が焼失住居である事と考え合わせると、住居が焼け落ちて沈火後に部材を片付け、その傍らにこの壺を置いたものと想定される。住居形態、出土土器から本住居跡は弥生時代後期後半に位置付けられよう。

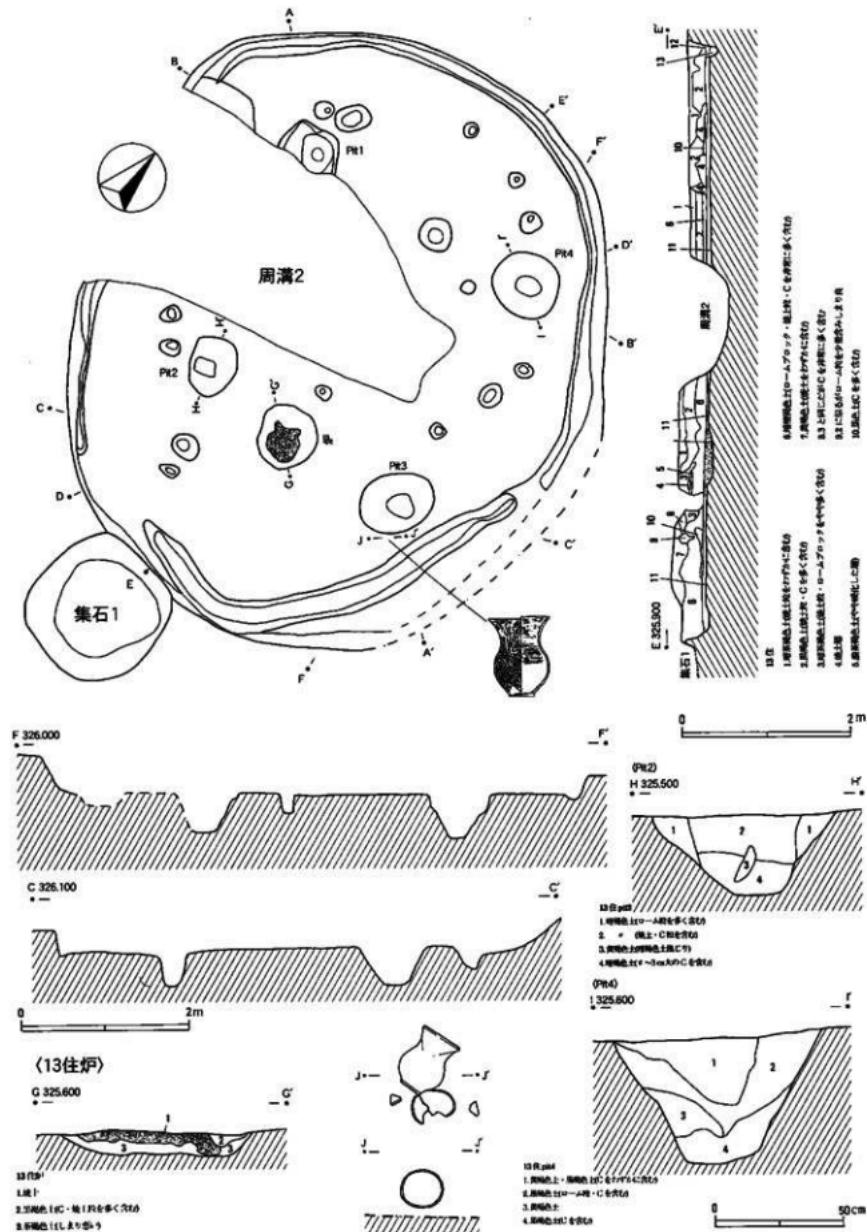
第17号住居跡（第51・52図）

位置 E・F-5・6グリッド

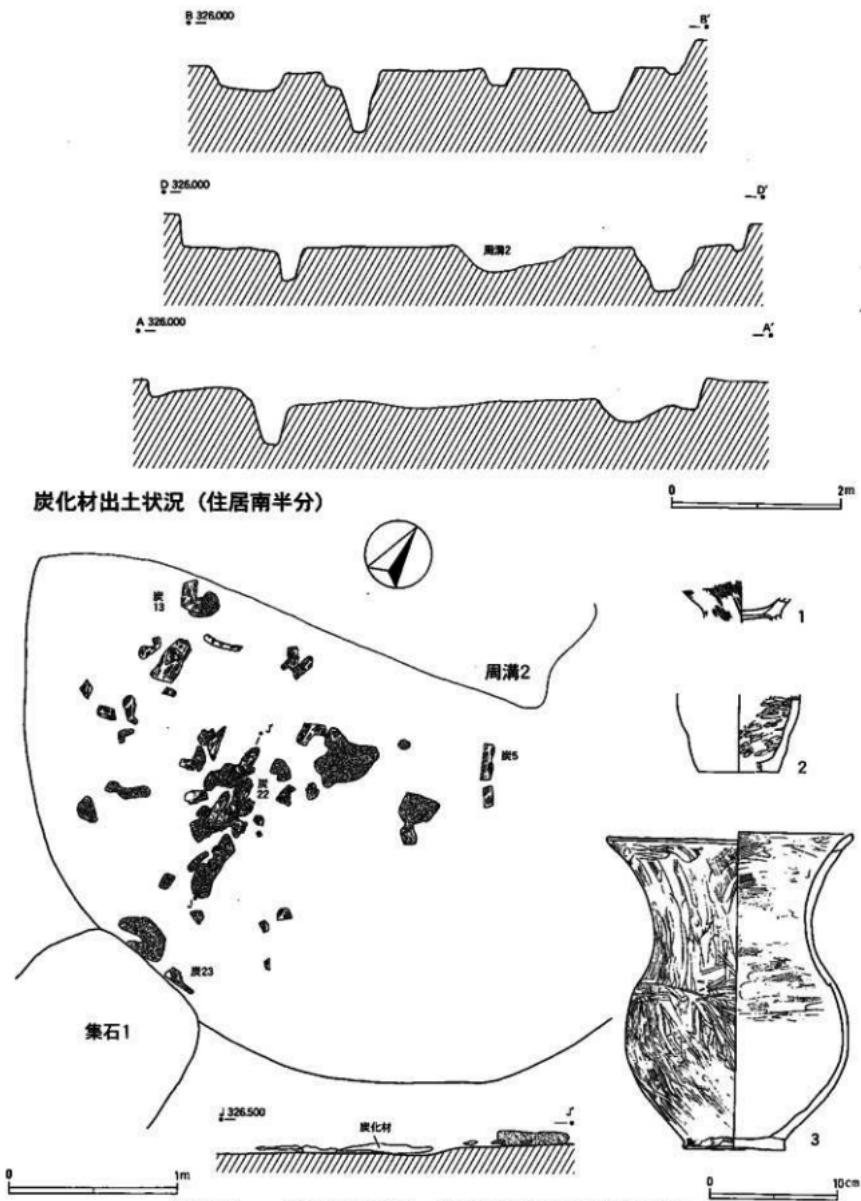
規模・形状 4.5m×5.6 (+ α) m。楕円形。第18号住居跡・第1号周溝に切られる。

床・壁 床・壁ともに明確で、床には粘土を貼りしっかりと踏み固められている。

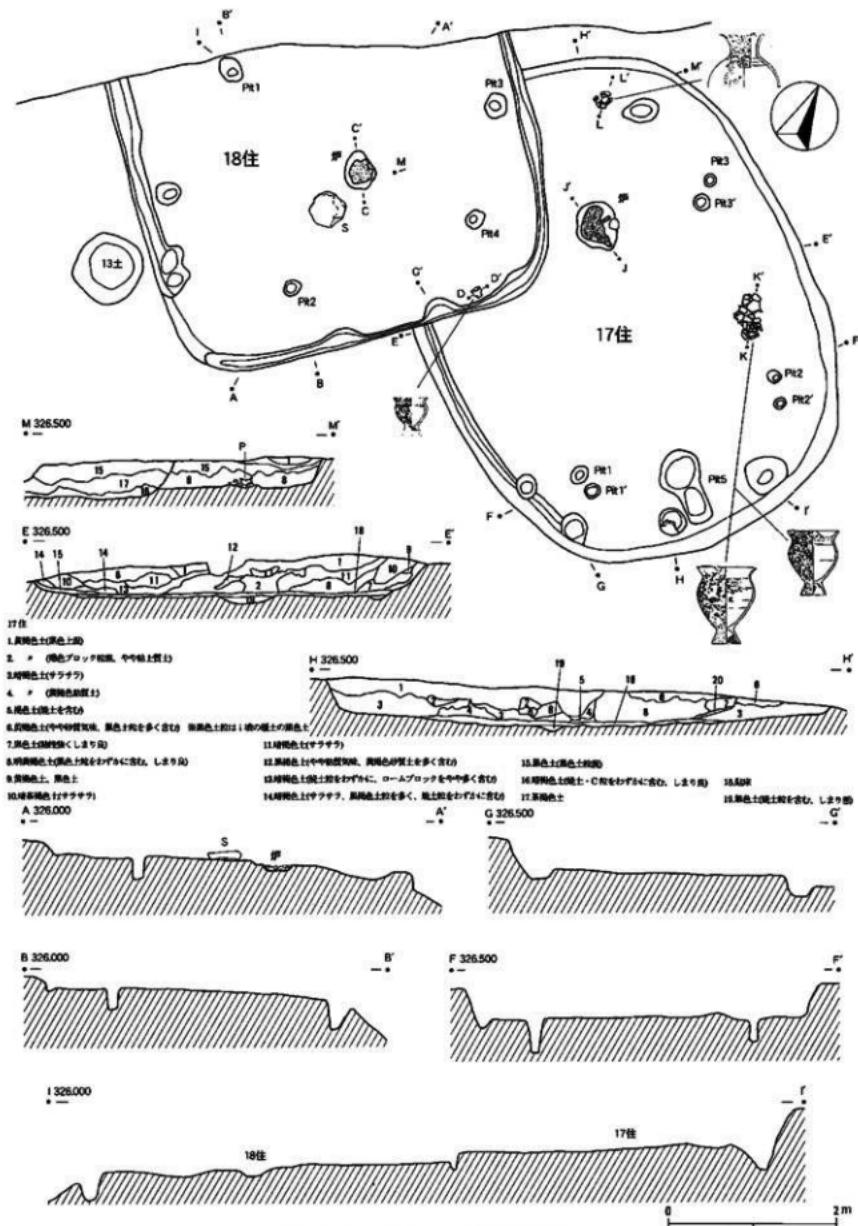
炉 地床炉で住居の中央東よりに位置する。掘り方は60cm×50cm、深さは17cm程度。焼土の厚さは



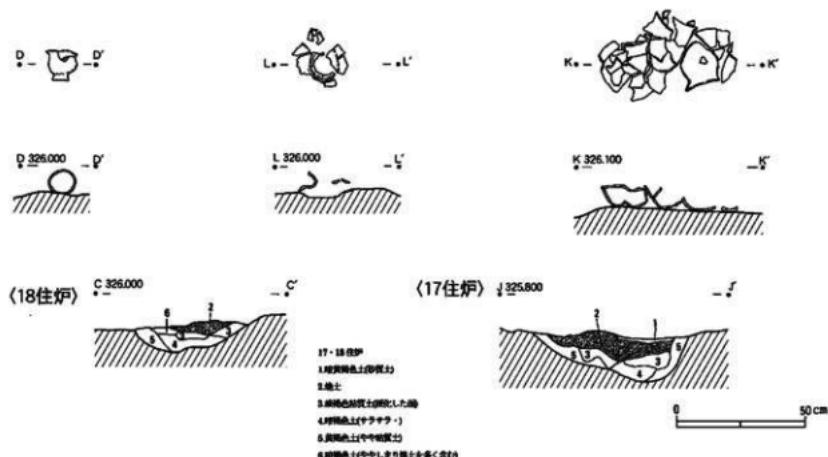
第49図 第13号住居跡



第50図 第13号住跡 炭化材出土状況と出土遺物



第51図 第17・18号住居跡



第52図 第17・18号住居跡 遺物出土状況

10cm程度。

その他施設 主柱穴は現状で6本、pit 1～pit 3'で、2個一对になっている。炉の位置などから南東側を入り口部分と考えるとpit 4・pit 5などは梯子受穴などの入口施設に関係するものと考えられる。南側の一部に周溝がめぐる。

出土遺物（第53図）

1・2は壺、3は高杯、4は壠、5は台付壺の台部、6は壺、7・8は台付壺である。7・8はKラインで出土した台付壺で、7・8ともに外面は口縁部～体部中位までは不整方向の弱いハケナデ、体部下半～台部はハラナデとなる。内面は頸部や下位に指彫り痕が認められる。外面にはコゲが見られる。やや大きさが異なるだけで形態・調整が全く同様の2個体が同じ場所に潰れた形で出土しているのは興味深い。6はJラインで正位の状態で検出されている。9の紺錦車は半分を欠損していたが第3号住居跡出土のものと接合関係が見られた。住居形態や出土土器などから本住居跡は弥生時代最終末に位置付けられよう。

第18号住居跡（第51・52図）

位置 F・G-6グリッド

規模・形状 4.8m×3.4m (+ α)。隅丸方形。第17号住居跡を切り、第1号周溝に切られる。

床・壁 床も壁も明確で、床には粘土を貼りしっかり踏み固められている。

炉 地床炉で住居のほぼ中央に位置する。掘り方は45cm×40cm、深さは10cm程度。焼土層は薄く、厚さ5cm程度である。

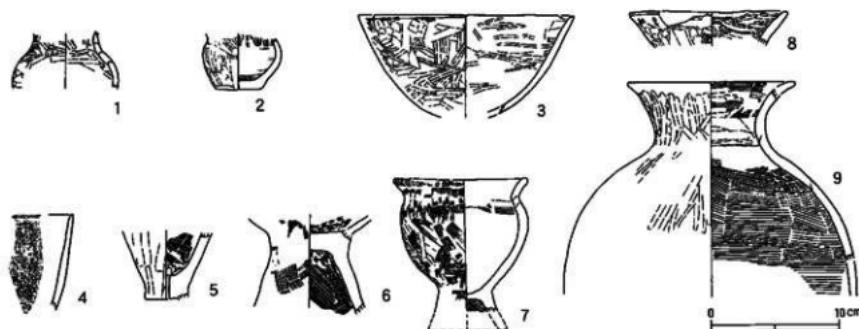
その他施設 主柱穴は現状でpit 1・2・4の3基、その他pitが4基確認されている。壁沿いには周溝がめぐる。炉の南側には平たい石が置かれている。

出土遺物（第54図）

1は小形壺、2は小形壺、3は高杯の杯部、4は鉢の破片、5は漏斗、6は台付壺の台部、7は小形の台付壺で外面にはコゲが認められる。8は壺の口縁部、9は壺である。7はIラインで横向きで検出された。なお、9は第1次調査時点での取り上げられており、出土位置は不明である。本住居跡の時期については古墳時代前期と考えられる。



第53図 第17号住居跡 出土遺物



第54図 第18号住居跡 出土遺物

第19号住居跡（第55図）

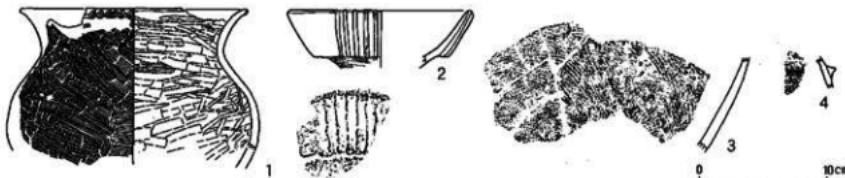
位 置 G・H-7・8 グリッド

規 模・形 状 4.5m × 2.9 (+ α) m. 不整円形。第1号墳に切られ、第20号住居跡を切る。

床・壁 床はしっかりと踏み固められ、壁も明確である。

炉 掘り方のほぼ中央に枕石を持つ地床炉で住居の中心からやや北寄りと思われる場所に位置する。掘り方は65cm × 60cm、深さは12cm程度である。焼土の範囲は枕石の北側の一部に限られる。

その他の施設 規則的に並ぶ柱穴は確認されなかったが、pitが7基ほどみられる。pit 8などはその掘り込みの角度、壁近くという位置、炉との関係などから入口施設の可能性も考えられる。壁沿いに周溝がめぐる部分もある。



第56図 第19・20号住居跡 出土遺物 (19住…1~3、20住…4)

出土遺物 (第56図)

1・3はともに甕、2は複合口縁甕である。1は頸部から肩部への屈曲がきつく、外面には丁寧な斜方向のハケ、内面には主として横方向のヘラナデが施される。口縁部には貝殻状工具による刻みが施される。2の甕には複合口縁部分に棒状の浮文が垂下する。この浮文の断面は三角形となる。3は甕の胴部破片である。本住居跡の時期については住居形態、出土土器などから弥生時代後期後半と考えられる。

第20号住居跡 (第55図)

位 置 H-7・8、I-8グリッド

規模・形状 4.4m×3.0 (+α) m. 不整円形。第1号墳・第19号住居跡に切られる。

床・壁 床は踏み固められ明確だが、壁は立ち上がりが低くはっきりとしない部分が多い。

炉 焼土は見られないが、白色粘土を上面に敷いた掘り込みが検出された。当遺跡では第24号住居跡の炉に類例が見られる。他遺跡でも燃焼面に粘土を敷いた炉の例もあることからこの遺構が炉であった可能性も考えられる。

その他施設 規則的に並ぶ柱穴は見られないが、ランダムに配置するpitが11基ほどみられる。

出土遺物 (第56図)

出土したもののうち、ほとんどは流れ込みの繩文土器の破片であったが、1点だけ該期のものと考えられる破片があった。甕の破片だろうか。住居跡の時期については住居形態、切り合い関係などから弥生時代最終末～古墳時代前期初頭に位置付けられる。

第27号住居跡 (第65図)

位 置 I-10グリッドを中心とする範囲。

規模・形状 6 m×6 m程度の範囲と考えられる。

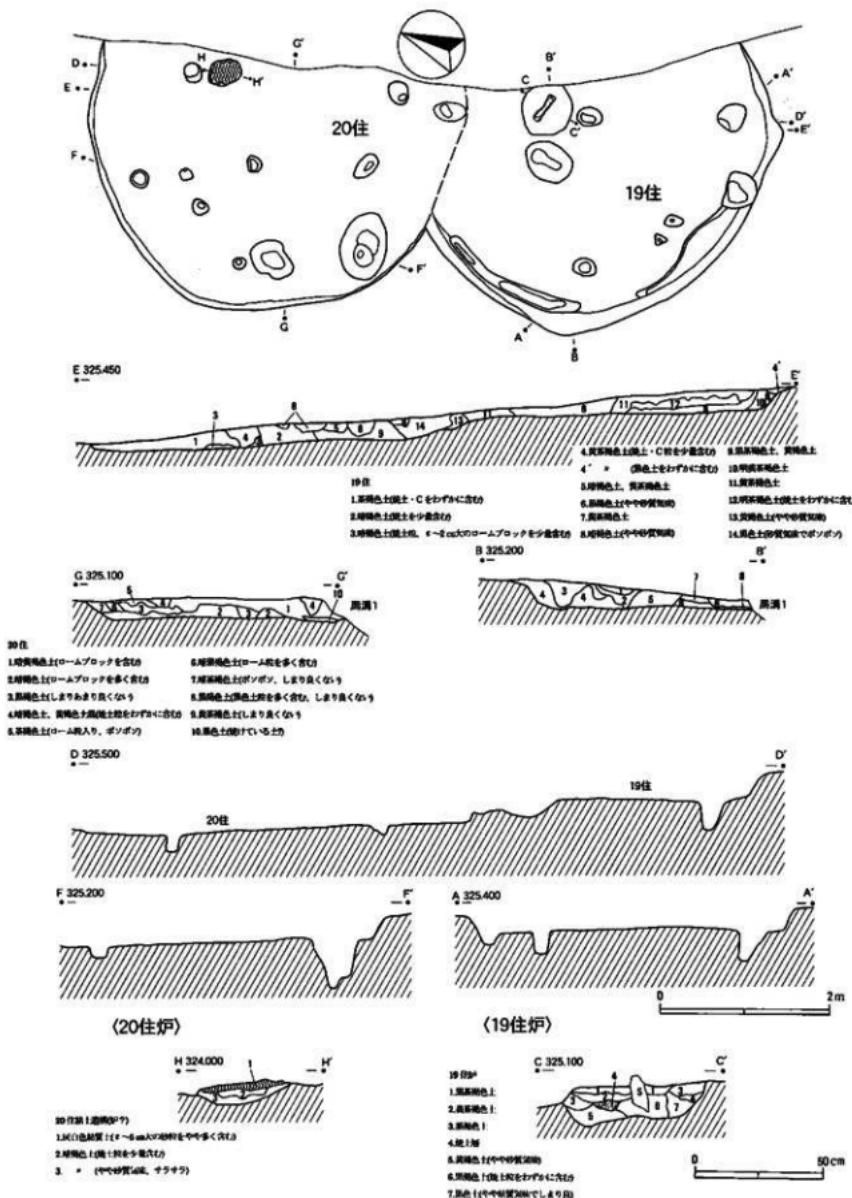
床・壁 ともに不明瞭。

炉 60cm×45cmの範囲に薄い焼土の堆積が見られる。

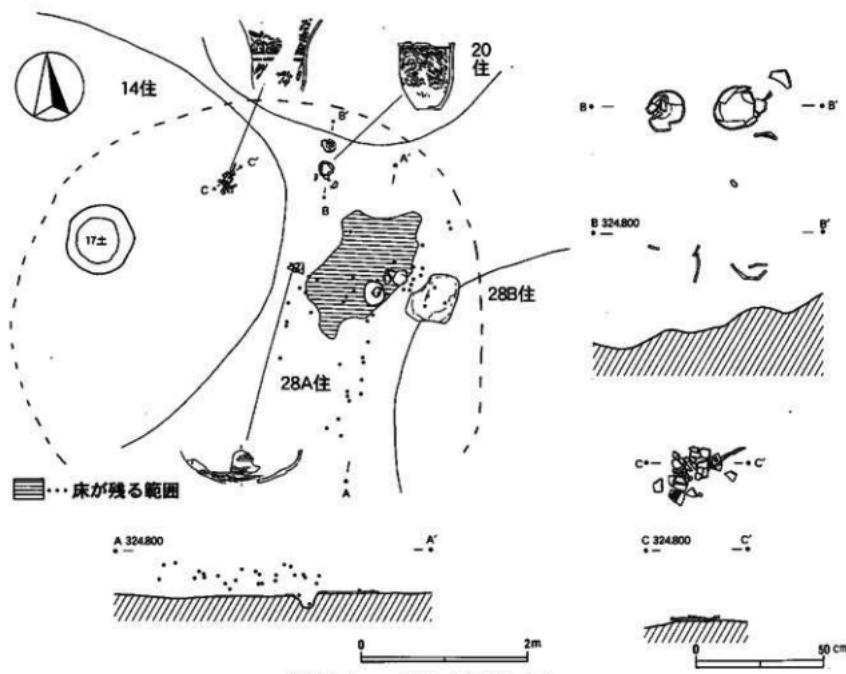
その他施設 烧土を取り囲むようにpitがめぐるが、規則性は認められない。

出土遺物

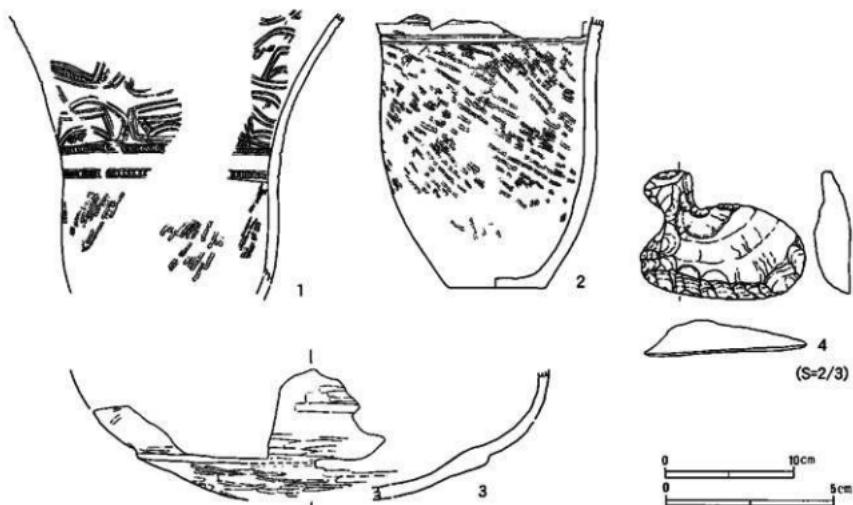
周辺から諸磯b式の土器片が多く出土しているが確実に本住居に伴うものとは言えない。住居跡の時期については不明である。



第55図 第19・20号住居跡

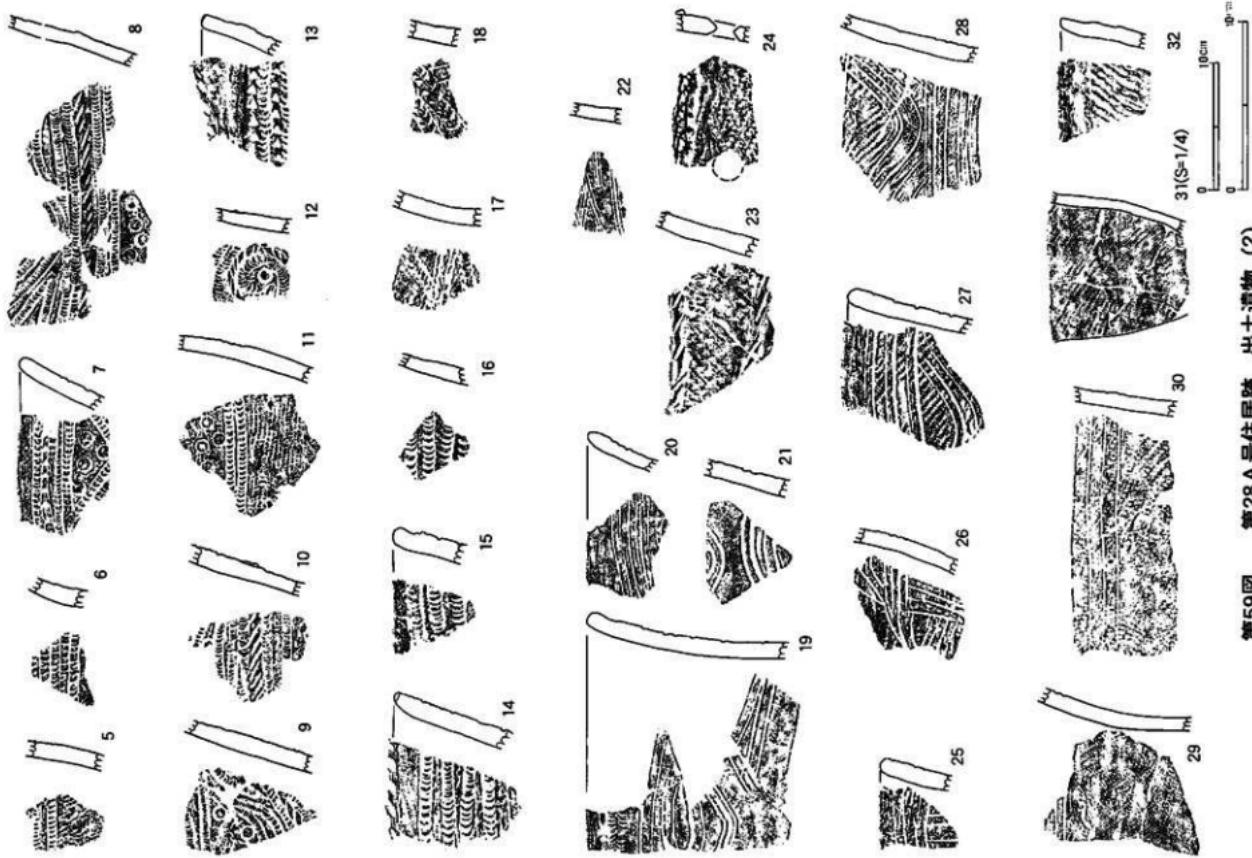


第57図 第28A号住居跡



第58図 第28A号住居跡 出土遺物 (1)

第59図 第28A号住居跡 出土遺物 (2)



第28A号住居跡（第57図）

位置 H-8グリッドを中心とする範囲。

規模・形状 直径5m程度の範囲と考えられる。第14・19・20・28B号住居跡に切られる。

床・壁 床はほんの一部を残すのみで、壁も他の住居に削平されて残っていない。

炉 炉は確認できなかった。

その他施設 pitもほとんど確認できなかった。

出土遺物（第58～60図）

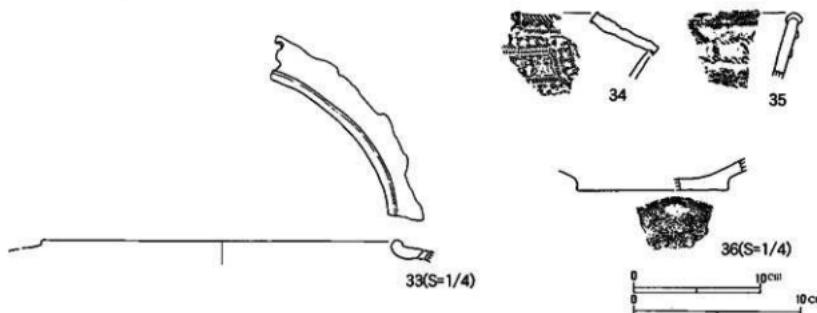
1の深鉢は2段の連続爪形文によって胴部が区画されその上には半裁竹管による沈線文で弧線区画入組木葉文が描かれる。モチーフ外の繩文は磨り消されている。入組木葉文モチーフがしっかりとしている点、モチーフ外の繩文が磨り消されている点、胴部区画が半裁竹管による連続爪形文によってなされている点で諸磯a式的性格を色濃く残していると言えよう。これは床面直上からの出土である。2は深鉢の底部で胴部上半は欠損しているものの、半裁竹管による横位沈線文を確認できる。3は浅鉢である。4は珪質頁岩製の石匙で長さ3.6cm、幅4.9cm、厚さ1.1cm、重さは14.8gである。1～14は連続爪形文をもつもので、5・6は幅狭の半裁竹管によるものである。3～8は円形竹管文を伴い、中には8～10・12などのように爪形文間の突出して浮線化した部分に斜方向の刻みをもつものもある。13には連続爪形文間にD字状の押し引きが施される。17・18は並行沈線の中にハの字状の押し引きを施す。19は無文地に半裁竹管による沈線で薫手状のモチーフが描かれるものと思われる。口縁直下には並行沈線を伴わない細かい連続爪形文が2段に施される。20～21は無文地に沈線によってモチーフが描かれる。22は無文地に斜方向の沈線が格子を描く。交点にはわずかに刺突がみられ、これは大倉崎類型にあたるものと考えられる。23・24は浮線文系の土器で23には浮線文上に斜方向の刻みが、24には繩文が施される。25～30は繩文地に沈線が描かれるもので、27・28は弧線状のモチーフになると思われる。31は繩文系の小形深鉢、32も繩文の施された粗製深鉢の口縁部であるが口縁端部はナデられ、内面の調整もきわめて粗い。33は有孔浅鉢である。34・35は異系統土器でいずれも深鉢。34は北白川下層IIc式に比定できよう。36は浅鉢底部である。以上を概観すると、諸磯b式古段階のものが多くを占めるが、住居の切り合い・床面直上出土の土器からして本住居跡は諸磯a式新段階～諸磯b式古段階に位置付けられる。

第28B号住居跡（第61図）

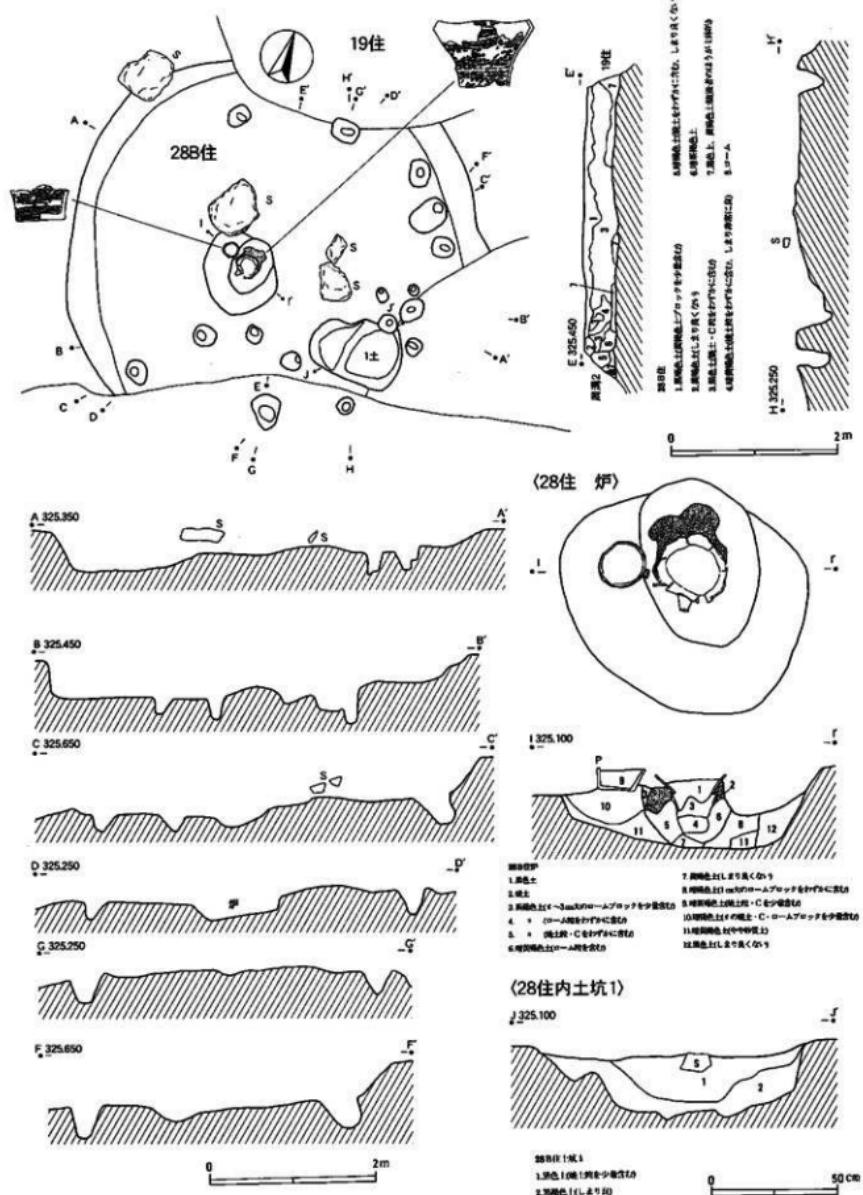
位置 G・H-8グリッド

規模・形状 直径5m程度の円形プラン。第1号方形周溝墓・第13・19号住居跡に切られる。

床・壁 床は部分的に踏み固められ、明確な部分もあれば不明瞭な部分もある。壁の立ち上がりは特に西側ではっきりしない。

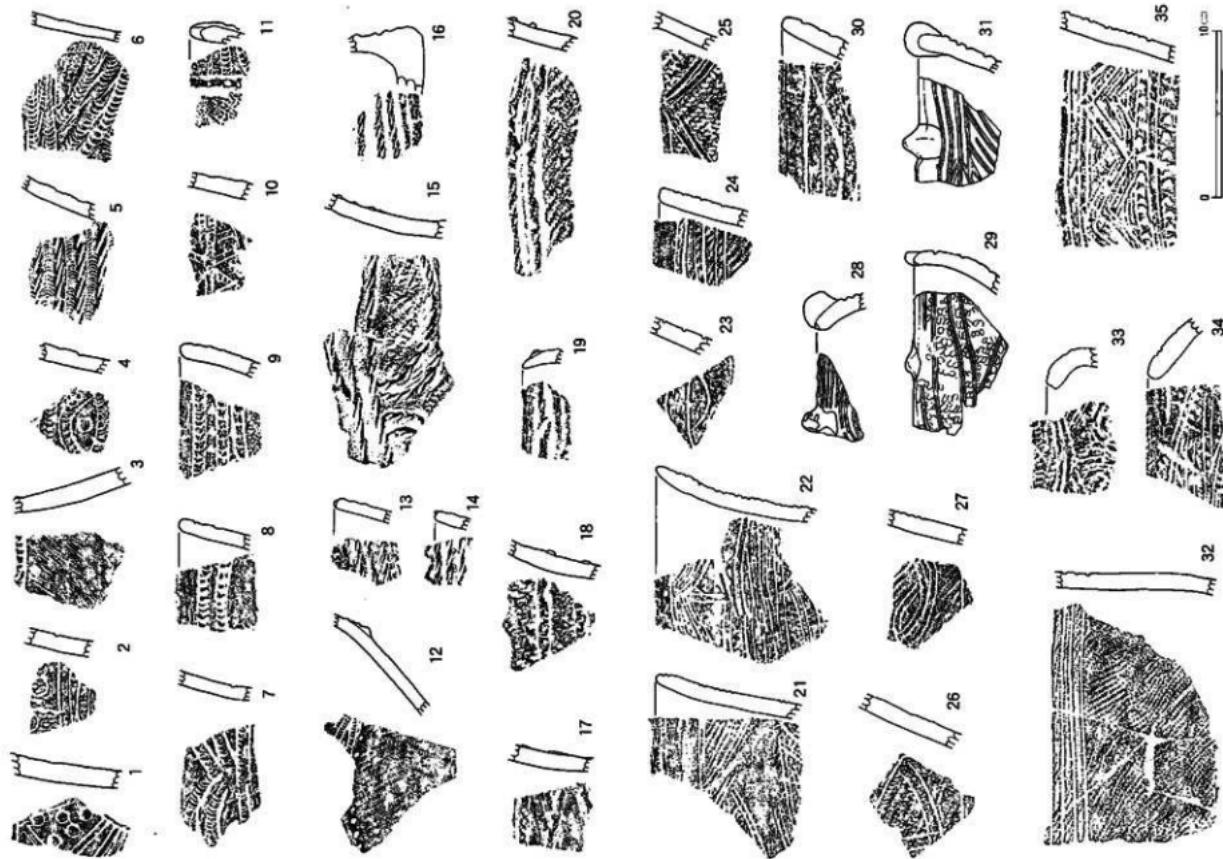


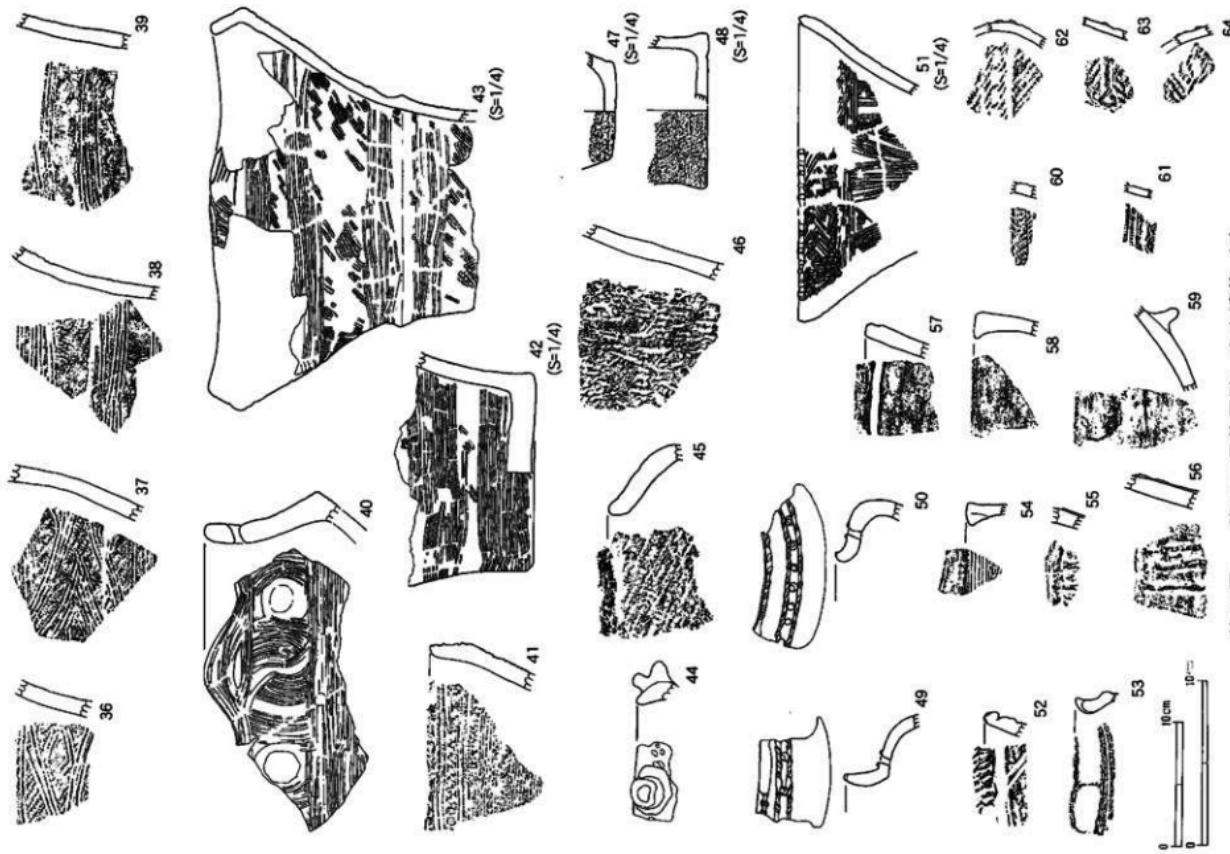
第60図 第28A号住居跡 出土遺物（3）



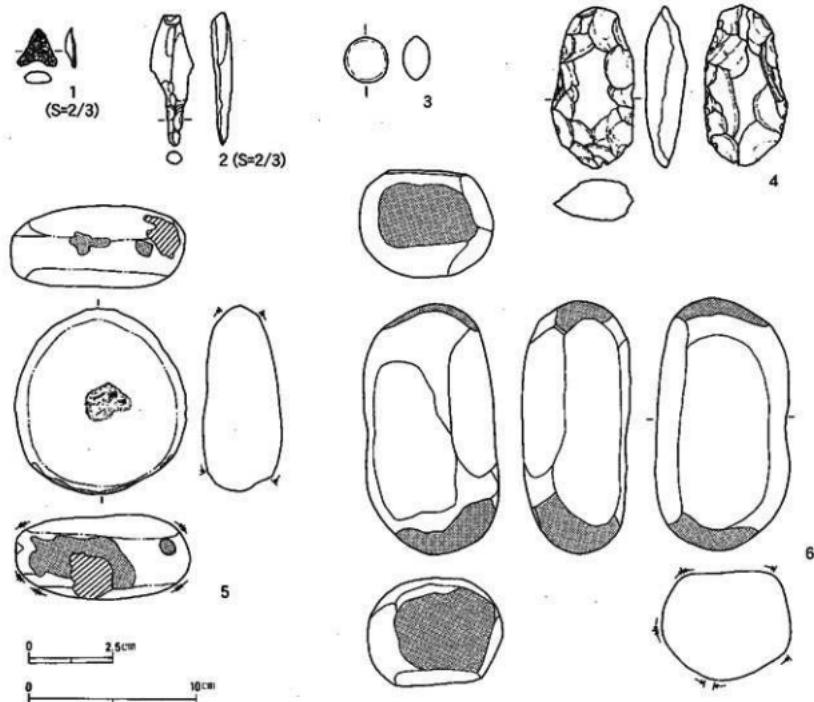
第61図 第28B号住居跡

第62図 第28B号住居跡 出土遺物 (1)





第63圖 第28號住居跡 出土遺物 (2)



第64図 第28B号住居跡 出土遺物 (3)

第2表 第28B号住居跡出土石器一覧 (第62図)

器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土位置	備考
1	石鏡	1.1	1.3	0.3	0.27	28B住	
2	石錐	3.9	1.3	5.5	2.3	28B住	
3	—	2.6	2.6	1.7	1.6	28B住	表面は光沢をもつ
4	打製石斧	9.4	4.9	2.4	115	28B住	
5	凹石	10.9	10.1	4.9	690	28B住	磨面・敲打痕あり
6	磨石	14.7	7.9	6.3	1084	28B住	敲打痕あり

炉 埋甕炉で掘り方は70cm×45cmである。炉の脇には深鉢の底部が置かれている。

その他施設 壁沿いにpitが巡るが、西側には全く見られなかった。113cm×70cmの土坑が1基確認されている。

また、住居内には一抱えもある大きな石が床から浮いた状態で見つかっている。住居廃絶後の屋内墓などの施設も想定されたが、それを裏付ける積極的な証拠は得られなかった。

出土遺物 (第62~64図・第2表)

1・2は沈線でモチーフを描くもので、ともに半裁竹管による円形刺突も見られる。2の地文は縄文である。3~12は連続爪形文をもつ一群で、3は疑縄文地に幅狭の連続爪形文を施した隆帯を巡らせている。5・6は連続爪形文の間の突出した部分に斜方向の細かい刻みを施している。11は口縁部から垂下する刻みを持った棒状の貼り付け文を有する。これは大倉崎類型によくみられる特徴である。13~20は浮線文系の一群である。16・20の浮線文上には縄文を転がしている。21~43は沈線文系の土器である。21の口縁部直下には平行沈線を伴った粗い連続爪形文が施され、さらにその直下には縦方向の連続した細かい刻みが見られる。24・25などの沈線は2条以上

の单位をもった工具によって描かれている。なお25は埋甕炉として使われていたため、内外面ともに脆弱となっている。33~34はともに縄文地に半縦竹管による平行沈線でモチーフを描いているが、33は口唇部に刻みと「×」状の刻みをもつ。35にはD字状の押し引きも見られる。44~48は縄文が施された一群である。49・50は浮線文系の浅鉢である。51は沈線文地に刺突のあるボタン状貼付文をもつ土器で口縁の下で横走する沈線によって区画され口縁部側は横方向に展開する矢羽状の沈線文地に貼付文を有する。胸部は縦方向に展開する沈線文が描かれ、その上に貼付文をランダムに配置する。諸磯c式である。52~56は前期末葉の土器で、53は口縁部に幅広の押圧がみられる。55・56は縦方向に展開する貼り付け文をもつ。60は細かい斜方向の刻みと刺突をもち、橙灰褐色を呈する。胎土分析の結果、山梨県内の胎土ではない可能性が強いという結果が出されている。61~64は比較的薄手で灰白色を呈することから異系統土器と考えられる。61は細かい連続爪形文とハの字状の刻みを持ち、北白川下層IIb式と考えられる。外面に赤彩の痕跡が残っていた。62~64は梯子状貼付文をもつもので北白川下層IIb~IIC式と考えられる。石器については水晶製の石鎌、頁岩製の石錐、打製石斧、凹石、叩き石などがみられた(第2表)。以上見てきたように、沈線文系や浮線文系、連続爪形文をもつものなどの諸磯b式に比定される一群を中心に若干の諸磯c式や前期末葉の土器も含まれているが、炉体土器から本住居跡は諸磯b式新段階に位置付けられよう。

第29号住居跡(第65図)

位 置 M-N-7グリッド
規模・形状 直径6m程度の範囲か?
床・壁 ともに不明瞭。
炉 55cm×50cmの範囲に焼土が認められた。焼土層はきわめて薄い。
その他施設 焼土の周辺にpitが4基確認された。
出土遺物 出土遺物はみられなかった。

2.土坑・風倒木

第13号土坑(第66図)
位 置 G-8グリッド
規模・形状 直径80cm。不整円形。
出土遺物 土坑内からはほぼ底面に近い位置から灰白色の粘土塊と礫が出土した。

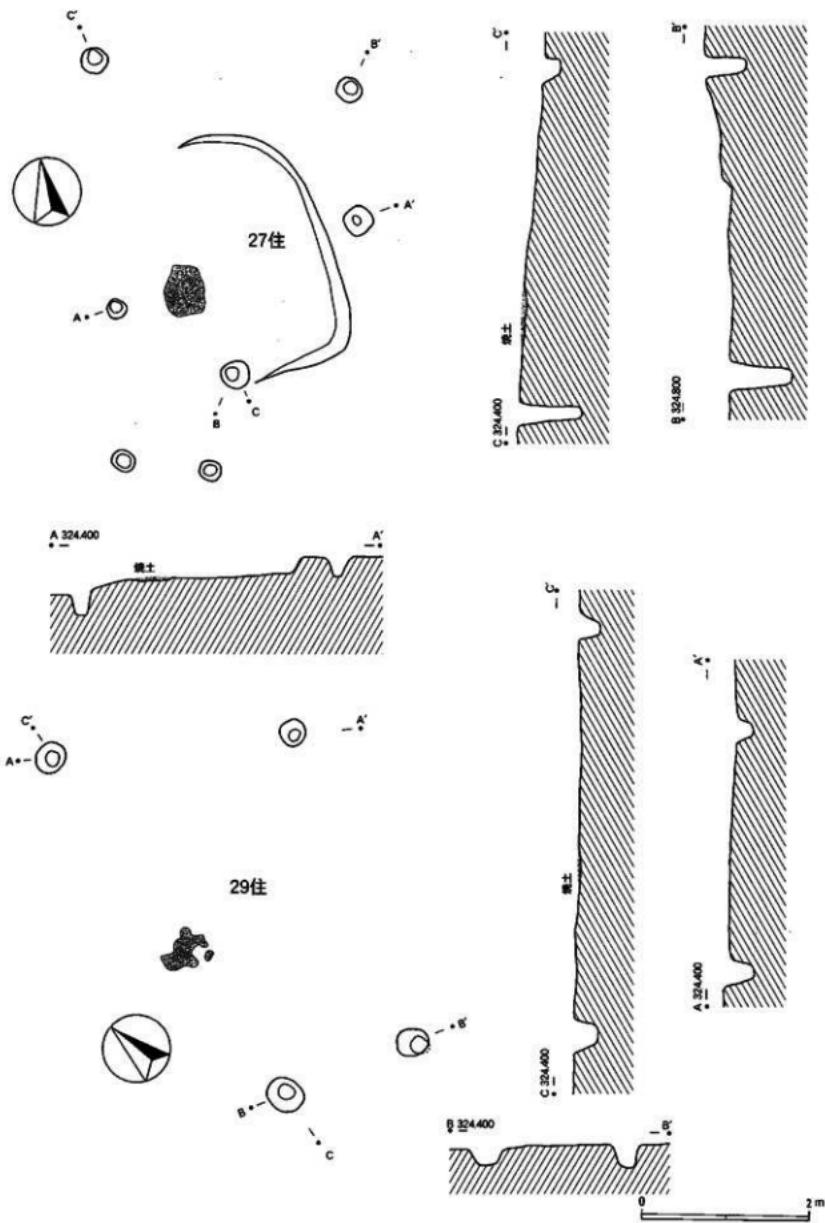
第16号土坑(第66図)

位 置 M-2グリッド
規模・形状 26cm×26cm。円形。
出土遺物(第67図)

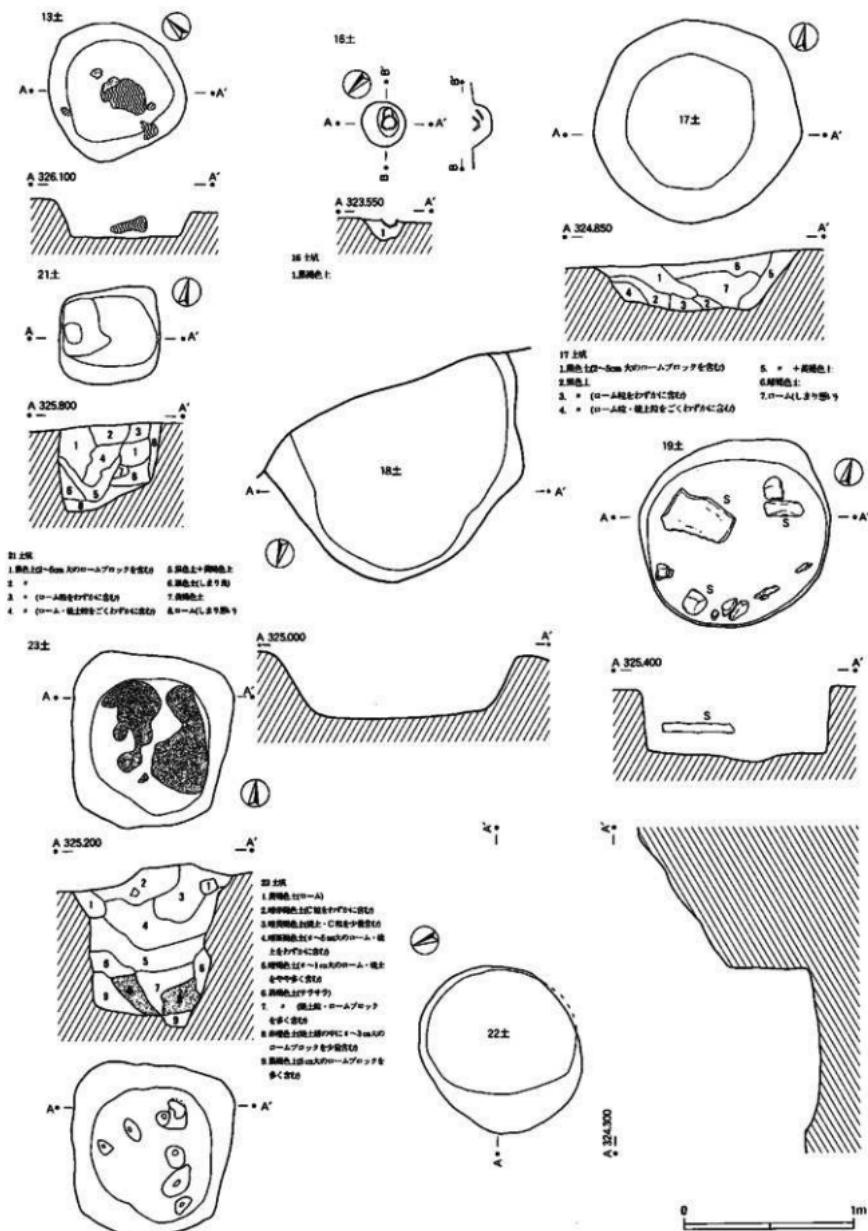
1は小形鉢で内外面はハケ調整がなされ、外面についてはハケ調整の後、ハケがナデ消されている。2は高坏の坏部で外面にはミガキがみられる。高坏の坏部の破片の上に重ねるような形で小形鉢が出土した。

第17号土坑(第66図)

位 置 H-9グリッド
規模・形状 1.2m×1.2m。深さ30cm程度。円形。14号住居跡に切られる。
出土遺物(第67図)
3は縄文地に浮線文を持つ土器で浮線文上にも縄文を転がしている。口唇部には刻みが施される。前期末葉に位置付けられる。



第65図 第27・29号住居跡



第66図 第13・16・17・18・19・21・22・23号土坑

第18号土坑（第66図）

位 置 G-3グリッド

規模・形状 1.6m×1.05m(+α)。深さ40cm程度。不整円形。擾乱溝に切られる。第1号墳のマウンドの下で検出された。

出土遺物（第67図）

5は斜格子目文が描かれ、その交点には竹管状円形刺突を配したものでいわゆる「大倉崎類型」にあたるものと考えられる。6は浅鉢で屈曲部には刻みが、胸部には沈線文をもつ。7は浅鉢の底部で胎土は緻密、底面付近には1条の沈線をもつ。以上は諸磕b式である。

第19号土坑（第66図）

位 置 G-3グリッド

規模・形状 1.2m×1.05m。深さ40cm程度。不整円形。

出土遺物 土坑底面付近で、礫が壁にほぼ沿う状態で出土した。中には板状の石も見られた。

第23号土坑（第66図）

位 置 H-6グリッド

規模・形状 1.0m×92cm。深さ70cm程度。隅丸方形。土坑底面にはpitが見られる。壁面・底面ともに焼けている。中からは多量の焼土とともに挙大の礫が出土した。

出土遺物（第67図）

4は平行する細かい連続爪形文をもつ土器で諸磕b式である。

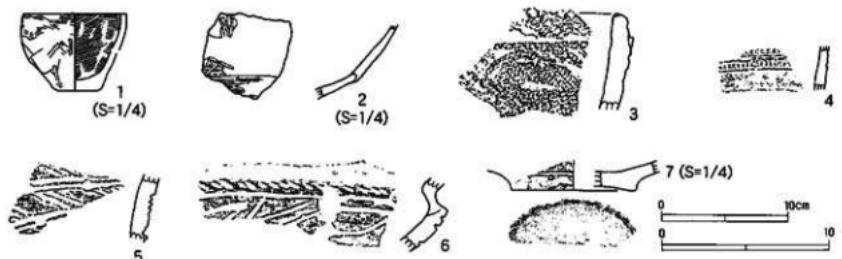
第24号土坑（第68図）

位 置 H-I-8グリッド

規模・形状 1.04m×90cm。不整円形。風倒木1・第20号住居跡に切られる。

出土遺物（第68図・第3表）

1は小形の土器の口縁部で、幅狭の連続爪形文で弧状モチーフを描いている。2は半裁竹管によって山形状の沈線文が描かれる。口唇部には刻みをもつ。3・4は平行沈線を伴わない連続爪形文が2条施され、これより上の区画には沈線文が描かれ、下には縄文が施される。5は連続爪形文とその間の突出した部分に斜方向の刻みを持つ土器である。6は連続爪形文の間にD字状の押し引きを施す。7は口唇部に刻みを持つもの。8は縄文地に凹線を巡らせた口縁部。9は縄文を転がした陸帯をもつ縄文地文の土器。10は内面調整が粗い縄文地の口縁部である。



第67図 第16・17・18・23号土坑 出土遺物（16土…1~2、17土…3、18土…5~7、23土…4）

11は縄文の施された底部である。12~15は橙灰褐色の胎土をもつ土器で隆基上の交互刻みと刺突をもつのが特徴である。この一群の土器は肉眼観察によっても在地系土器との判別が可能であるが、胎土分析の結果、甲府盆地以外からもたらされたものである可能性が高いことが指摘されている（附編-1参照）。16は半裁竹管による平行沈線で多重木葉文を描く深鉢で、モチーフの外側は地文の縄文が磨り消されている。モチーフ以下の区画は沈線となる。以上の内容から本土坑は諸磯a式の新段階から諸磯b式の古段階に位置付けられる。16・17は凹石で磨り面・敲打面ももつ。

風倒木1（第68図）

位 置 H-8グリッド

規模・形状 4.1×2.3m。土層8の黄褐色ローム（スクリーントーン部分）が島状に残された形の、上から見るとドーナツ状の土坑である。第24号土坑（縄文時代前期後半）を切り、第20号住居跡（弥生時代末）の貼り床下から検出されたことから、時期的には縄文時代前期後半以降、弥生時代末以前のものと考えられる。

出土遺物 諸磯a・b式の土器片などが出土したが図示できるものはなかった。

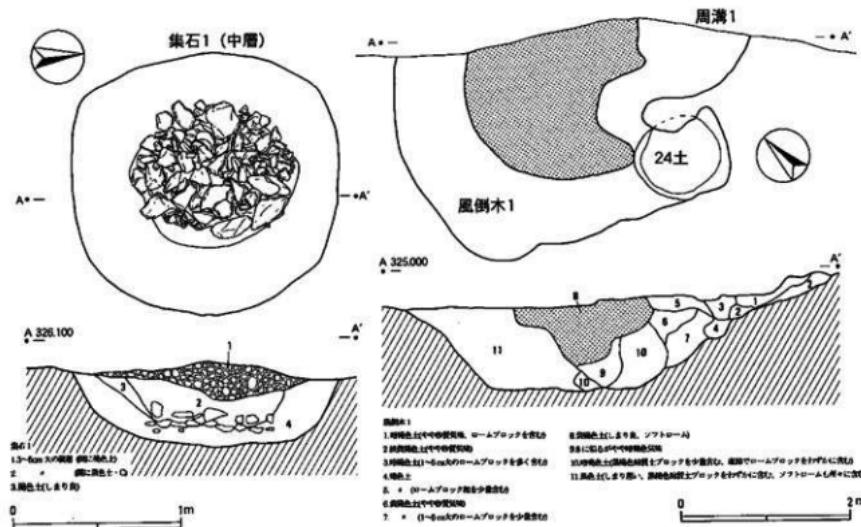
3. 集石土坑

第1号集石土坑（第68図）

位 置 F-8グリッド

規模・形状 1.55×1.52m。不整円形。第13号住居跡を切っている。第1層には玉砂利大程度の礫が多量に含まれ、それを取り除くと3~5cm程度の礫層でさらにその下層には10~30cmのやや大きめの礫が敷かれている。2番目の礫層中には炭を含む黒色土が充填している。

出土遺物 大小さまざまな礫のほかには遺物は出土しなかった。



第68図 第1号集石土坑・第24号土坑・風倒木1

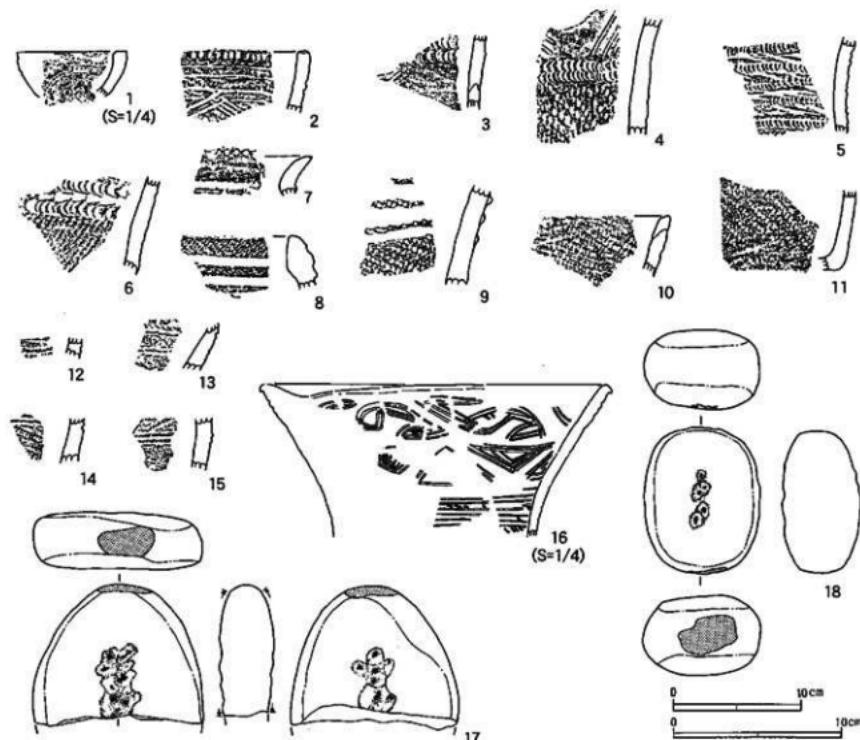
第3号集石土坑（第70図）

位 置 E-1グリッド

規模・形状 1.4×1.3m。不整円形。土坑上面に30cm程度の集石層をもち、土坑底面からやや浮いた位置に深鉢を横位に埋置する。集石層の礫は玉砂利程度から20cm大とさまざまである。

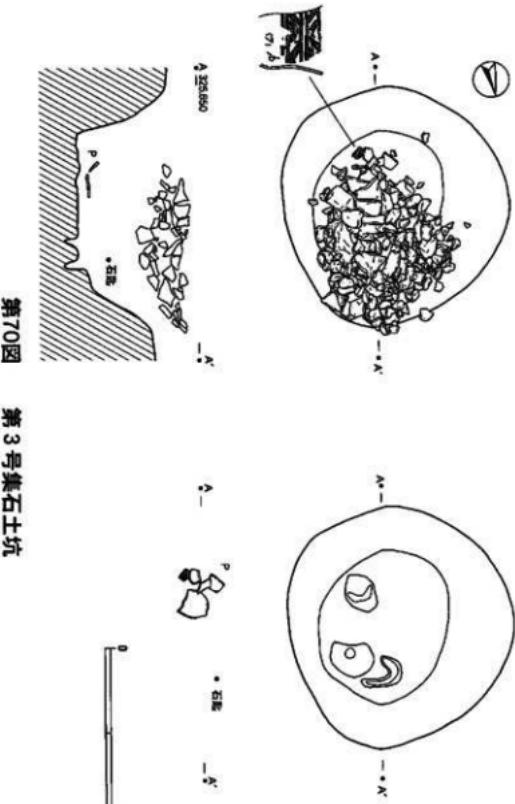
出土遺物（第71図）

1は半裁竹管による米字文が描かれ、タテ線上には円形竹管文が施される。2・3は半裁竹管によって葉脈文が描かれ、2の口縁部には刻みが施される。3は半裁竹管による沈線で弧状のモチーフが描かれる。5は半裁竹管による麻手状のモチーフをもつものと考えられ、地文には縄文が施される。6は縄文地文の口縁部で口唇部には刻みが施される。7～10は連続爪形文をもつ一群で爪形文列の間の突出した部分に斜方向の刻みを施している。11は口縁直下に横走する沈線文を持つ口縁部である。12は屈曲部以下に縄文を施す浅鉢である。13はタテ区画が意識された深鉢で、上半には平行沈線を伴った連続爪形文によって描かれた孤線文が、現状で2段にわたって展開



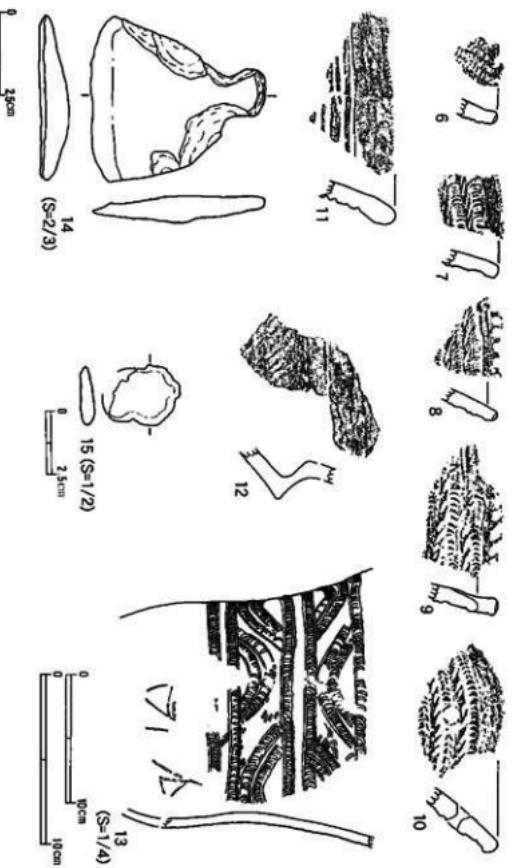
第69図 第24号土坑 出土遺物

器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土位置	備考
17	凹石	安山岩	8.4	10.1	3.1	355	24土 壁面・敲打痕あり
18	凹石	安山岩	8.4	6.9	4.6	400	24土 敲打痕あり

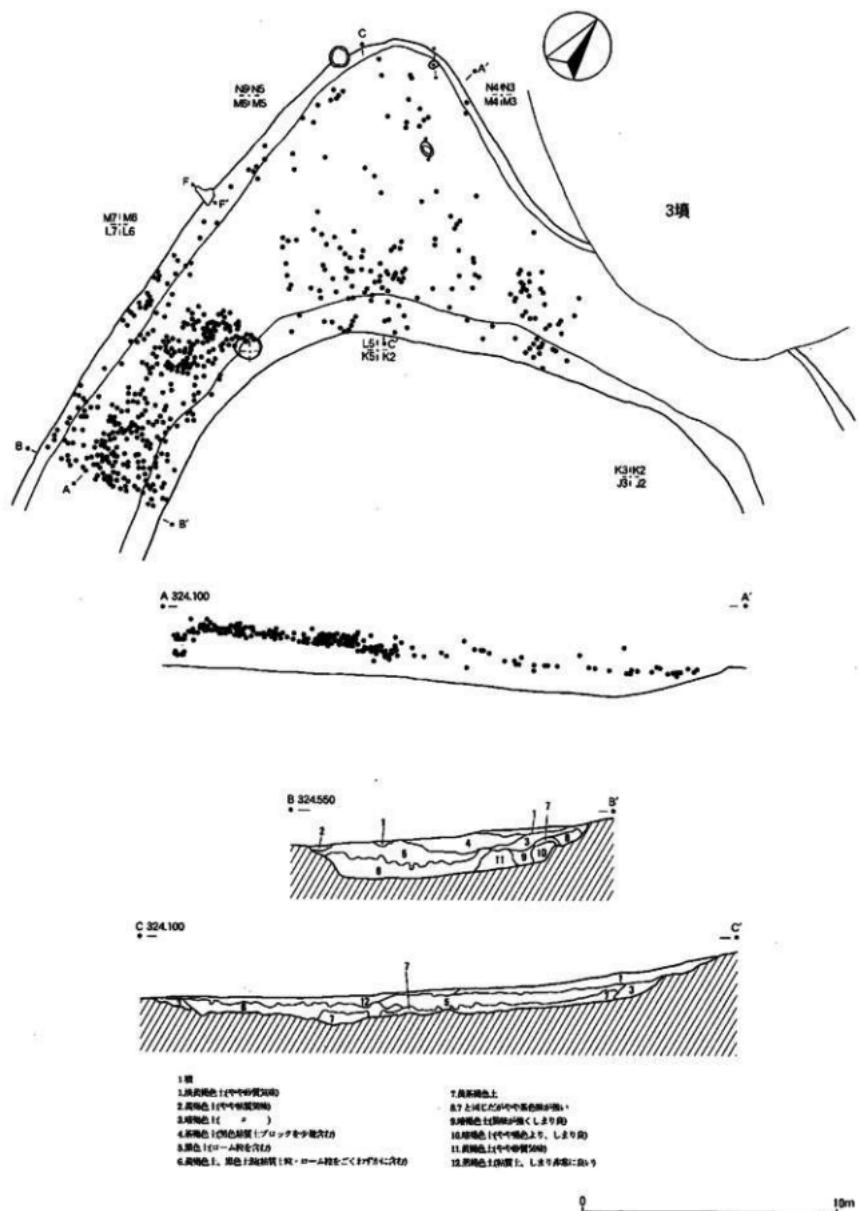


第70図

第3号集石土坑



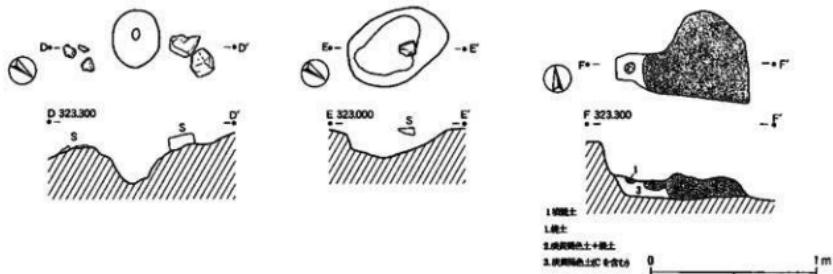
第71図 第3号集石土坑 出土遺物



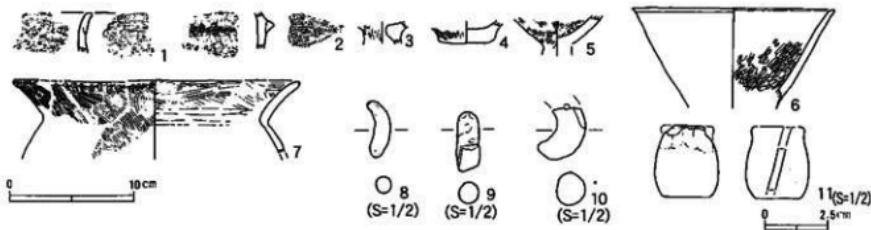
第72図 第1号墳



第73図 第1号墳（全体図）



第74図 第1号墳 出土状況



第75図 第1号墳 出土遺物

する。地文には縄文が施されるが所々磨り消されている。胴部下半には沈線による三角モチーフがランダムに描かれる。14は泥岩製の石匙で、長さ5.2cm、幅4.9cm、厚さ0.8cm、重さ17.3gである。表面の風化が著しい。15は土製品の一部と考えられるが胎土は粗く、てこね状に形作った感がある。文様などは全くみられない。以上の内容を概観すると、米字文という諸磯a式の古い要素を持つものや、葉脈文という諸磯a式的な性格を持ちながらも口唇部に刻みを施すという諸磯b式的な性格も窺える2のような深鉢がみられるが、このような諸磯a式的モチーフや諸磯a式と諸磯b式のあいの子的な土器と共に、13のような諸磯b式の古段階の様相を示すものや、7~9のような幅広の連続爪形文をもつ諸磯b式そのものの様相をもつ土器が供伴しているのは興味深い。以上の内容から、本集石土坑の時期は諸磯a式~諸磯b式の過渡期に位置付けられるものと考えられる。

4. 墓

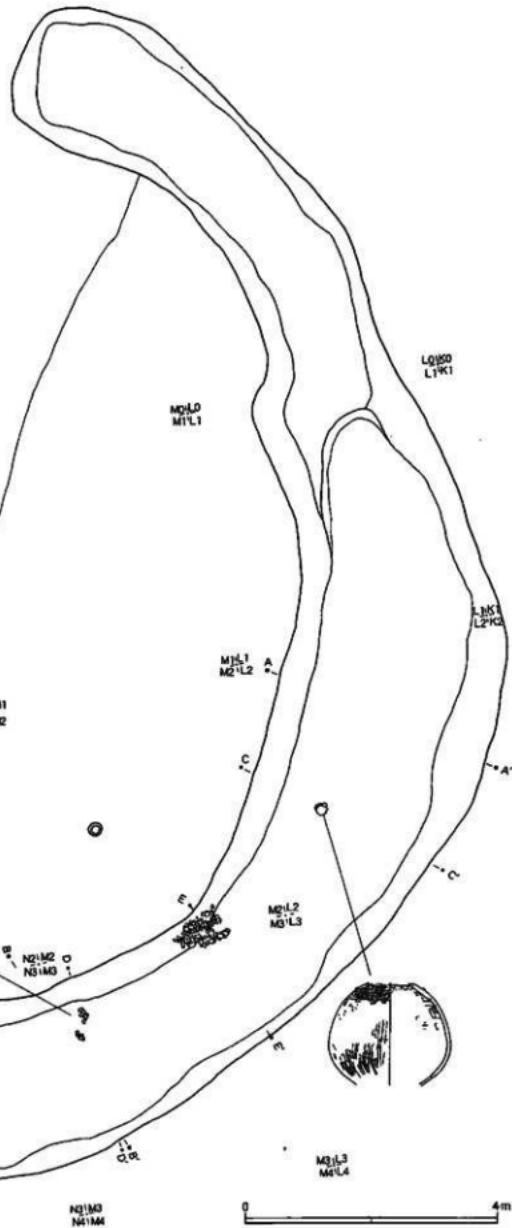
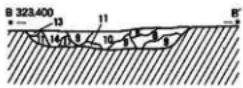
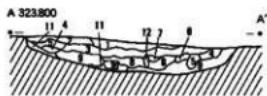
第1号墳 (第72~74図)

位 置 J~N-1~7グリッド

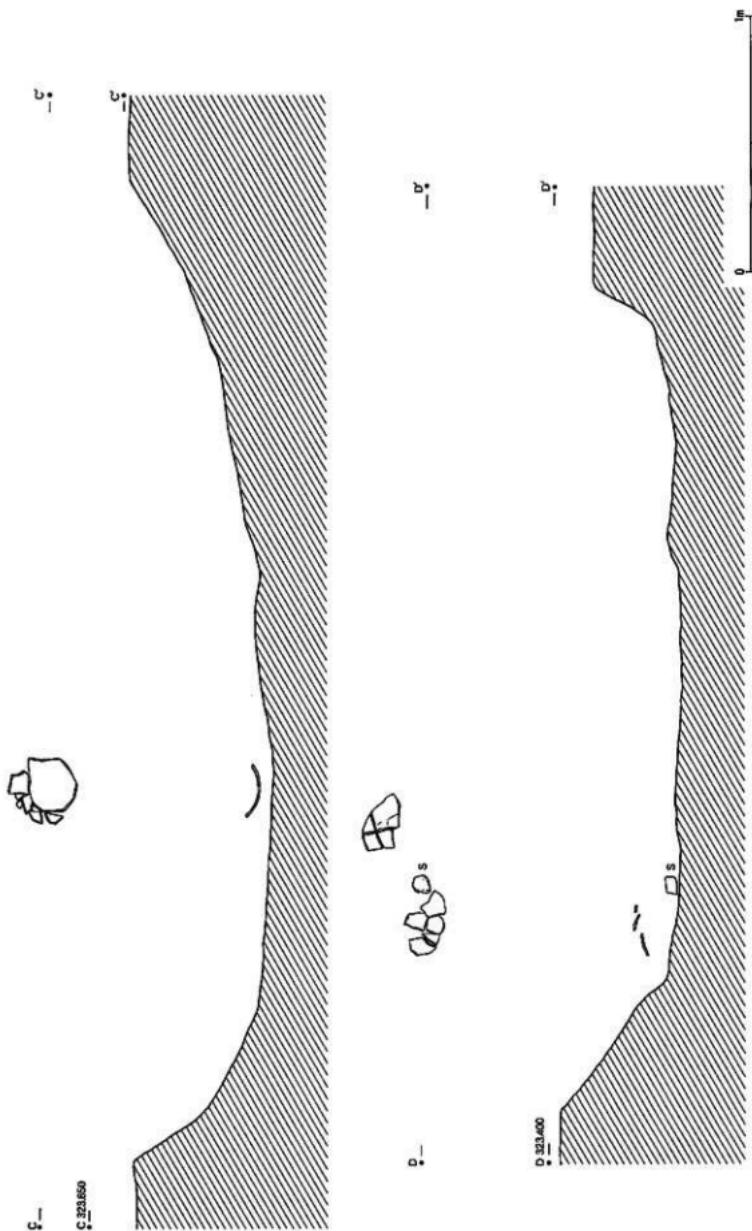
規模・形状 周溝全体のうち、北側の1/4程度の範囲である。周溝が最も低い位置になるN・M-4・5付近で外側に出っ張る形状となる。pitが2基と焼土範囲が1箇所認められた。

出土遺物 (第75図)

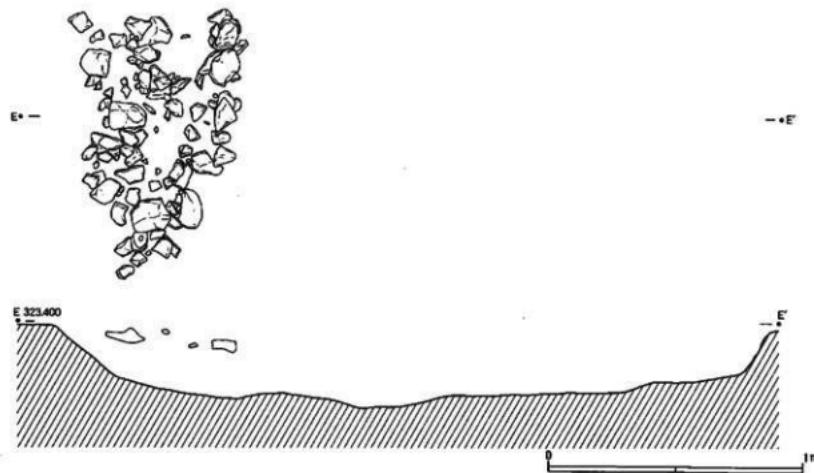
周溝からの出土遺物は縄文土器の破片がほとんどで、周溝に伴う遺物はごくわずかであった。1は外側に折り返しをもつ壺の口縁部で内面にはハケ調整が見られる。2は瓶の破片だろうか。3は器台の破片、4は小形の壺の底部、5は高杯の杯部、6は壺の口縁部である。7は壺で口縁部には貝殻状工具による刻みがみられる。8・9は棒状土製品で8は完形、9は図の下部を欠損している。10は土製勾玉の尻部であるが、孔より上の頭部を欠損している。11は用途不明の土製品であるが、中心部の貫通孔は小枝状の棒に粘土を巻きつけて形作った痕跡を残している。形状は異なるものの、同様の土製品は第7号住居跡でも出土している (第17図-22)。



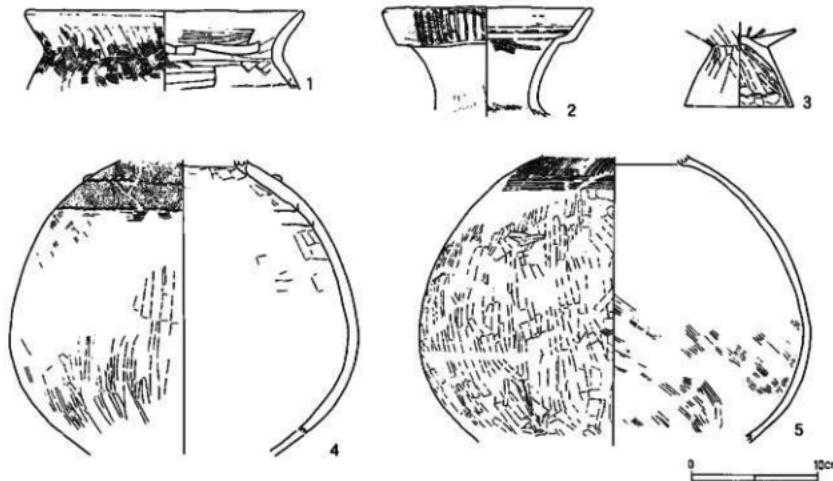
第76図 第2号墳



第77図 第2号墳 遺物出土状況



第78図 第2号墳 磚出土状況



第79図 第2号墳 出土遺物

第2号墳 (第76~78図)

位 置 L~N~0~3グリッド

規 模・形 状 第1号墳を切る。直径20m程度の円墳である。北側半分については後世に削平され、地形自体が急激な斜面部となるため、周溝は検出されなかった。L-1グリッドで周溝底面が段状となる他はフラットな掘り込み面を呈している。周溝から出土する遺物はそれほど多くなかったが、3箇所で遺

物の集中が認められた（C・D・Eライン）。なお、墳丘上から小形鉢と高杯の破片が出土した小pit（第16号土坑）が見つかっているが本墳に伴うものかどうかは不明である。

出土遺物（第79図）

1は壺、2は複合口縁壺で有段部分はヨコ方向のハケ調整を行なった後、ヘラ状工具によってタテ方向の沈線を10条入れている。3は脚部内面に折り返しをもつS字状口縁壺の台部である。4は壺で肩部に縄文帯と結節縄文・円形浮文をもつ。胸部は主としてタテ方向のナデ風のミガキとなる。5は壺で肩部に斜方向のやや粗いハケを施した後ヨコ方向にゆるいハケを入れている。それ以下は主としてタテ方向のナデ調整となる。器壁はきわめて薄い。4はCライン、5はDラインでそれぞれ出土した。

第5章 遺構外出土遺物

第1節 旧石器時代の遺物（第80図）

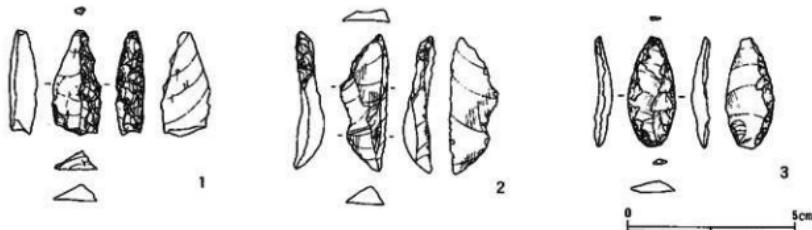
1は石刀素材の二足縁加工ナイフ石器（黒曜石製）、2は縦長剥片素材の部分加工ナイフ形石器（黒曜石製）、3は縦長剥片素材の尖頭器（安山岩製）である。1は素材剥片の打面をプランディングによって除去し、端部側を基部に設けている背面右側縁のプランディングは対向調整であり、この調整に伴いステップフラクチャーが発達し、背面の縫部には調整に起因する潰れが見える。左側縁には細かい調整により刃潰しが成され、先端部と基部は折損している。2は素材剥片の打面をプランディングによって、除去し、同時に素材剥片を遮断する連続的な調製を加えることによって、形態を作出している。背面構成から、作業面形状が整っていない石核から剥離された剥片であることが分かる。左右の縁部にみられる小薄利はガジリである。3は背面左側縁の先端部に素材面を、基部には打面を残留させている。先行剥離面の形状により、同一打面から連続的な剥離が予想され、調整は基部から見て逆時計回りに進行し、腹面左側縁には調製を加えずに作業を終えている。背面右側縁からの調整は、器体中央にステップフラクチャーによる隆起を生じさせている。

（網倉邦生）

第2節 縄文時代の遺物

1. 土器

本遺跡からは、早期後半の押型文土器から中期前半の猪沢式にいたる時期の土器が出土しているが、その主体となるのは前期後半の諸磯b式土器である。中期の土器については、前期終末～中期初頭の五領ヶ台I式が中心となり、猪沢式が若干含まれるもの、その後のものについては全くみられない。また五領ヶ台I式については集合沈線文系の土器が主体となり、縄文系はほとんどみられない。またこの時期に並行すると考えられる、異系統土器－北白川下層式・大歳山式・鷹島式－も確認されている。



第80図 遺構外出土遺物（旧石器時代）

I. 早期～前期前半の土器（第80図-1～3）

1・2は押型文土器でネガティプ押型文となる。3は織維土器で口縁部である。本遺跡ではオセンベ土器がみられないことからこれは前期前半の黒浜式期あたりのものであると解釈したい。

II. 前期後半の土器

A. 諸磯a式（第80図-4～9）

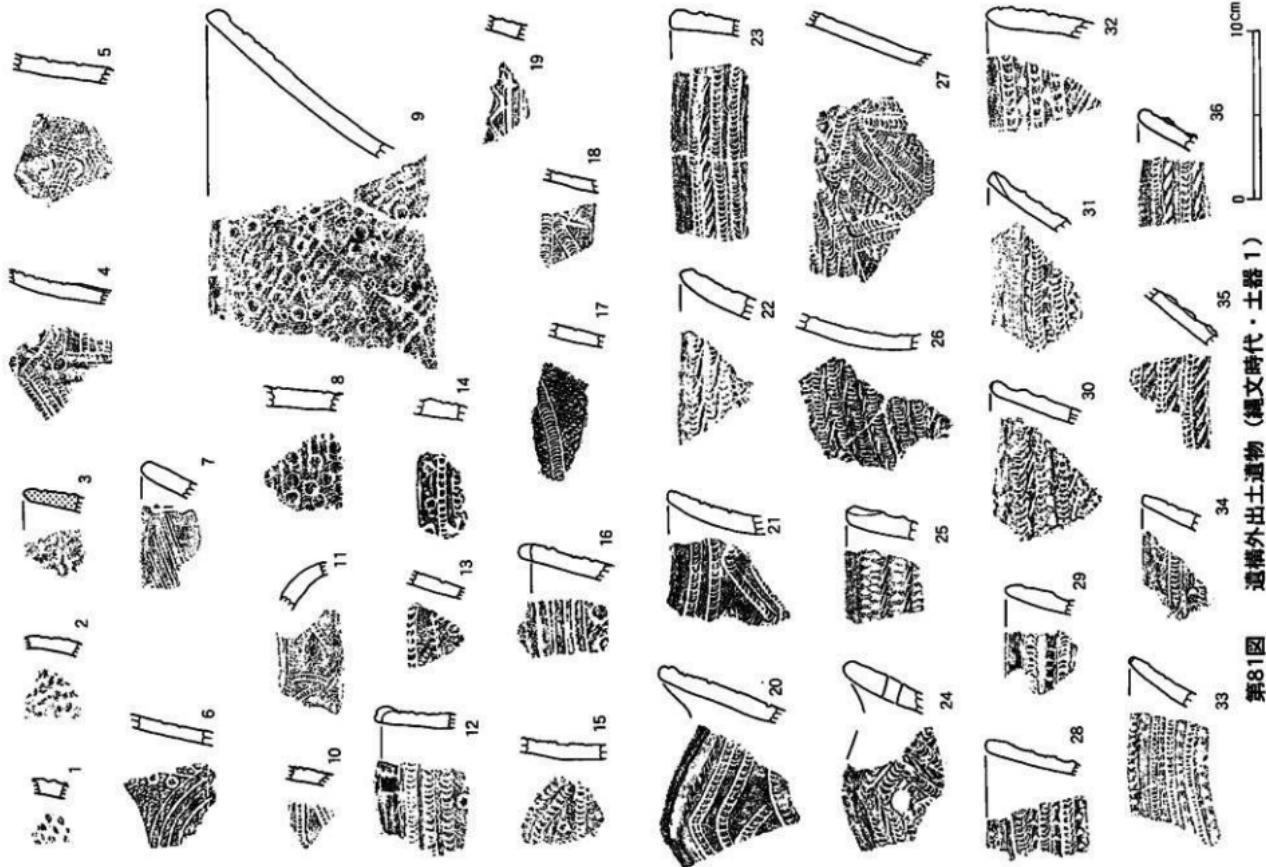
4は連続爪形文による米字文をもつもので円形竹管文を伴う。5は円形竹管文による垂下文をもつ。6は円形竹管文を伴う肋骨文が描かれている。7は半裁竹管による斜線肋骨文と垂下する円形竹管文をもつ。8・9はランダムに配置された円形竹管文をもつもので地文には縄文が施されている。

B. 諸磯b式（第81図-10～36・第82図-37～76・第83図-77～110・第84図-111～140・第85図-141～145）

10・11は幅狭の連続爪形文によりモチーフが描かれたもので、地文には縄文がみられない。幅狭の爪形文という点は諸磯a式的な要素であると言えるが、入組木葉文モチーフが崩れきっている事や全面的に縄文がみられないことからここに含めた。12～16は連続爪形文と円形竹管文をもつ一群である。16は連続爪形文ではなく半裁竹管による平行弦線が描かれている。17の連続爪形文は幅広だが爪形は細かい。18は連続爪形による弧線文に沈線の支柱が付けられたものと考えられる。19は波状文をもつ。20・21は連続爪形により麻手文もしくは大波状文モチーフが描かれたものである。22～36は連続爪形文とその間の突出して浮線化した部分に斜方向の刻みもしくはD字状の押し引きをもつもので、35・36は貼り付けによる浮線となる。37～46は連続爪形文をもつもので、45には沈線文が伴う。47～70は浮線文系の土器で47～60は浮線文上に斜方向の刻みが、61～66には縄文がそれぞれ施され、67～69は無文の浮線となる。70には梯子状の浮線文がみられる。71～102は沈線文が施された一群である。71は斜格子目文が描かれ、竹管状円形刺突もみられることから、大倉崎類型と考えられる。77は半裁竹管による沈線で多重鋸歯状のモチーフを描くものと考えられる。89・90は口縁部の平面形が方形となる深鉢である。102は縄文地にやや太い沈線がランダムに引かれるものである。103～123は縄文が施された土器であるがこれらの中には108や114などのように内面調整がきわめて粗いものもみられる。121・122は共に縄文地に横位の結節縄文がみられる。このような横位の結節縄文は浮島式の特徴のひとつであるが、諸磯b式の古段階などにみられるものもある。105・106は胎土が灰白褐色を呈し、他の土器に比べてやや特異である。内面のナデも極めて粗い調整である。これは羽島下層式に共通の特徴であると言える。123～145には浅鉢を一括した。123は屈曲部以下に縄文が施された浅鉢である。同様のタイプは第3号集石土坑でも出土しており、諸磯b式の古段階にあたるものと考えられる。124・125は連続爪形文をもつ浅鉢の胴部破片である。126～131は浮線文をもつもの、132～135は無文の浅鉢である。136～144は口縁端部に面を持ちそこに文様帯をもつもので、沈線文による木葉状モチーフをもつものと、浮線文をもつものがある。

C. 諸磯c式（第85図-146～164・第86図-166・167）

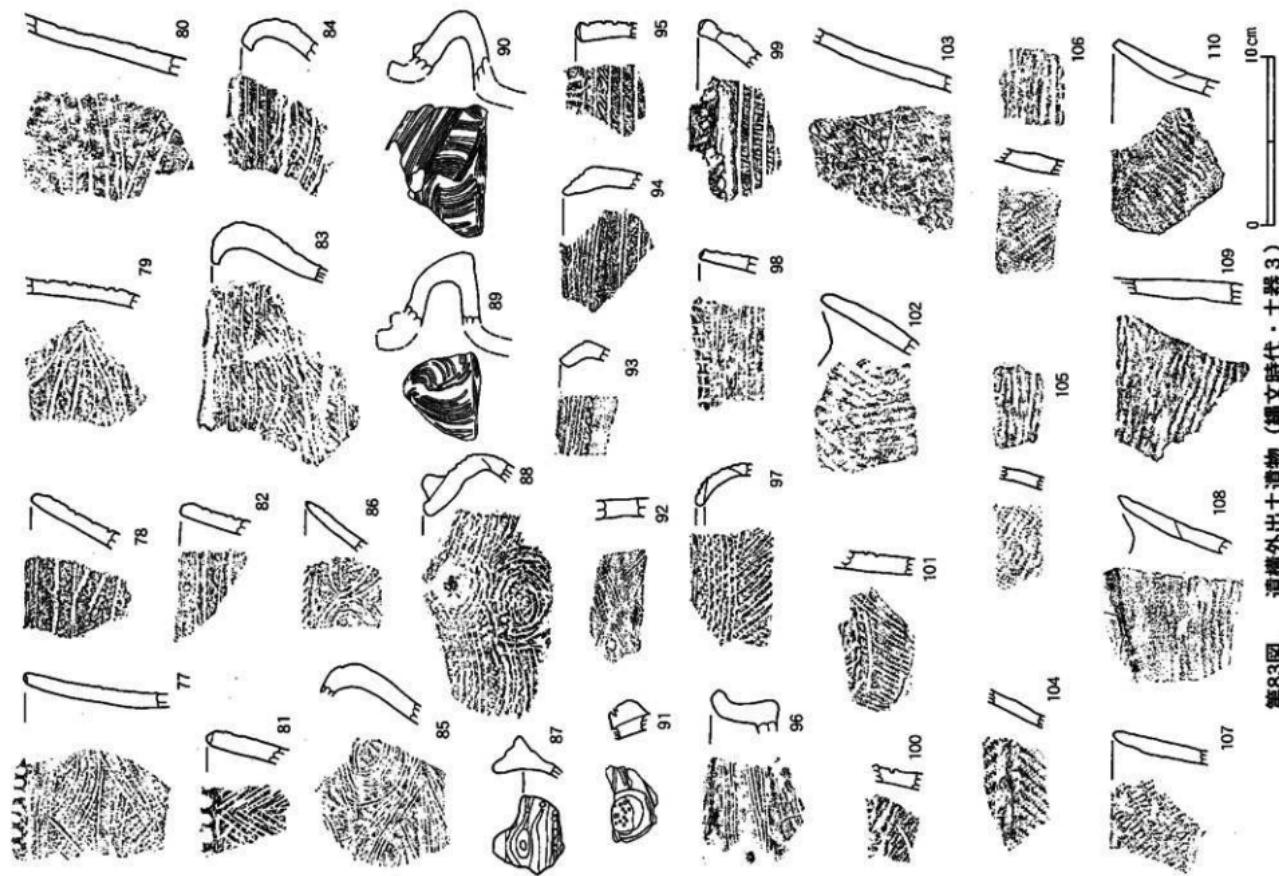
146・147は口縁部直下に刺突をもつものである。148～154・165は棒状結節浮線文をもつもので165以外は3本単位で垂下する。154にはこれに2個1対のボタン状貼付文が伴う。165の地文は口縁直下には横位の条線が施され以下やや崩れた矢羽根状条線が縦方向に展開する。口縁部には棒状結節浮線文が4本垂下し、刺突のあるボタン状貼付文が伴う。口縁部には横位矢羽根状条線がみられるが、まばらであることから新段階に位置付けられるであろう。155には格子目文がみられるが、これは古段階の深鉢胴部にみられるものである。156～159にはボタン状貼付文がみられる。160～164には渦巻状の結節浮線文が施される。160の口縁部文様帶には地文に横位の矢羽根状条線がみられる。この土器の口縁部は4単位の波状となり、波状部下には渦巻と双環状渦巻の結節浮線文が交互に現れ、その間には対向する水滴状のモチーフもみられる。胴部は縦方向の条線で区画し、その間を上下に展開する矢羽根状条線で埋めていく構成をとるものと考えられる。



第81図 遺構出土遺物（縄文時代・土器1）

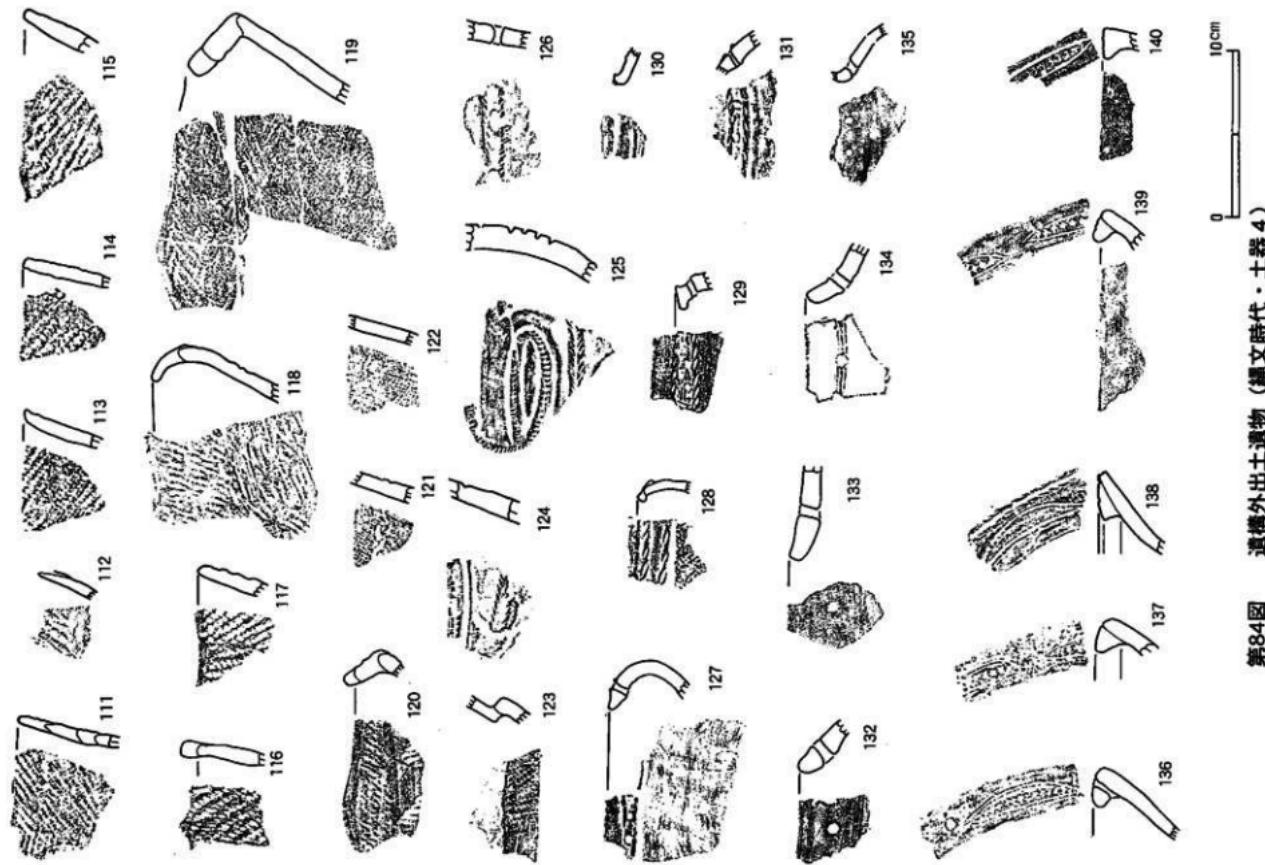


第82図 遺構外出土遺物（縄文時代・土器2）



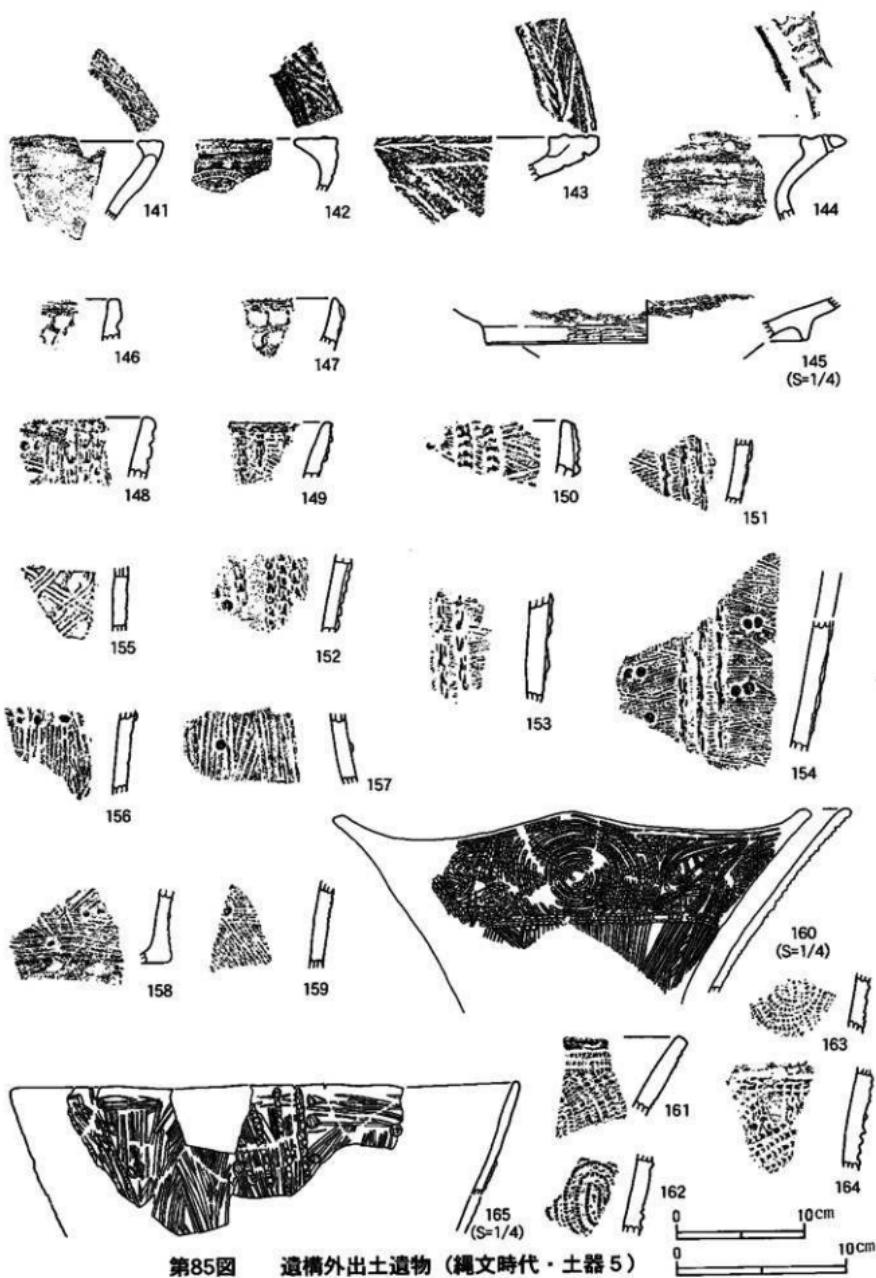
第83圖

遺構外出土遺物（縹文時代・土器 3）

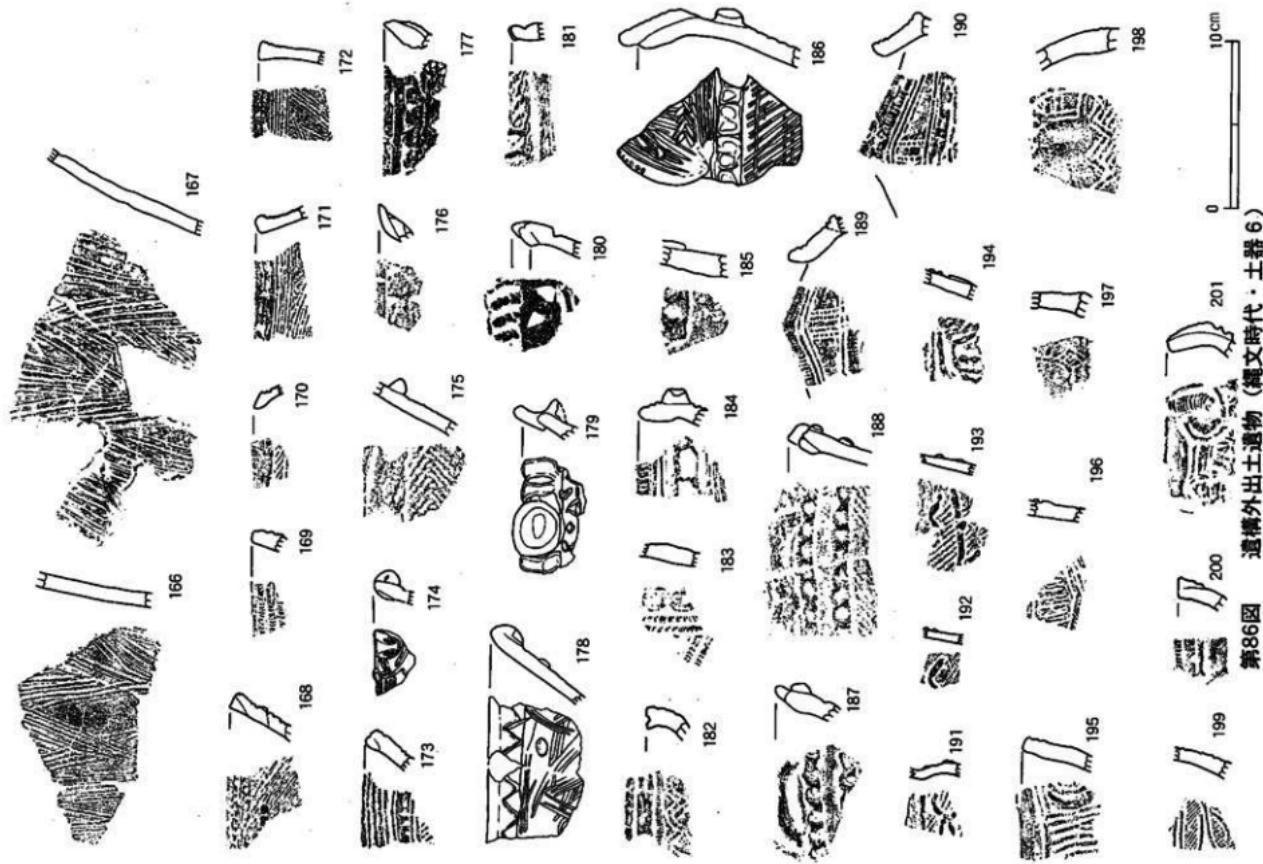


第84図

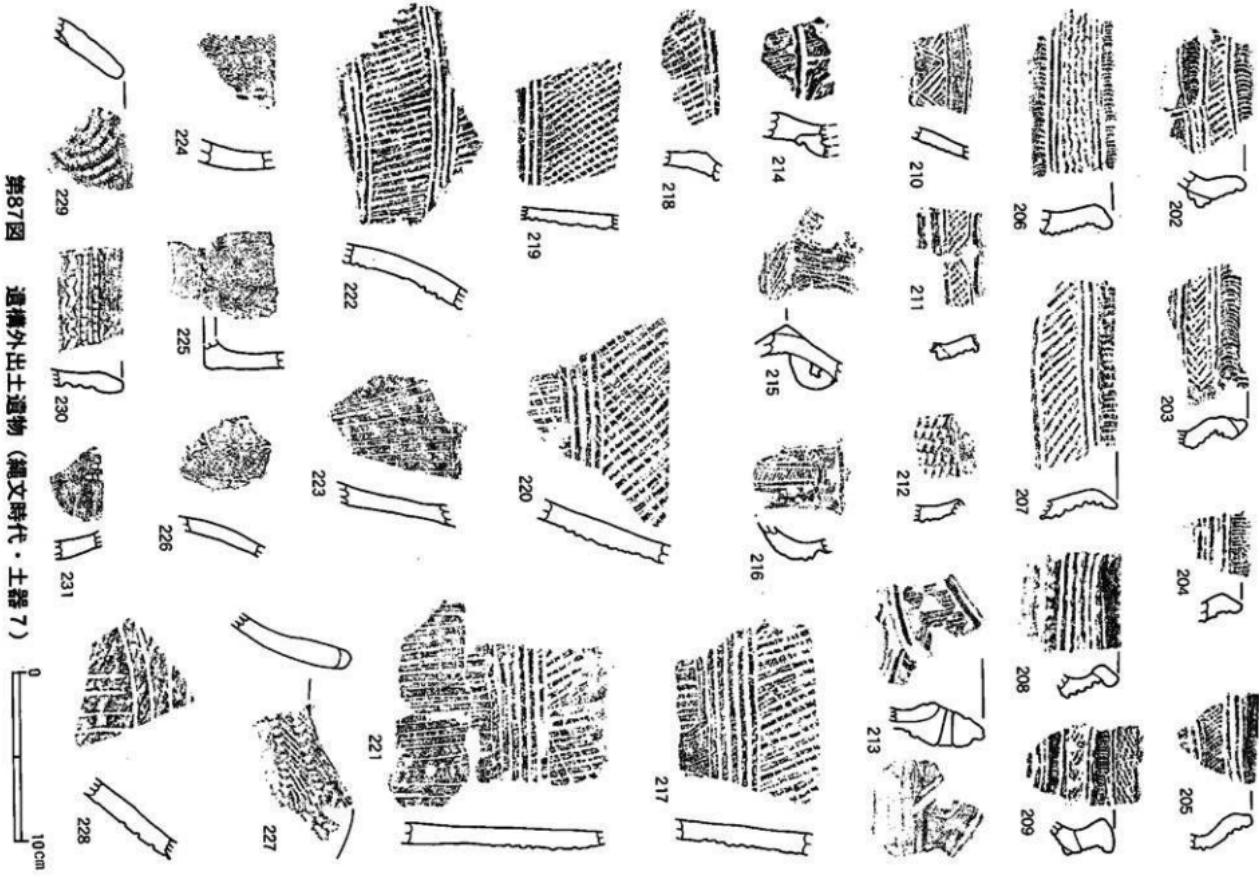
遺構出土遺物（縄文時代・土器4）



第85図 遺構外出土遺物（縄文時代・土器 5）



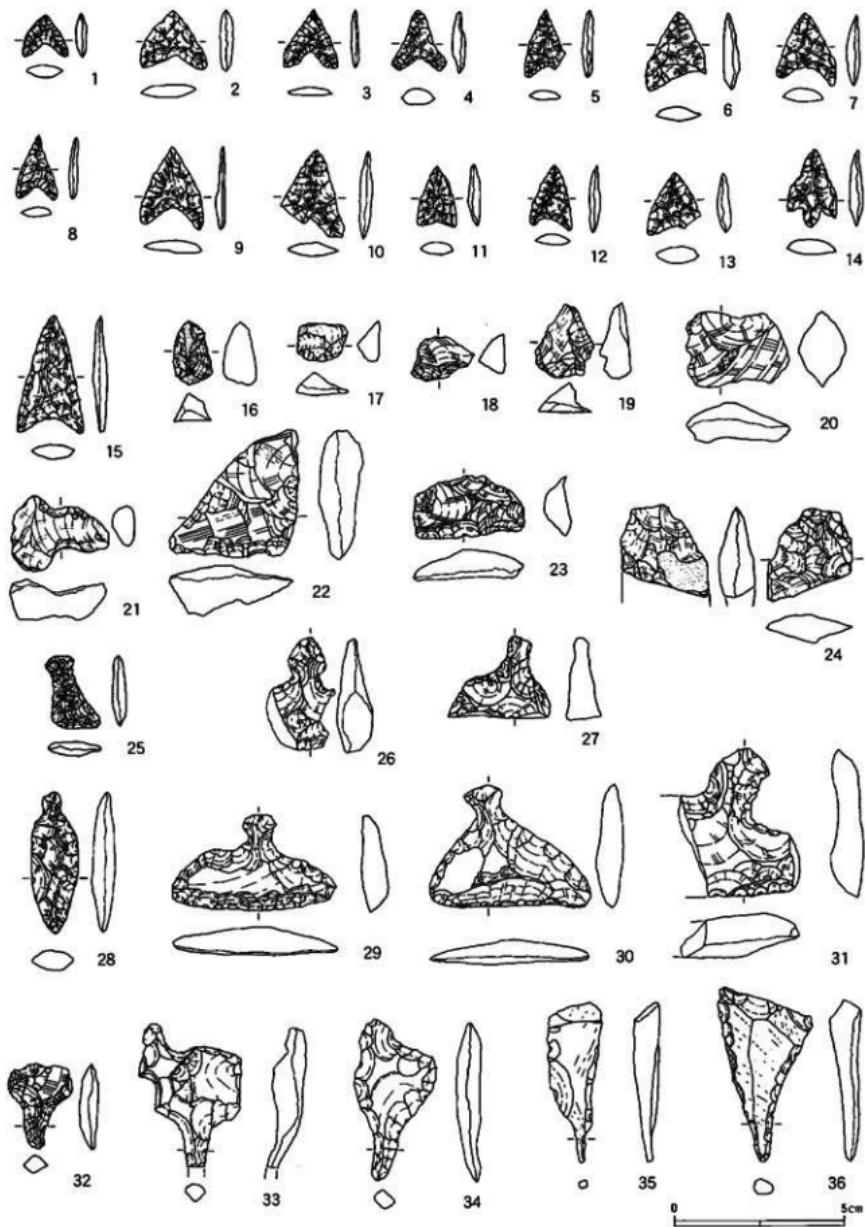
第86圖 遺構外出土遺物（縄文時代・土器6）



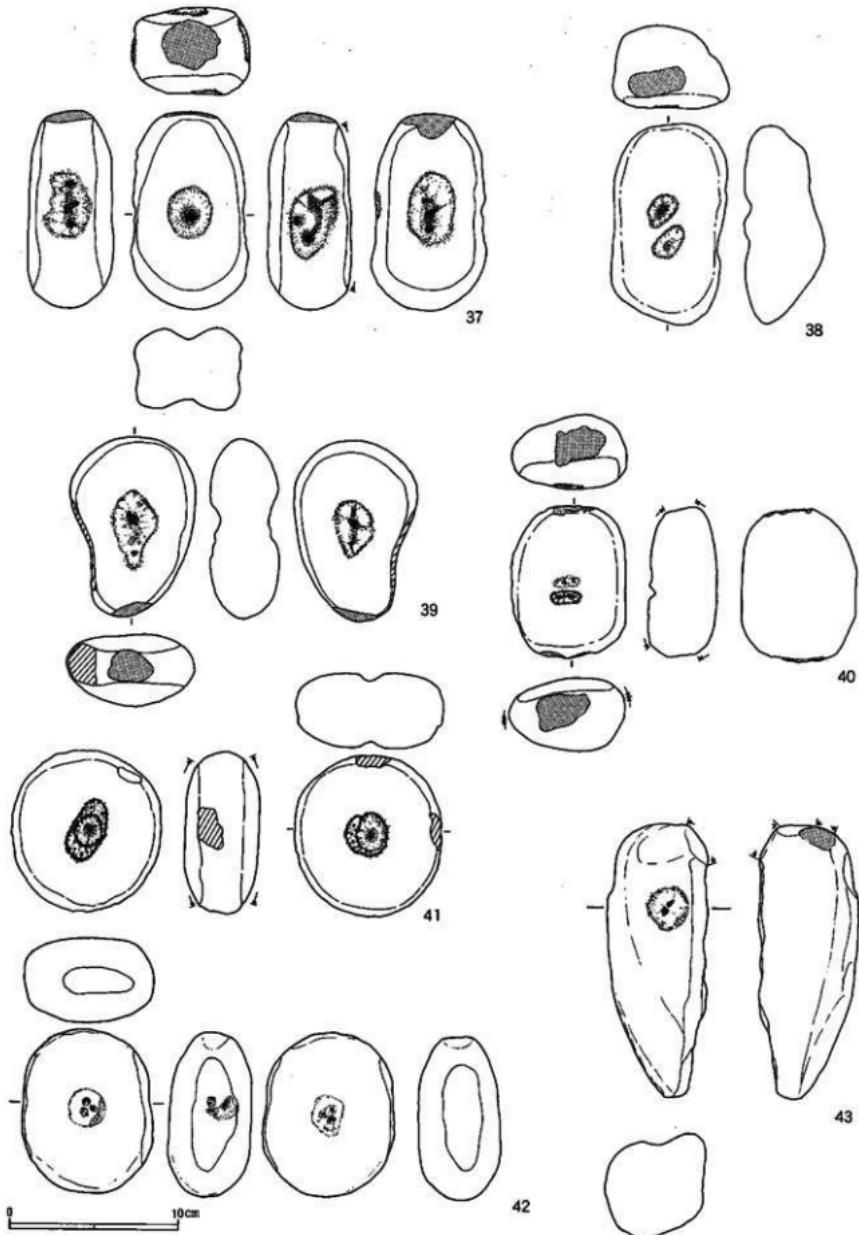
第87図 通横外出土遺物（縄文時代・土器7）



第88図 遺構外出土遺物（縄文時代・異系統土器）

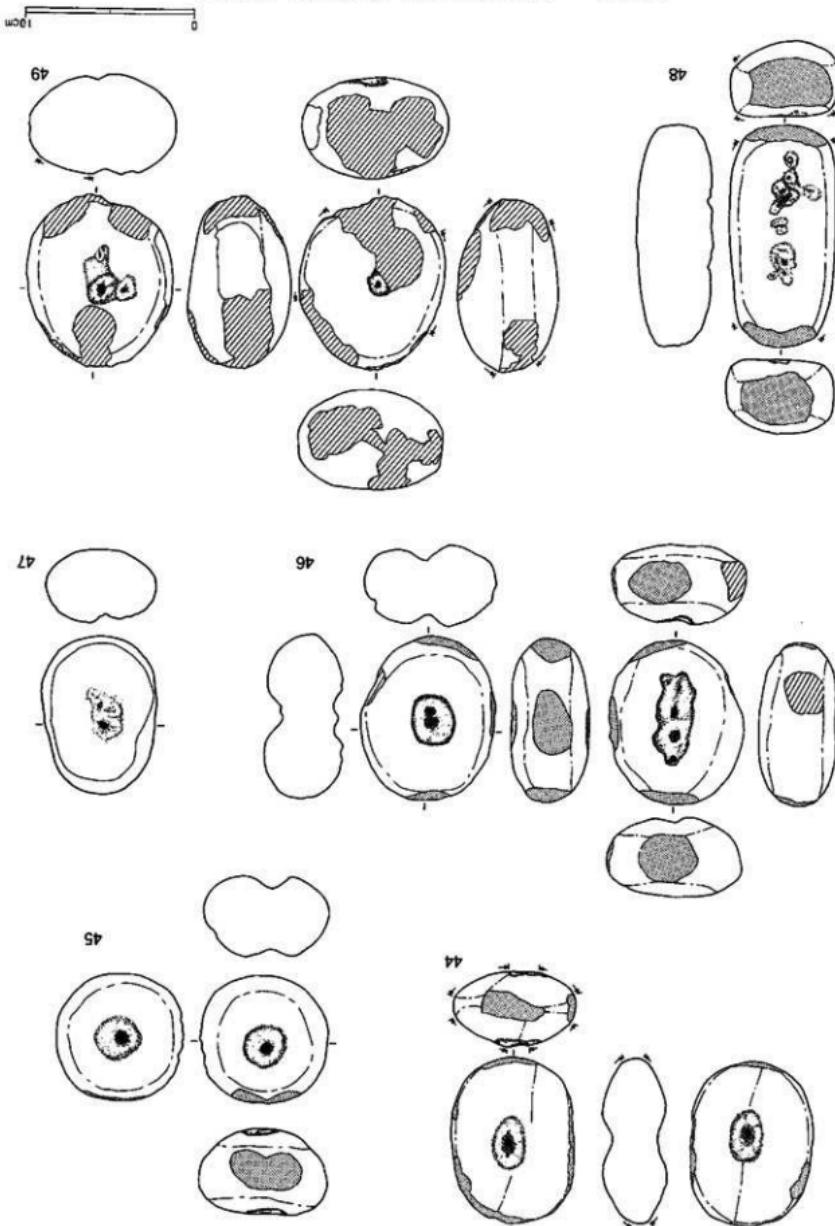


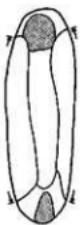
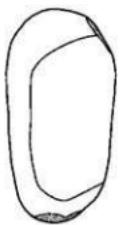
第89図 遺構外出土遺物（縄文時代・石器1）



第90図 遺構外出土遺物（縄文時代・石器2）

第91圖 遺構外出土遺物 (鐵文時代・石器3)

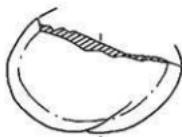




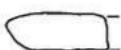
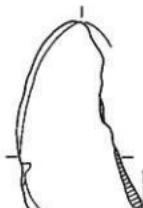
50



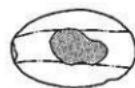
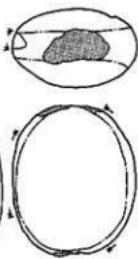
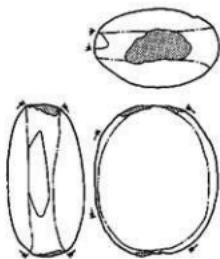
51



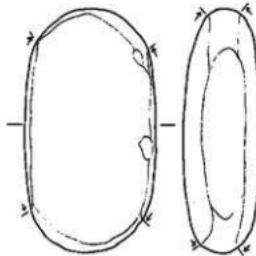
52



53



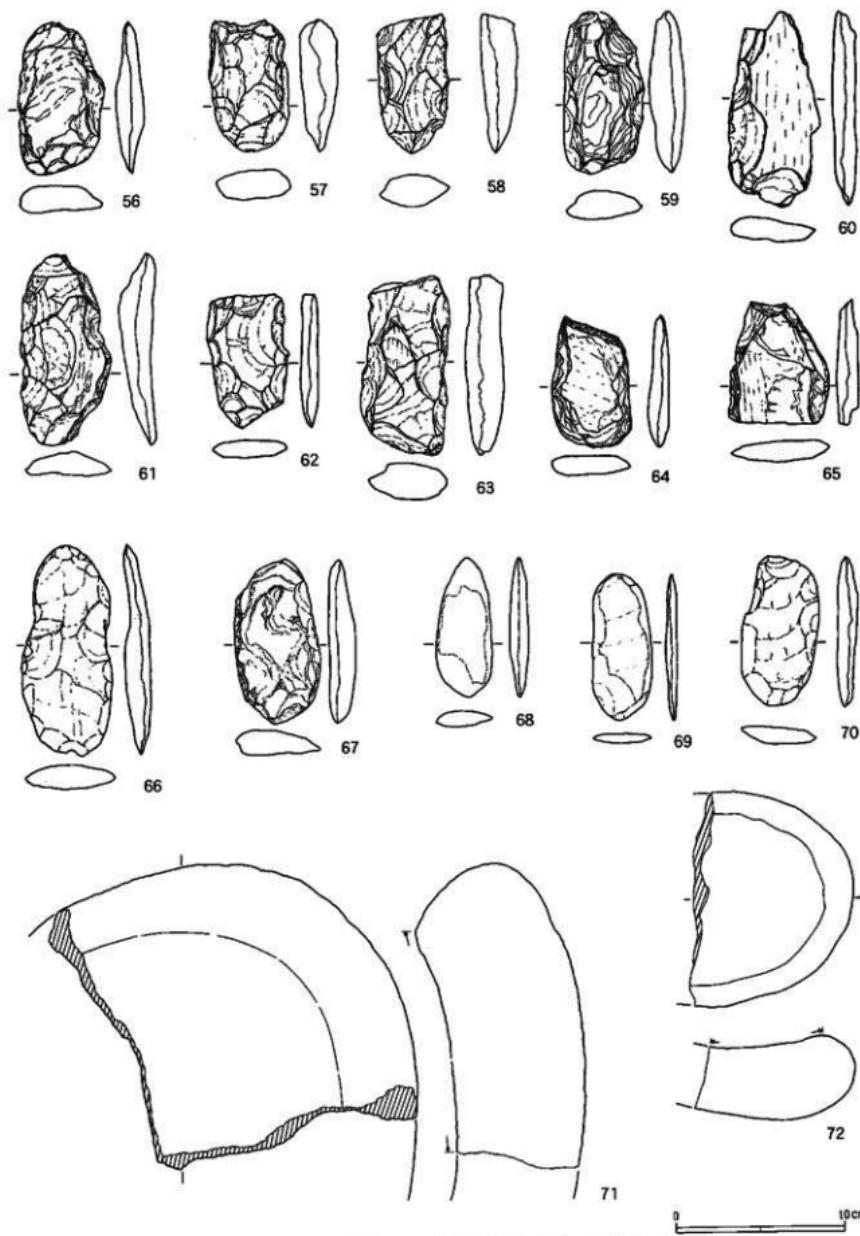
54



55

0 10cm

第92図 遺構外出土遺物（縄文時代・石器4）



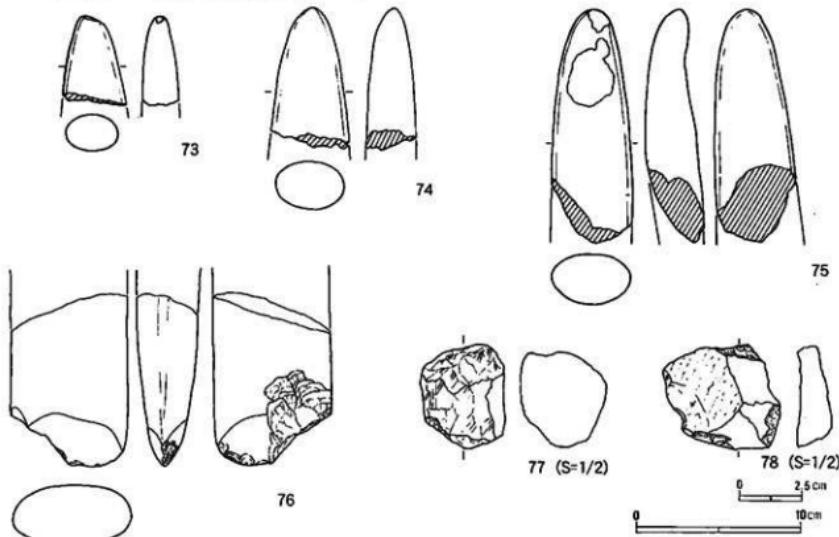
第93図 造構外出土遺物（縄文時代・石器 5）

III. 前期末葉の土器 (第86図-168~188)

前期末葉の土器のうち、4段階区分の3段階までの範疇に含まれるものと一括した。168は平口縁で矢羽根状条線とボタン状貼付文がみられ、諸磯c式の様相を色濃く残すが、口縁端部がやや肥厚しことに3条の結節沈線が施されるのが特徴である。169にも結節沈線文がみられる。170~173は口縁端部をやや肥厚させたもので集合沈線によって矢羽根状文もしくは鋸歯状文が描かれる。174の口縁には横状の突起が付く。175はやや高い隆帯をもつもので地文の繩文は羽状となる。176~180は三角印刻文をもつ一群で、178の胎土は暗赤褐色で2~3mm程度の赤色粒子を含み在地の土器とはやや異なる。179の胎土は灰白褐色でこれも在地のものとは異なる。182には横位の結節浮線文がめぐり波状を描く部分もある。183にも結節浮線文がみられるが、円形刺突文も伴っている。184~188は押圧隆帯をもつ一群である。186の口縁部には縦長の突起が付き、187・188の口縁端部には蛇行する浮線が付く。

IV. 前期末葉から中期初頭の土器 (第86図-168~201・第87図-202~228)

前期最終末（4段階）～五領ヶ台I式にかけての土器を一括した。189・190はともに、口縁の頂部から結節沈線文を垂下させるものである。191~193はソーメン状の浮線文をもつもので地文には繩文が施されている。197は底部に近い破片で、菱形のモチーフが描かれている。198には鋸歯状のモチーフが描かれ、「Y」字状のモチーフも確認できる。199は雲形に区画した中に集合沈線文を充填したものでその空白部は抉られている。200は折り返し口縁で、交互刺突文もみられる。201の口縁部には「の」字状の貼付文が付けられる。口縁端部はごくわずかに内湾しておさまる。202~209には集合沈線文系の口縁部を一括した。202~204・206・207のように口縁端部に刻みがつくものが多い。口縁部は「く」字状に屈折して直立し、206~208にみられるように口唇部がさらに外側へと屈折するものがある。210には鋸歯状文がみられる。214~216は橋状把手をもつもので、216は把手部分である。217~222は同一個体の胴部破片と考えられるが、格子目文と縦位集合沈線文が確認できる。224~226は繩文が施されたものだが、224は結節繩文、225・226は木目状捺糸文となる。227・228は浅鉢で228の口縁部内面には繩文と連続刺突が施される。



第94図 遺構外出土遺物（繩文時代・石器6）

第4表 遺構外出土石器一覧（第88～72回）

No.	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土位置	備考
1	石鏃	黒曜石	1.3	1.4	0.3	0.38	10往	
2	石鏃	黒曜石	1.8	1.9	0.4	0.89	2境	
3	石鏃	黒曜石	1.7	1.6	0.4	0.36	1境	
4	石鏃	黒曜石	1.8	1.6	0.4	0.61	1境	
5	石鏃	黒曜石	1.95	1.1	0.3	0.41	1境	
6	石鏃	黒曜石	2.3	1.8	0.5	1.07	8住	
7	石鏃	黒曜石	2.2	1.8	0.4	0.93	15往	
8	石鏃	黒曜石	1.8	1.2	0.3	0.34	3住	
9	石鏃	黒曜石	2.4	1.9	0.3	0.63	1境	
10	石鏃	チャート	2.6	1.7	0.4	1.21	26往	
11	石鏃	黒曜石	1.8	1.2	0.4	0.57	5住	
12	石鏃	黒曜石	1.9	1.3	0.3	0.39	1境	
13	石鏃	チャート	1.8	1.6	0.4	0.87	1境	
14	石鏃	黒曜石	2.3	1.5	0.4	0.73	18住	有茎様
15	石鏃	黒曜石	3.4	1.9	0.4	1.66	27住	
16	楔形石鏃	黒曜石	1.9	1.1	0.8	1.38	2境	石核を転用
17	楔形石鏃	黒曜石	1.1	1.5	0.7	0.89	1境	
18	棒剣	黒曜石	1.2	1.7	0.8	1.49	1境	
19	棒剣	黒曜石	2.1	1.7	0.8	1.87	1境	
20	快入鍬器	黒曜石	2.2	2.9	1.4	6.25	1境	
21	快入鍬器	黒曜石	2.2	2.9	0.6	4.03	10住	
22	削器	黒曜石	4.2	2.9	1.2	11.91	3境	
23	削器	黒曜石	1.8	3.3	0.7	4.22	17往	
24	—	チャート	2.6	2.5	0.9	6.28	3境	
25	石匙	黒曜石	3.2	1.7	1.1	0.98	7住	欠損した破部を削調整
26	石匙	チャート	2.1	1.4	0.4	5.85	20住	刃部欠損
27	石匙	黒曜石	2.4	3.9	1.1	5.02	8住	刃部欠損
28	石匙	チャート	4.1	1.5	0.7	3.44	13住	鋸形
29	石匙	チャート	2.8	4.8	0.8	7.83	15住	
30	石匙	珪藻石質	3.6	4.8	0.8	8.56	17住	
31	石匙	チャート	4.3	2.9	1.1	15.55	1境	
32	石匙	黒曜石	2.5	1.9	0.6	1.68	19境	
33	石匙	麦わら	4.2	3.1	0.9	7.26	20住	
34	石匙	麦わら	4.7	2.4	0.8	6.59	1境	
35	石匙	麦わら	4.6	1.6	0.7	5.23	4住	
36	石匙	麦わら	4.7	2.7	0.9	7.55	2境	
37	凹石	安山岩	11.5	6.8	4.9	494	2境	磨面・敲打痕あり
38	凹石	砂岩	11.6	6.3	4.6	471	1境	敲打痕あり
39	凹石	安山岩	10.5	6.4	4.1	415	—	敲打痕あり
40	凹石	安山岩	8.8	5.5	4.2	345	13住	磨面・敲打痕あり
41	凹石	安山岩	9.4	8.6	4.3	469	妻探	
42	凹石	安山岩	9.5	7.8	4.9	365	10住	
43	凹石	安山岩	15.9	5.8	5.8	948	3住	敲打痕あり
44	凹石	安山岩	9.6	7.2	4.4	295	1境	磨面・敲打痕あり
45	凹石	安山岩	7.4	7.3	4.9	309	1境	敲打痕あり
46	凹石	安山岩	9.5	7.8	4.6	396	1境	敲打痕あり
47	凹石	安山岩	9.2	6.7	4.2	321	1境	
48	凹石	安山岩	12.8	6.2	4.4	580	1境	磨面・敲打痕あり
49	凹石	安山岩	10.1	8.4	5.8	651	19住	磨面
50	磨石	安山岩	12.5	6.4	4.3	486	13住	敲打痕あり
51	磨石	安山岩	11.1	5.9	4.9	545	17住	敲打痕あり
52	磨石	砂岩	5.3	10.2	4.1	340	1境	
53	?	安山岩	12.9	6.9	2.2	215	1住	
54	磨石	安山岩	8.8	7.2	4.6	449	19住	敲打痕あり
55	磨石	安山岩	14.3	7.7	7.6	624	3住	
56	打製石斧	粘板岩	8.8	5.1	1.6	60.3	妻探	
57	打製石斧	粘板岩	7.7	4.6	2.1	90.6	3境	
58	打製石斧	粘板岩	8.3	4.1	2.1	82.6	G-1	
59	打製石斧	粘板岩	9.5	4.6	2.1	10.4	1境	
60	打製石斧	粘板岩	10.3	5.3	1.3	84.9	G-1	
61	打製石斧	粘板岩	11.2	5.2	2	102	19住	
62	打製石斧	粘板岩	7.8	4.4	1	46.1	1境	
63	打製石斧	粘板岩	10.4	5.1	2.2	150	1境	
64	打製石斧	粘板岩	7.7	4.4	1.2	46.1	23住	
65	打製石斧	粘板岩	7.3	5.7	1.3	66.7	8住	
66	打製石斧	粘板岩	12.3	5.3	1.5	10.9	妻探	
67	打製石斧	粘板岩	9.6	4.9	1.7	78.5	1境	
68	打製石斧	粘板岩	8.1	3.2	1.1	31.4	1境	
69	打製石斧	粘板岩	8.5	4.4	0.6	23.4	2境	
70	打製石斧	粘板岩	8.8	4.4	1.1	47.8	8住	
71	石皿	安山岩	17.8	15.9	7.8	3,400	妻探	
72	石皿	安山岩	8.7	12.5	4.4	724	妻探	
73	磨製石斧	輝緑岩	13.9	4.8	3.2	297	1境	
74	磨製石斧	輝緑岩	8.4	4.7	3.0	159	3境	
75	磨製石斧	輝緑岩	5.2	3.8	2.2	62	1境	
76	磨製石斧	輝緑岩	10.1	7.2	4.6	405	1境	
77	?	石英	3.9	3.4	3.4	652	F-9	火打石?
78	?	石英	4.3	4.1	1.3	26.7	—	火打石?

V. 中期前葉の土器（第87図—229～231）

落沢式が確認されている。229は浅鉢の口縁部で内面には角押文がみられる。230・231にも角押文がみられる。

VI. 異系統土器（第88図—1～52）

器壁が薄く胎土が灰褐色を呈する、明らかに在地の土器とは異なるものを一括した。1～7・48・49は側線を伴う幅狭の連続爪形文が施されるもので北白川下層Ⅱb式である。8～11は幅狭の連続爪形文と梯子状の斜方向の刻みがつけられた浮線をもつもので、北白川下層Ⅱc式に比定される。12は幅狭の爪形文に、屈曲部には「ハ」の字状の刻みがみられるが、これも北白川下層Ⅱc式である。13～35は刻みのある浮線をもつ一群で、北白川下層Ⅱc式である。26にはかすかに連続爪形文もみられる。28はやや厚手で胎土も淡橙褐色を呈し、他のものとはやや異なっている。模倣品であろう。29～35は刻みをもつ浮線が梯子状になるものである。31・32などのように爪形文を伴うものもある。36・37は口唇部に〔Σ〕状工具による連続刺突を施した特殊凸帯をもつ大歳山式である。38～44は対向する刻みをもつごく低い浮線と連続刺突をもつ一群で器壁はやや厚く、胎土は淡橙褐色を呈する。50～52は粗い繩文地に側線を伴わない細かい連続爪形で弧線状のモチーフを描くもので鹿島式である。

2. 石器（第89～94図、第4表）

御防尻遺跡から出土した縄文時代の石器には石鎌、楔形石器、石匙、凹石、磨石、打製石斧、石皿などがある。これら石器については第4表にまとめた。

3. 特殊遺物（第95図）

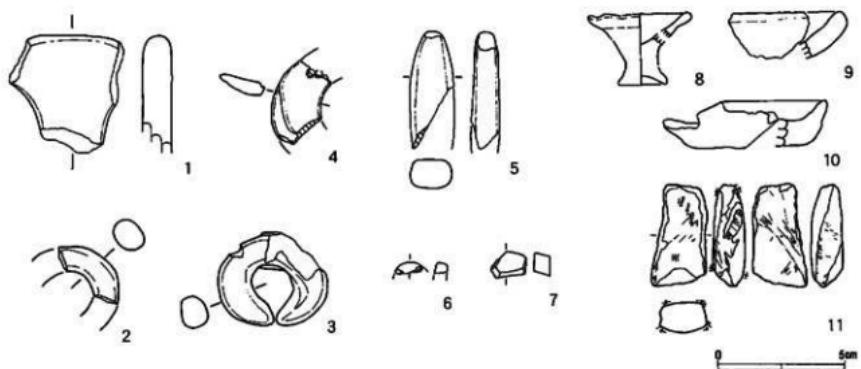
1は土偶であるが、顔の表現などは全くみられない。全体に板状を呈し、両腕と胴部下半を欠損する。板状という形態や顔などの表現を持たないことから前期土偶であると考えられる。2は土製玦状耳飾の一部と思われる。3は環状の土製品であるが環の一部は切れ、その端部は細くおさまる。形状的には玦状耳飾を想起させるが、胎土がきわめて粗く、また端部が細くおさまるという点ではそれとやや異なる感を受ける。同じような形態を持つ土製品は花鳥山遺跡でもみられる。4～7は石製品である。4は滑石製の玦状耳飾、5は蛇紋岩製の定角式磨製石斧、6は滑石製の石製品で端部が成形されよく磨かれている。玦状耳飾であろうか。7は緑白色のチャートであるが、原石から意図的に六角形の石材をとったものである。8～10は弥生～古墳時代のミニチュア土器で8は高杯、9は坪、10には指頭圧痕が多くみられ、左右対称にはならない不定形の器形をもつと考えられる。11は石製の砥石である。

第3節 弥生・古墳時代の遺物（第96図）

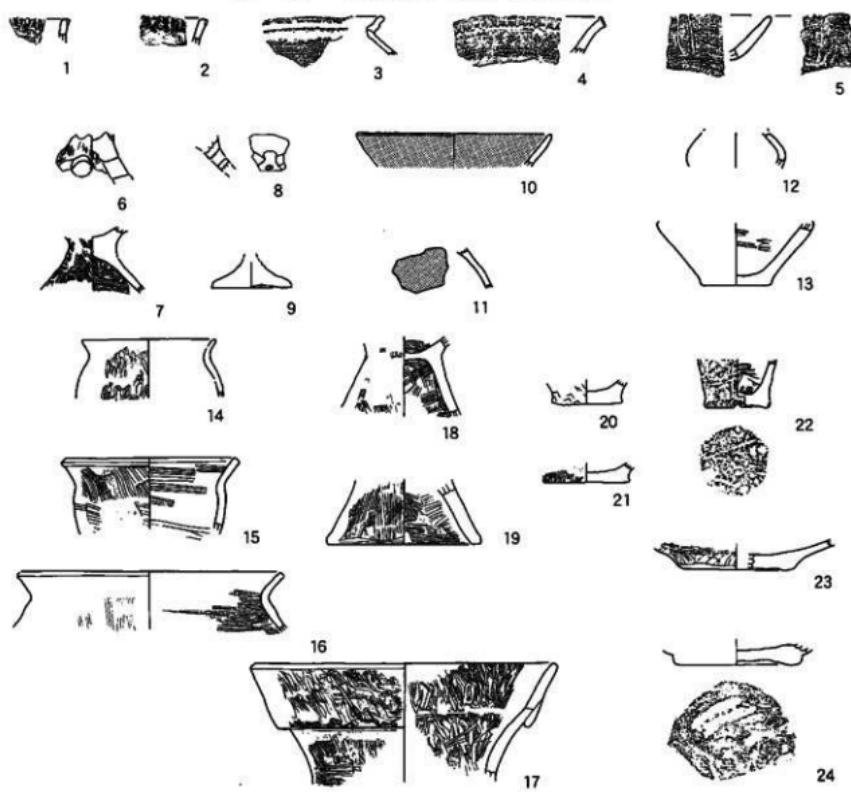
1・2は刻みを持つ壺の口縁である。3はS字状口縁台付壺の破片で口縁直下に横走するハケをもつ。内面屈曲部にはハケをもたない。4・5は壺の口縁部で4の口縁端部には廉状文が全周する。5にはヘラ彫文がみられる。10・11は赤彩された土器である。8・9は高杯の脚部で8の内側には焼成前に付けられた貫通しない孔がみられる。9は小形土器の脚部であろうか。12・13は壺である。14～16は壺、18・19は台付壺の脚部である。22は小形土器の底部で、底面の周囲にはほぼ均等に4箇所に刻みが付けられている。20・21・23・24は底部破片で24の底面には粘土を搔き取った痕跡が残る。17は複合口縁壺の口縁で内外面ともにハケ調整をおこなった後、主としてタテ方向のミガキが施される。

第4節 奈良・平安時代、中世の遺物（第96図）

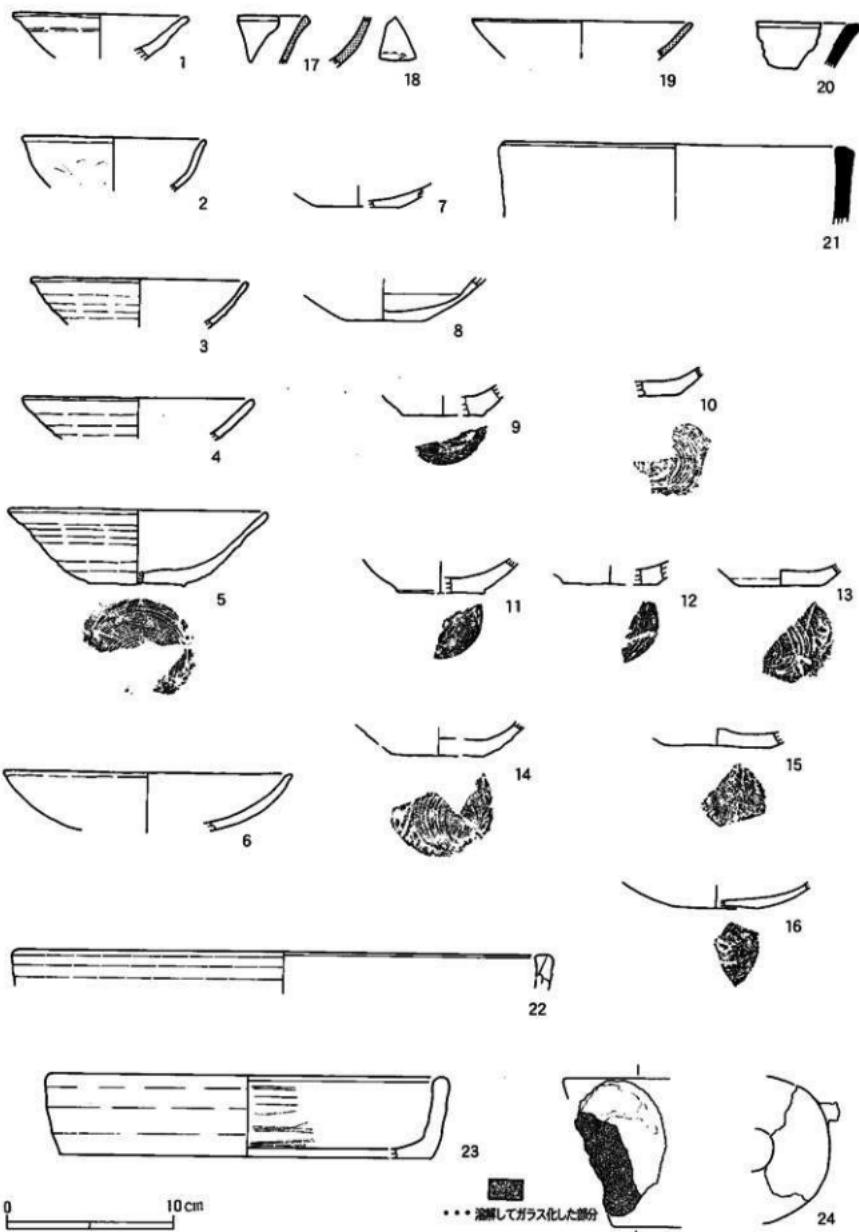
1～16は壺である。5・9～16の底部には回転糸切痕がみられる。17～19は灰釉陶器、20・21は須恵器である。22は内耳土器の口縁部と考えられる。23は皿状を呈する土師器破片である。24はフイゴの羽口である。端部には溶解してガラス化した物質が付着している。



第95図 遺構外出土遺物（特殊遺物）



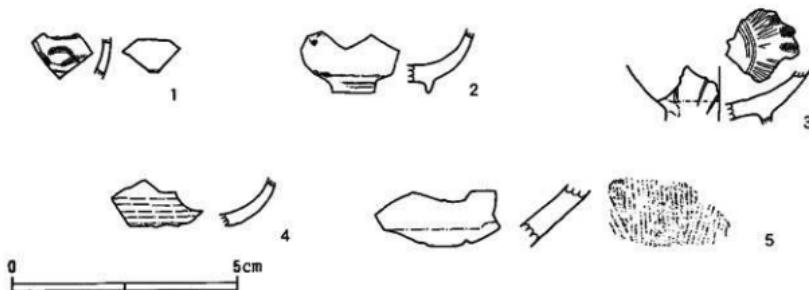
第96図 遺構外出土遺物（弥生・古墳時代）



第97図 遺構外出土遺物（奈良・平安時代・中世）

第5節 陶磁器類（第97図）

すべて近世の所産である。1・2は磁器で、ともに自然具須による手描きの染付けがみられるが細片の為モチフは不明である。1の内面見込みには圓線がみられる。2は肥前系の磁器であると思われる。3～5は陶器で、3は瀬戸美濃産の菊皿である。内外面ともに型押しがみられることから、18世紀中頃に位置付けられよう。胎土は白色を呈し、地には黄瀬戸釉が掛けられその上に銅綠釉を掛け流している。4は瀬戸美濃産の碗で内外面には灰釉が掛けられる。5は瀬戸美濃産の擂鉢で内外面には鐵釉がみられる。スリ目は1単位15本程度で全面につけられている。



第98図 遺構外出土遺物（陶磁器類）

第6章 総括

諫訪尻遺跡からは旧石器時代から近世までの遺物が見られるが、遺構の主体となるのは縄文時代前期後半と弥生時代末～古墳時代前期までの時期である。以下時期ごとに概観していくことにする。

第1節 旧石器時代

この時期の遺物としては、包含層中から砂川期のポイントに類似するもの、ナイフ形石器2点があるが、その他図示しなかったが旧石器時代のものと考えられる黒曜石の石核なども見つかっている。諫訪尻遺跡のある藤垈地区からは表掲によってあるが、旧石器時代の石核や石器などが発見されていることなどからも、この一帯が旧石器時代においても生活の場として選ばれていた土地であったことがわかる。諫訪尻遺跡にほど近い曾根丘陵上からは主体的でないにせよ、これまで旧石器時代の石器が見つかっていることから今後、この一帯で旧石器時代の生活の痕跡が確認される可能性は大きいと言えよう。

第2節 縄文時代

遺物としては早期押形文土器・前期前半の織維土器・前期後半の諸磕a式～中期前半の五領ヶ台式土器などが出土しているが、遺構が見られるのは前期後半に限られている。その内容は諸磕a式新段階期～b式古段階期の住居跡1軒、同じく土坑1基、諸磕b式古段階の集石土坑1基、諸磕b式新段階期の住居跡2軒、諸磕c式期の土坑1基、その他、詳細時期不明だが縄文時代の土坑と考えられるものが4基確認されている。遺物・遺構ともに見た場合、最も充実しているのは諸磕b式期であるが、山梨県内ではまだ発見例の少ない諸磕a式新段階期～諸磕b式古段階期の遺構もわずかながら発見されていることから該期における今後の研究にとっても貴重な資料を提供できた。また、諸磕b式新段階期の住居跡からは沈線文系土器を炉体土器として使っているものが見られた。山梨県内においては前期後半の住居跡は北巨摩郡大泉村天神遺跡、北巨摩郡大泉村甲ツ原遺跡、東八代郡八代町花鳥山遺跡、東八代郡一宮町駅迎堂遺跡などで見つかっているが、いずれの遺跡の住居跡も炉に関して言えばすべて地床炉で埋甕炉をもつ住居跡はこれまでの調査では見つかっていない。また、近県においても該期の埋甕炉はほとんど見られない状況である。この他土坑に目を移すと、諸磕b式古段階の土器を伴った集石土坑も発見されている。この土坑には石匙が伴っていることから墓である可能性も指摘できよう。また、多量の焼土・石を伴った土坑も複数確認されている。一方、遺物についてみると、土偶・土製円盤・口状耳飾・定角式磨製石斧・滑石製口状耳飾・滑石製玉の未製品などの特殊遺物も多く発見された。このうち土偶については板状で頭・顔などの表現は全く見られないことから前期土偶であると考えられる。前期土偶は全国的に見てもその出土例は中期に比べると大幅に少なく、またその形についてもそれぞれ、装飾の少ない「板状」と加装された「立像」というように全く異なる形態をもつ。これについては前期と中期とでは土偶の用途が違っていたためだと土偶祭祀のあり方が異なっていたためだと書かれている。土偶の出土する地域についても中期では出土が集中する核地域を持たないのに対して、前期では東北地方と関東地方という大きく分けて二つの地域に集中する傾向が見られる。山梨県もこの前期土偶の分布地域に入っているが県内での出土例も20点未満と少なく、これは周辺地域の様相と同じ状況である。本遺跡出土の土偶を形態的に見れば上述の通り装飾がみられないタイプで、これは諸磕b式期にみられる駅迎堂遺跡出土の土偶に類似し、黒浜式期の土偶形態を引き継いだものであると解釈できるのではないだろうか。この他、本遺跡からは多くの異系統土器片が出土している。前期後半では関西系の北白川下層IIb式・北白川下層IIc式、前期末葉では北陸系の鍋屋町式、また鍋屋町式と諸磕c式の折衷タイプなども確認されている。中期に至っては五領ヶ台I式に並行する鷹島式が出土しており、県内では初見である。鷹島式については胎土・施文などの観察から搬入品と考えてよさそうである。前期後半において広域的な「モノ」の移動が頻繁であったことは從来言われてきたことであるが、山梨県内でも近年異系統土器が取り上げられるようになり、様々な地域間での交流が活発であったことがわかってきてている。ただし、異系統土器に関して言えば文様モチーフなどで見た場合、完全な外来土器と言えるものは、ごくわずかで在地土器との折衷と考えられるようなものがその多くを占める。例えば、山梨県において一般に関西系と呼ばれる土器は、本場関西地方では諸磕系などと呼ばれていることがよくある。そんなことから今回、在地土器と外来系土器の胎土分析を行なった（附編一）

1参照)。その結果、胎土・色調・文様モチーフなどから関西系・東海系などと呼ばれる一群の土器は在地土器の胎土とは異なることが明らかとなっている。自然科学的な分析の結果、肉眼観察で外来系と認識したものの一部は古墳時代前期において濃尾平野でみられるS字状口縁台付壺の胎土と同じであることが指摘され、その候補地のひとつとして三重県津市が挙げられている。以上述べてきたように、本遺跡からは諸磯b式期を主体とする生活の痕跡が確認された訳であるが、中期の遺物・遺構については土器片がわずかにみられたのみで、その生活の痕跡を確認することはできない。しかしながら出土した土器を概観してみると、その時期については前期終末～中期初頭の五領ヶ台I式という限られた時期を主体としており、この付近に該期の遺構が眠っている可能性も大いにある。それ以降についてはわずかに落沢式がみられるのみで細かな土器片さえも全く確認されなかった。前期と中期とでは遺跡の立地傾向に大きな違いがあることは從来言られてきたことであるが、本遺跡においても同様の結論を引き出すことができた。いずれにしても、この境川地域においては前期後半の遺跡が集中して見られる土地であり、これらの遺跡を残した人々は中期に至って、近くは曾根丘陵の台地上にその生活の場を移していったのであろう。

第3節 弥生・古墳時代

この時期の遺構としては低墳丘古墳2基、方形周溝墓1基、住居跡25軒が確認されている。直径30m程度の第1号墳は出土土器などから5世紀中頃～後半代と考えられる。この周溝内からは鉄製の太刀が出土しているが、墳丘は後世の攪乱により大きく削平されており主体部などは確認できなかった。第1号墳の北側に位置する第2号墳は直径20mと推定され、出土土器などから5世紀後半代に位置付けられるが切り合い関係からすると第1号墳よりも新しい。方形周溝墓については出土土器をみると小形のS字状口縁台付壺や壺・壺形土器などがあり、時期的には4世紀後半～5世紀初頭という方形周溝墓としては新しい段階に位置付けられる。また、この周溝に供獻された土器の出土状況からは、ひとつの土器を意図的に壊してブリッジを挟んだ別辺溝に置くという、この墓に掛けられた儀式のあり方を示すような事例を確認する事ができた。この供獻方法は溝の底面から出土した土器についても、さらに溝の底面から浮いた状態で出土した土器についてもみられたことから、一時期だけに行なわれた方法ではない事が指摘できる。また、ここに発見された土器の大半が東海系で、特に壺については伊勢湾岸周辺の影響を強く受けたものであることも特異に映る。ではこれらの古墳、方形周溝墓はどんな時代的背景の中で造られたものなのであろうか。弥生時代以降の諫訪尻遺跡をとりまく周辺地域の動向としては、県内各地にある程度のまとまりをもつ集団がみられるようになるが、特に中道町を中心とする曾根丘陵の台地上と台地下に集中して遺跡の存在が確認できるようになり、県内屈指の地域的なまとまりをもつ集団へと変貌していく様子が窺える。中道町上の平遺跡にみられる125基に及ぶ方形周溝墓の大墳墓群は、弥生時代後半から古墳時代始めにかけてこの状況を如実に表すものと考えられている。そしてこの状況は古墳時代前期まで続き、中道町米倉山に小平沢古墳（前方後円墳・全長45m）、同東山に大丸山古墳（前方後円墳・全長90～120m）、銚子塚古墳（前方後円墳・全長169m）、これらの間の同町金沢地区に天神山古墳（前方後円墳・全長135m）、再び東山に丸山塚古墳（円墳・直径70m）といった県内最古で最大級の古墳が集中して4世紀～5世紀前半にかけて造られ、政治的にも経済的にも県内の中枢地を形成していくのである。その勢力範囲は古墳などの状況から東は中道町北部及び境川村西部、西は三珠町、北は笛吹川を越えた甲府市南部あたりまでの広範な地域が考えられている。本遺跡は位置的にはこの勢力圏の東側の縁辺部に位置するが、中道町地域の直接的な影響下にあった地域と考えられるのである。このためか、本地域に古墳が見られるようになるのは5世紀中頃からのことである。本遺跡からは諫訪尻1号・2号墳が確認されたが、本遺跡の西側の丘陵には旭1号墳、天神山古墳といった5世紀後半代の古墳が、また東隣の支丘上には馬乗山1・2号墳、丘陵下に表門神社古墳、お文殊さん古墳といった5世紀中頃以降の古墳が連綿と造営されている。このように境川村一帯は特に5世紀後半前に活発に古墳の造られた地域で、次の6世紀代の後期古墳時代に至っても造墓が盛んに行なわれた地域である。この5世紀後半代前後の周辺地域への古墳の波及は、全国的様相を反映するもので地域豪族の台頭と畿内勢力の中央集権国家への政策があいまった結果と考えられるのである。すなわち部民制の導入による変革の時期と考えられるのであり、今回本遺跡で確認された古墳などはこの状況を反映しているものと考えられるのである。このように境川村地域には、曾根

丘陵において台頭した勢力が弱小化した段階から多くの古墳が造営されるようになるが、そのような背景を考えるとその母体集落の存在は容易に想定できる。本遺跡からは墳墓とともにまとまった数の住居跡も見つかっているが、これらの住居跡は時期的には弥生時代最終末～古墳時代初頭に位置付けられ、ここに暮らした人々は当時、中道勢力を構成していた一集団であったことが想定できる。ではこれら個々の住居跡に目を移してみよう。住居の平面形プランとしては大きく橿円形と隅丸方形とに分けられる。これを切り合い関係や出土土器などから見ると從来言われているように前者が弥生時代末、後者が古墳時代初頭におおよそ当てはめられる。平面プランの大きさは第7号住居跡の $11.9 (+\alpha) \times 9.8m$ を最大とし、最小は第21号住居跡の $3.5 \times 3.0m$ である。住居の向きについては梯子受けや炉跡などの各施設から判断するとほぼ南北向に造られていたと言えるが、これには地面の傾斜などの地形的な制約も影響していたのであろう。住居内の施設としてはベッド状造構、土手をもつpit、入り口部近くの貯蔵穴、主柱穴間に結ぶ間仕切溝などが挙げられる。炉については枕石を持つもの・持たないもの、燃焼面に粘土を敷くものなど何パターンかがみられる。炉の設置場所については入り口部に対して住居の中心よりもやや奥に造られていたようである。住居内施設はその設置場所にある程度の傾向が認められ、例えば土手を持つpitに注目してみると本遺跡の場合、このような施設は住居の南東隅に造られていることが多い。このように4本柱の主柱穴と設置場所の決まった各施設という規格性のある住居形態は淘汰された居住空間の創出を感じさせる。このような土手を持つpitは、弥生時代末～古墳時代初頭において曾根丘陵一帯の住居跡に割合よくみられる施設である。隣接する静岡県などでは該期において、玉砂利を詰めた浅い皿状pitが一定の割合で見られるが、本遺跡はもとより山梨県内においては知られていない。その一方で曾根丘陵一帯でみられるような土手を持つpitは近隣の神奈川県・静岡県においては見られないである。このようなことから、住居内施設には地城性が存在する可能性も指摘できよう。また、住居の骨格となる柱材についても科学分析によって以下のような興味深い資料を得ることができた。第13号住居跡から出土した炭化材の分析から、クリ・カツラ・クヌギ節という少なくとも3種類の材が使われていたことが明らかとなった。山梨県内では堂の前遺跡（弥生時代末・韮崎市）、酒呑場遺跡（古墳時代初頭・長坂町）でクヌギ節やコナラ節が使われていたという分析結果がでており、村前東遺跡（古墳時代初頭・櫛形町）ではクリ材が使われていたようであることから、住居構築用材の選択についても地域的な差があった可能性がある。地域によって用材構成が異なる例は関東地方でも認められており、遺跡周辺の植生の違いを反映されることが知られている（高橋・植木 1994）。群馬県渋川市中筋遺跡などでは竪穴住居と平地式建物とで選択された木材が異なり、建物の構造や使用目的によっても木材を選択していたことが指摘されている（高橋 1988；橋本ほか 1995,1996）。本遺跡における今回の分析結果は、ひとつの住居でも使う部材によって樹種を選択していたことを示唆している（附編-3参照）。

境川村地域において多くの古墳が造られるのは、ここで集落が營まれた時期以降のことである。もちろん本遺跡の古墳を造営した母体集団についても居住地域はほかに求められなければならないが、今の段階では資料的な制約が多くそこにまで踏み込むことは容易ではない。この地域一帯におけるこれから調査とそれら資料の蓄積によって、今後、該期の社会背景が構造的に明らかにされていくことであろう。

附編 自然科学分析

1 繩文土器（前期後半）の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

諫訪尻遺跡から多数出土している縄文土器の中には、土器の色調やモチーフなどから、在地系の土器と考えられるものに混じって外来系（特に関西系）と判断される土器が、発掘調査担当者により確認されている。

本報告書では、これらの土器について胎土の特徴を把握し、またその地質学的な特徴から推定される地域を考え、それぞれ在地系、外来系とされるいる所見と比較することにより、土器の製作や収入について考察する。

(1) 試料

試料は、諫訪尻遺跡から出土した縄文時代前期後半の土器12点である。ここでは便宜状試料番号1～12までを付ける。

試料番号は1～7は在地系とされた土器である。発掘調査担当者の所見では、在地系とされた土器は、胎土の肉眼観察により、花崗岩に由来する白色砂粒を含む花崗岩系、角閃石を多く含む火山岩系、赤色粒子が入っているもの、砂粒が細粒なため、詳細な特徴の不明なもの4種類に分類されている。今回の試料では、試料番号1～4の4点が花崗岩系である。発掘調査所見によれば、花崗岩系の土器は、諫訪尻遺跡における出土の縄文土器の多数を占めており、山梨県域における縄文時代前期後半の在地の土器として確認されている。試料番号1～4のうち、試料番号1～3は深鉢であり、それぞれ爪形文、沈線文、浮線文の文様が認められている。試料番号4は浅鉢である。試料番号5～7は、それぞれ上記の火山岩系、赤色粒子の入っているもの、微細な砂粒を含むものに分類されている。

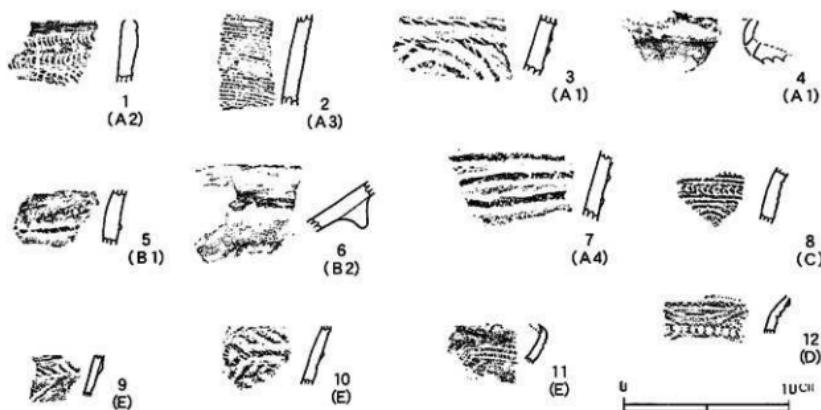
試料番号8は、連続の刺突文と爪形文の認められる試料である。同様の特徴を持った土器は、山梨県内で認められる例は少ないとしている。また発掘調査担当者の肉眼観察による胎土の特徴も上記の在地系のものとは若干異なるとされている。

試料番号9～12は外来系とされた試料である。これらは、それぞれ北白川系、模倣北白川系、諸磯系、折衷タイプという発掘調査担当者による所見が付けられている。

以上述べた各資料の一覧表を分析結果を呈示した図1に示す。

(2) 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法がある。前者は薄片作製や粉碎による重金属性分析を用いられており、後者では蛍光X科学組成を求める方法がある。本分析では、これらのうち重金属性分析を用いるが、この方法は縄文土器のいわゆる比較的粗粒の砂粒を含む胎土の土器の分析において胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点があ



胎土分析用土器サンプル

る。今回のように甲府盆地と盆地外の地域産との区別という場合には、地質の違いがよく反映される重鉱物分析が適している。以下その処理過程を述べる。

試料は、適量をアルミナ製乳鉢で粉碎、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4 - 1/8の粒子をポリタンクスチレン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉱物のブレバートを作製した後、偏光顕微鏡下にて同定した。

鉱物の同定粒数は、250個を目標とした。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」した。

(3) 結果

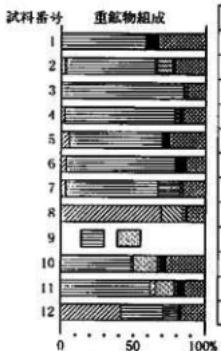
12点の試料のうち試料番号8と12を除く10点までが角閃石の非常に多い組成であり、他2点はそれぞれ斜方輝石の多く組成である。さらに角閃石の多い組成も詳細に見れば少量伴う鉱物の種類が緑レンズ石や不透明鉱物など複数種が認められる。これらの特徴から、今回認められた胎土をA~E類まで分類した。なお、各試料の分析結果は、表1、図1に示す。

1) A類

重鉱物組成にはほとんどを角閃石が占める。顕微鏡下で角閃石の結晶が風化を受けていることが認められ、この下記

表1 重鉱物分析結果

試 料 番 号	力 ク ラ ン 石	斜 方 輝 石	單 斜 輝 石	角 閃 石	酸 化 角 閃 石	角 閃 石 族	ジ ル コ ン	ザ ク ロ 石	緑 レ ン 石	電 器 石	紅 柱 石	不 透 明 鉱 物	そ の 他	合 計
1	0	1	0	145	0	0	0	0	0	0	0	23	81	250
2	0	6	3	153	4	0	0	0	26	0	0	5	53	250
3	0	1	0	211	3	0	0	0	4	1	0	0	30	250
4	1	6	1	190	3	0	0	0	4	1	0	9	35	250
5	0	14	0	160	1	0	0	0	0	2	0	13	60	250
6	0	9	0	188	2	0	0	0	0	0	0	20	31	250
7	0	8	0	159	39	0	0	0	4	1	0	1	38	250
8	0	173	37	6	0	0	0	0	1	0	0	3	30	250
9	0	1	0	33	0	0	0	34	2	2	1	9	16	98
10	2	2	0	122	0	0	3	42	4	0	2	11	62	250
11	1	0	0	104	0	6	1	22	3	1	1	9	20	168
12	0	104	0	73	27	0	1	1	1	0	0	4	39	250



試料番号	重鉱物組成	胎土 (分析)	胎土 (発掘調査所見)	器形	文様	備考
1		A2	在地系 花崗岩系	深鉢	爪形文	
2		A3	在地系 花崗岩系	深鉢	沈線文	
3		A1	在地系 花崗岩系	深鉢	浮線文	
4		A1	在地系 花崗岩系	深鉢		
5		B1	在地系 火山岩系			
6		B2	在地系 赤色粒子混			
7		A4	在地系 微細な砂粒混			
8		C	外来系?		刺突文・爪形文	
9		E	外来系 北白川系			
10		E	外来系 北白川系(模倣)			競草・愛知
11		E	外来系 諸職系			
12		D	外来系 折衷タイプ			下層、IIb.IIc

凡例

- 斜方輝石
- 角閃石族
- 電氣石
- ▨ 單斜輝石
- ジルコン
- 不透明鉱物
- ▨ 角閃石
- ザクロ石
- その他
- ▨ 酸化角閃石
- 緑レンズ石

のB類とは区別した。また、角閃石以外に少量伴う鉱物の種類によってA1～A4に細分される。以下に細分類ごとにその特徴とそれに分類される試料を述べる。

A1類：角閃石以下の鉱物は微量しか含まれない。在地系花崗岩系の試料番号3と4がこれに分類される。

A2類：少量の不透明鉱物を伴う。在地系花崗岩系の試料番号1がこれに分類される。

A3類：少量の緑レン石を伴う。在地系花崗岩系の試料番号2がこれに分類される。

A4類：少量の酸化角閃石を伴う。在地系詳細不明の試料番号7がこれに分類される。

2) B類

重鉱物組成のほとんどを角閃石が占めることは、上記のA類と同様であるが、角閃石の結晶が比較的新鮮であることが顕微鏡下で認められたので、A類とは区別した。B類はさらに角閃石の色によって、緑褐色のB1類と褐色のB2類とに細分される。B1類は在地系火山岩系の試料番号5の胎土であり、B2類は在地系赤色粒子を含む試料番号6の胎土である。

3) C類

斜方輝石が多く、少量の单斜輝石と微量の角閃石を伴う組成である。どの鉱物の結晶も比較的新鮮である。在地系あるいは山梨県内ではあまりみられない、連続刺突文と爪形文のある試料番号8がこれに相当する。

4) D類

斜方輝石と角閃石がほぼ同量程度に多く、少量の酸化角閃石を伴う組成である。单斜輝石はほとんど含まれない。鉱物の結晶は比較的新鮮である。外来系折衷タイプとされた試料番号12がこれに分類される。

5) E類

角閃石が非常に多く、これに少量～中量のザクロ石を伴う組成である。角閃石はA類と同様に風化を受けているが、後述するようにその背景となる地質の違いを考慮してA類とは区別した。

外来系北白川系、同模倣北白川系、同諸磯系の試料番号9～11がこれに分類される。なお、試料番号9は同定粒数100粒に満たなかったことからグラフにはしなかったが、表に認められる鉱物の傾向からE類に分類した。

(4)考察

前項の結果記載からわかるように、発掘調査所見による分類と今回の分析による胎土の分類とは非常によく一致する。したがって、譚訪尻遺跡における縄文時代前期後半の土器胎土の分類については、肉眼観察により基本的には充分であるといえる。分類の次の作業は、分類されたそれぞれの胎土が示唆する地域性を考えることがある。ここでいう地域性とは、胎土から推定される地質の分布域であり、それは土器の製作地を含んでいる可能性が高い。今回認識されたA～E類までの胎土からは以下のような地域性が考えられる。

A類は、やや風化した角閃石を多量に含むことと胎土の肉眼観察で花崗岩類の岩片や黒雲母の細片が認められるなどから、花崗岩類（花崗閃綠岩や石英閃綠岩なども含む）の分布域に由来する。結果で述べたようにA類の胎土と発掘調査所見による在地系の分類とは一致することから、A類は譚訪尻遺跡周辺の地質を反映していると考えてよい。譚訪尻遺跡の所在する曾根丘陵には甲府深成岩体の一部である芦川型石英閃綠岩が広く分布する（日本の地質中部地方。編集委員会、1988）。譚訪尻遺跡近傍を流れる境川をはじめとする曾根丘陵を流れる笛吹川支流の諸河川周辺の堆積物中には、この岩体に由来する角閃石が多く含まれていると考えられる。実際に、河西（1989）により境川から塩山付近の重川にまで至る笛吹川支流の諸河川の砂に多量の角閃石が含まれていることが確かめられている。（ただし、河西の分析では重鉱物組成中に多量の黒雲母も含まれているが、今回の重鉱物分析法では、その処理過程における粉砕と重液分離により、黒雲母は計数されない。）以上のことから、A類は「在地」の曾根丘陵地域を示す胎土であるとすると矛盾はない。なお、A1～A4類までの違いは、支流地域の違いを示唆している可能性がある。例えば、上記河西の分析では、境川では緑レン石が多産し、金川では不透明鉱物が含まれることが特徴であるとも述べられている。現時点では、今回のA3類やA2類が、それぞれ境川や金川付近の地域性を示すとまでは言えないが、今後の分類例の蓄積により、その識別が可能になるかも知れない。

B類の特徴である比較的新鮮な角閃石は、第四紀に噴出した角閃石を多く含むデイサイト質の火山碎屑物に多く含まれている。甲府盆地を取り巻く地質を上記の日本の地質中部地方。なでは概観するとこれに相当するような地質は、主なものは盆地北部に分布する黒富士火砕流のほかには見あたらない。一方、上記河西の分析でもデイサイトや安山岩および変質火山岩類などのいずれかの火山岩類を含みかつ角閃石が優勢な重鉱物組成の河川砂は、黒富士火砕流分布域下流の荒川からその本流の荒川上流部付近の地域が考えられる。B類の試料も発掘調査所見では在地系に分類されるが、上述のB類の地域性は、甲府盆地内という意味では在地系といえるが、曾根丘陵地域を示すA類在地系とはやや範囲がずれているといえる。なお、B1類とB2類の違いについては、上記地域内でのより詳細な地域の差であるのかどうか現時点では不明である。

C類の由来する地質としては、その重鉱物組成から、古くとも第四紀に噴出した斜方輝石の優勢な安山岩質の火山噴出物を考えることができる。上述のB類での考察と同様に甲府盆地周辺の地質を見た場合、第四紀の安山岩質火山噴出物という点では盆地北西端部に八ヶ岳の噴出物の分布が認められる。しかし、河西ほか（1989）の分析例では、八ヶ岳南麓の河川砂の重鉱物組成は、いずれも単斜輝石が優勢な組成であり、C類の組成とは一致しない。したがって、C類の由来する地質は甲府盆地周辺以外にある可能性が高い。発掘調査所見では、C類に分類された試料番号8と同様の特徴を持つ土器は、長野県などで稀に見られることがある。そこで、長野方面で上記C類の由来する地質をみると、近いところでは浅間火山の噴出物が周辺に分布する佐久盆地北部から上田盆地にかけての地域が認められる。もちろんこれだけでC類の由来する地域を特定することはできないが、少なくとも甲府盆地外の地域である可能性は非常に高い。

D類の由来する地域としては、単斜輝石を含まない輝角閃石ディサイトが考えられるが、このような地質は、少なくとも甲府盆地周辺では認められない。上記の河西（1989）や河西ほか（1989）の分析例でも、甲府盆地周辺のディサイト質の地質はほとんどが単斜輝石優勢である。発掘調査所見でもD類の胎土の試料番号12は外来系とされており、分析による所見とは一致する。しかし、現時点ではD類の地域性について具体的に考えることはできない。今後、試料番号12と同様な土器の出土分布地域などの試料が増えれば、D類の地域性についての手がかりが得られると考えられる。

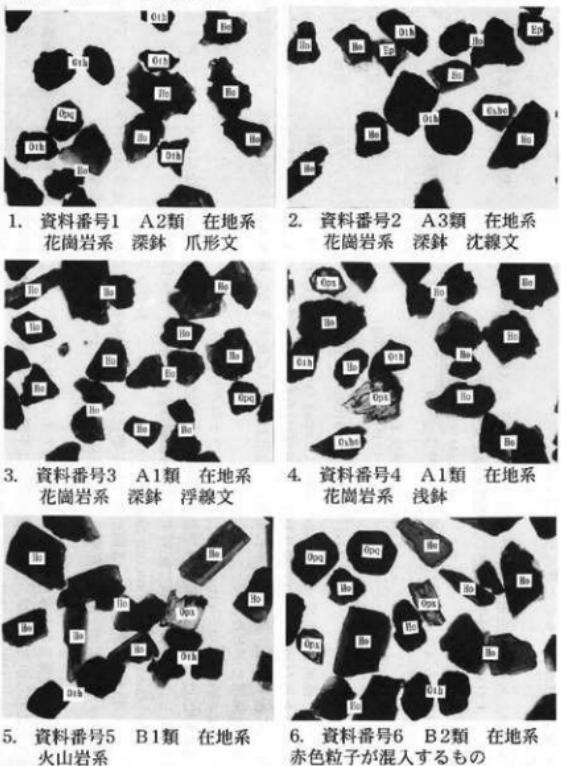
E類の組成は、当社による胎土分析例において愛知県西部の尾張地域から出土した古墳時代前期のS字状口縁付壺の胎土の重鉱物組成と同様である。（矢作ほか、1997）。この胎土分析例では、その由来とする地域として、濃尾平野から伊勢平野に至る諸河川の河川砂の重鉱物組成との比較から、津市南方の雲出川地域を推定した。また、同様に当社による愛知県東部地域の東栄町や豊根町などにおける繩文土器や弥生土器の胎土分析でも、E類と同様の組成を認めている。雲出川の流域と愛知県東部地域に共通するのは、ともに領家帯と呼ばれる地質の分布域であることがある。領家帯は、花崗岩類と主に片麻岩からなる変成岩類により構成されている。その分布は、帶状に西日本を縦断しており、東端は長野県の諏訪湖付近にあり、そこから伊那盆地沿いに南下して愛知県東部の三河地方を通って伊勢湾をわたり上述の紀伊半島北部を横断し、さらに四国を縦断して九州に至る。ここで、E類の由来する地域は、重鉱物組成のみから考えれば領家帯の分布域とその周辺ならば、どこでもその可能性はあるといえる。今回の試料は、発掘調査所見では近畿地方か東海地方との関係が考えられるのが、今後地域を特定するためには、近畿地方・東海地方と甲府盆地との間の地域（東三河地域や伊那盆地）での土器の分布とその分析例を蓄積することが必要であると考えられる。

以上A類からE類までの胎土の地域性を述べたが、甲府盆地といいわば地質の限界できる地域においては、盆地内と盆地外という区別は比較的明瞭にできる。今回の分析でも発掘調査所見で外来系とされた試料は、いずれもほぼ確実に甲府盆地から持ち込まれたものであるといえる。具体的な製作地域の特定など課題は多いが、今後も甲府盆地における繩文土器の研究において胎土分析が提供できる資料の効果は高いと考えられる。

引用文献

- 河西学（1989）甲府盆地における河川堆積物の岩石鉱物組成・土器胎土分析のための基礎データー.山梨考古学論集II, p505-523
河西学・柳引巧一・大村昭三（1989）八ヶ岳南麓地域とその周辺地域の縄文時代中期末葉土器群の胎土分析.帝京大学山梨文化財研究所研究報告第1集, p1-64
日本の地質「中部地方」編集委員会（1989）日本の地質4 中部地方 I.330p, 共立出版.
矢作健二・服部俊之・赤塚二郎（1997）東海地域におけるS字状口縁付壺の産地について・胎土分析による予察.日本文化財化学会第14回大会研究発表要旨集, p126-127

図版1 胎土中の重鉱物 (1)



Opx: 斜方輝石. Ho: 角閃石. Oxo: 酸化角閃石. Opq: 不透明鉱物. Oth: その他

図版2 胎土中の重鉱物 (2)



Opx: 斜方輝石. Cpx: 単斜輝石. Ho: 角閃石. Oxo: 酸化角閃石. Am: 角閃石族.
G: ザクロ石. Opq: 不透明鉱物. Oth: その他

2 住居跡の放射性炭素年代

(1) 試料

調査は、13号住居跡の床面に見られた炭化材1点および24号住居跡の炭化材1点の合計2点である。13号住居跡の構築年代は、2号墳の周溝に切られていることから、弥生時代末～古墳時代前半と推定されている。また、24号住居跡は1号墳の上位に構築されている。

(2) 分析方法

測定に際しては、学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。なお、放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用した。

(3) 考察

13号住居跡床面の炭化材は1880年前、24号住居跡の炭化材は2080年前を示した。各住居の年代観については上記した通り、弥生時代末～古墳時代と考えられている。今回の測定値は、これら遺構。

遺物から推定される年代観よりも古い年代値となっている。木材の場合、年輪の外側と内側で放射性炭素年代値に違いがある。今回測定した炭化材試料が、大木に由来するもので、その年輪の中心に近い部分を測定したとすれば、今回のような測定値となる可能性もある。また、住居構築材として、古材を利用している可能性もある。いずれにしても、今回の結果については発掘調査時の所見と合わせて再検討したいと考える。

3 13号住居跡出土炭化材の樹種同定

(1) 試料

調査対象は、炭化材5点である。13号住居跡および24号住居跡床面から出土した炭化材5点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表2に記した。

13号住居跡は長軸約7mの楕円形を呈し、調査区内では比較的大型である。内部からは土器が出土しなかったものの、床面には炭化材や焼土が見られ、柱材と考えられる炭化材が床面南側に集中して検出された。この状態から、13号住居跡は廃棄の際に火を受け、炭化材が片づけられた可能性が指摘されている。

24号住居跡は長軸6.55m、短軸5.95mではほぼ方形を呈する。炭化材は、住居南側の柱穴付近から出土しており、柱材の一部が炭化・残存したものと考えられている。

(2) 分析方法

木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

表2 13号・24号住居跡の炭化材同定結果			
遺構名	時代・時期	試料番号	樹種
13号住居跡	弥生末～古墳前半 (3世紀～5世紀初頭)	5	クリ
		13	カツラ
		22-1	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		23	クリ
24号住居跡	古墳時代前半(5世紀前半)		コナラ属コナラ亜属クヌギ節

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris*) ブナ科

試料はいずれも保存状態が悪い。環孔材で、孔眼部はほぼ1列、孔眼外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織がある。

・クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科クリ属

環孔材で孔眼部は3～5列、孔眼外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・カツラ (*Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc.*) カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔は単独または2～3個が複合して散在し、道管の分布密度は高い。道管は晚材部へ向かって管径をやや漸減させる。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性II型、1～2細胞幅、1～30細胞高。

(4) 考察

13号住居跡は、廃棄された家具を意図的に燃やしたものと考えられている。そのため、炭化材は、住居構築材の一部であることは明らかであるが、部位などの詳細は不明である。出土した炭化材にはクヌギ節、クリ、カツラの3種類が確認され、住居が複数の種類の木材で構築されていたことがうかがえる。山梨県では、韮崎市堂の前遺跡で弥生

時代後期後半の住居構築材について樹種同定が行われている（高橋，1987）。また、長坂町酒呑場遺跡で古墳時代初頭の住居構築材について樹種同定が行われている（未公表資料）。それらの結果を見ると、いずれもクヌギ節やコナラ節を中心とした種類構成が認められ、今回の結果とはやや異なる。

地域によって種類構成が異なる例は、関東地方でも認められており、周辺植生の違いを反映していることが指摘されている（高橋、植木，1994）。また、群馬県渋川市では遺跡によって種類構成が異なり、局地的な植生の違いや生業の違いなどが反映している可能性が指摘されている（高橋ほか，1995）。とくに、中筋遺跡では竪穴住居と平地式建物で用材選択が異なり、建物の構造や用途によっても使用する種類が異なることが指摘されている（高橋，1988；橋本ほか，1995,1996）。13号住居跡の結果が、堂の前遺跡や酒呑場遺跡とやや異なる背景にも同様の可能性が指摘できる。

一方、24号住居跡では炭化材が住居南側の柱穴付近から出土しており、柱材の一部が炭化・残存したものと考えられている。樹種はクヌギ節であり、柱材に強度の高いクヌギ節が選択されていたことがうかがえる。13号住居跡とは、建築時期や住居の形態がやや異なるが、クヌギ節が出土している点では一致しており、基本的に同様の用材選択が行われていたと考えられる。今後、さらに資料を蓄積して、地域による用材選択の比較などを行いたい。

4 墓壙と集石土坑のリン分析

(1) 試料

調査は、集石土坑2基（集石遺構1・3）について実施する。

集石土坑1は13号住居跡の南側で検出され、円形を呈する。内部は主に、底部の3層、炭化物と多数の礫が混在する2層、礫が認められる1層に区分される。試料は、1層と2層、位置不明の土壤試料の合計3点が採取され、これらを分析試料とした。

集石土坑3は調査区東壁際で検出され、円形を呈し、内部に多数の礫が認められた。試料は、遺構内と遺構外から土壤試料1点ずつが採取され、これらを分析試料とした。

(2) 分析方法

土壤標準分析・測定法委員会（1986）、土壤養分測定法委員会（1981）、京都大学農学部農芸化学教室（1957）を参考に、以下の操作行程を行った。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。

風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解が終了した後、水で100mlに定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P2O5）濃度を測定する。

測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P2O5mg/g）を求める。

(3) 結果

結果を表3に示す。

集石土坑の土性は、ほとんどがシルト質埴土に区分されるが、集石土坑1の2層は、やや砂質である。土色はいずれも黒褐色であり、集石遺構1の1層・2層はやや黑色味が強い。

集石土坑1では、やや黑色味の強い1層・2層でリン酸含量が高い。集石土坑3は、遺構内が遺構外よりもやや高い含量である。

(4) 考察

土壌中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量はこれまでの報告例からその上限が5.5P2O5mg/g程度と考えられる（Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991）。いずれの試料も天然賦存量の範囲内にあることが指摘され、人為的なリン酸富化の可能性は低いものと判断される。

各遺構ごとに見た場合には、集石土坑1の覆土試料のリン酸含量は、集石土坑3よりも高かった。1層・2層の土色は黒褐色がやや強く、腐植含量が高いことがうかがえる。このような土性から、腐植の給源となった植物に由来するリン酸が影響している可能性があるが、他の遺構より高い点は興味深い結果である。上記した天然賦存量と比較して、著しく高い値となっているわけではないため、動物遺体の存在を積極的に指示することはできないがその可能性はないわけではない。

集石土坑3では遺構内のリン酸含量がやや高い傾向にあるが、集石土坑1に見られる平均的なリン酸含量が1.80P2O5mg/g前後であることを考慮すると、著しく高い値ではない。そのため、遺構内に動物遺体の存在の有無について

表3 墓壙と集石土坑のリン分析結果

遺構名	試料名	土性	土色	P2O5(mg/g)
集石土坑1	1層	SIC	10YR3/2 黒褐色	2.36
	2層	LIC	10YR2/2 黒褐色	2.61
集石土坑3	1層	SIC	10YR3/3 黒褐色	1.73
	遺構内	SIC	10YR3/2 黑褐色	1.67
遺構外	SIC	10YR3/2 暗褐色		1.25

土色:マセイ色表系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修, 1967）

土性:土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編, 1984）の野外土性

SIC:シルト質埴土（粘土25~45%, シルト45~75%, 砂0~30%）

LIC:軽質埴土（粘土25~45%, シルト0~45%, 砂0~55%）

は判断がつかない。

以上のように、調査した集石土坑では、動物遺体に由来するリン酸成分の濃集は確認することができなかった。ただし、集石土坑1では他の遺構に比較してやや高い値を示した点は興味深い結果である。今後、同時期の遺構などの調査例を増やし、今回の結果を再検討していただきたい。

引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敏・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.
- Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M. (1980) 土壌の化学。岩田進午・三輪春太郎・井上隆弘・隔捷行訳, 学会出版センター [Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.(1976)SOIL CHEMISTRY] , p.235-236.
- Bowen,H.J.M. (1983) 環境無機化学 -元素の循環と生化学-。浅見輝男・茅野充男訳, 297p., 博友社 [Bowen,H.J.M. (1979) Environmental Chemistry of Elements].
- 土壤標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壤標準分析・測定法, 354p., 博友社.
- 土壤養分測定法委員会編 (1981) 土壤養分分析法, 440p., 美賢堂.
- 橋本真紀夫・高橋 敏・大塚昌彦 (1996) 群馬県榛名山東麓地域における縄文時代から平安時代の住居構築材の用材。日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集, p.92-93.
- 橋本真紀夫・高橋 敏・馬場健司・田中義文 (1995) 自然科学分析。渋川市発掘調査報告書第45集「中筋遺跡 第8次・第9次」, p.73-100, 群馬県渋川市教育委員会.
- 川崎 弘・吉田 淳・井上恒久 (1991) 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.23-27.
- 京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験書 第1巻, 411p., 産業図書.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会 (1984) 野外土性の判定。ペドロジスト懇談会編「土壤調査ハンドブック」, p.39-40.
- 高橋利彦 (1987) 炭化材について。「山梨県韮崎市 中本田遺跡・堂の前遺跡 県営園場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, p.56-60, 韮崎市教育委員会・峠北土地改良事務所.
- 高橋利彦 (1988) 中筋遺跡出土炭化材の樹種。渋川市発掘調査報告書第18集「中筋遺跡 第2次発掘調査概要報告書」, p.42-47, 群馬県渋川市教育委員会.
- 高橋 敏・植木真吾 (1994) 樹種同定からみた住居構築材の用材選択。PALYNO, 2, p.5-18, パリノ・サーヴェイ株式会社.
- 高橋 敏・馬場健司・橋本真紀夫 (1995) 行幸田畠中B遺跡に関する自然科学分析調査。渋川市発掘調査報告書第48集「行幸田畠中B遺跡」, p.35-52, 群馬県渋川市教育委員会.

a : 水口, b : 銀目, c : 銀目

3. かわら (第13号銀目標本 Na 13)

2. かわら (第13号銀目標本 Na 13)

200 μm : a
200 μm : b, c

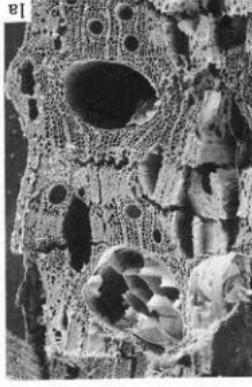
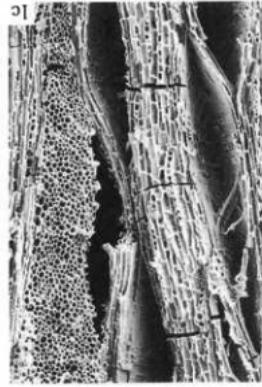
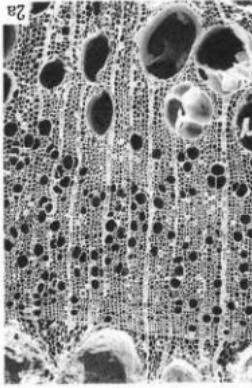
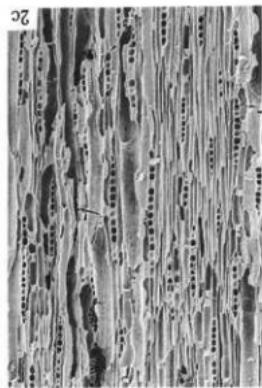
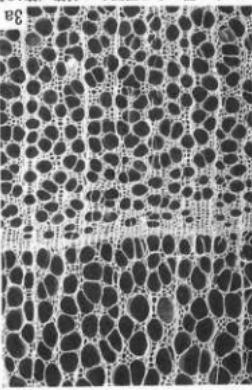
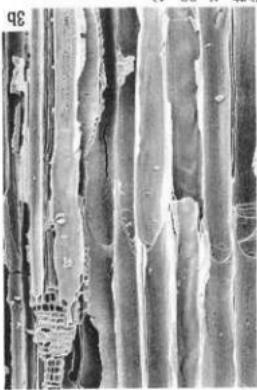
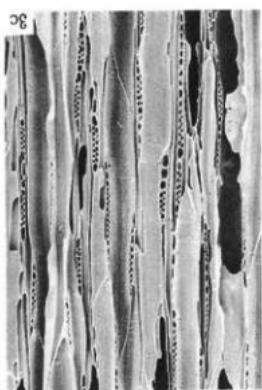
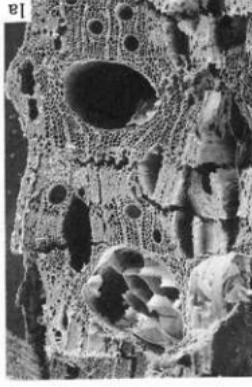
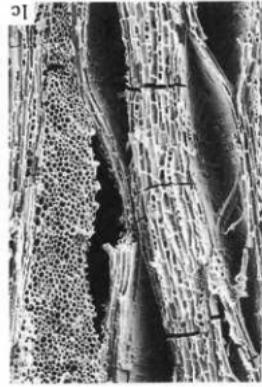
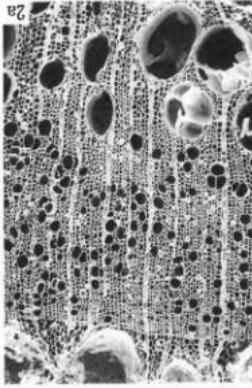
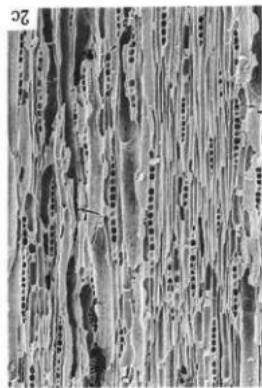
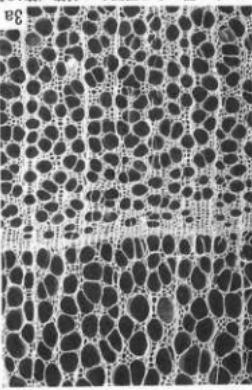
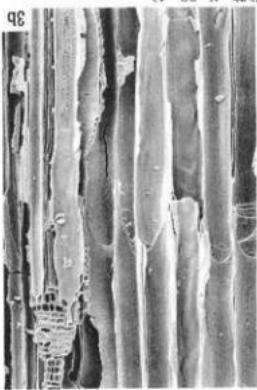
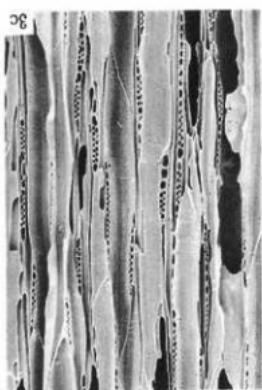


図 版



諏訪尻遺跡から甲府盆地をのぞむ

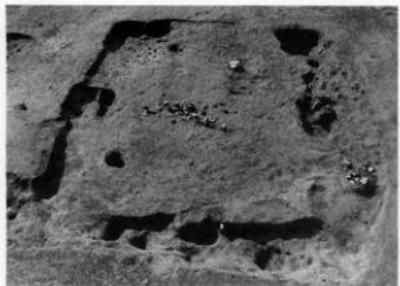




諏訪尻遺跡から坊ヶ峯をのぞむ



諏訪尻遺跡全景



第1号住居跡 完掘状況



第1号住居跡 土器出土状況（1）



第1号住居跡 土器出土状況（2）



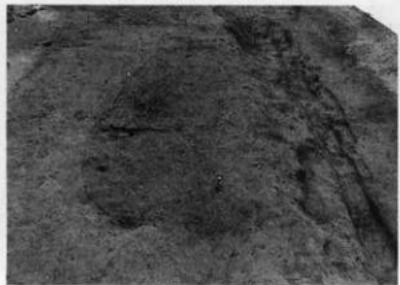
第2号住居跡 完掘状況



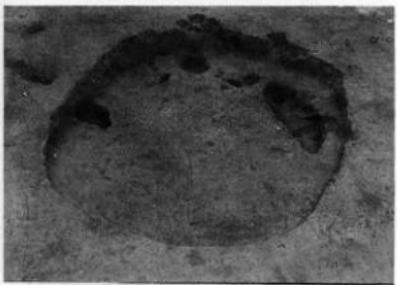
第3号住居跡 完掘状況



第3号住居跡 土器出土状況



第4号住居跡 完掘状況



第6号住居跡 完掘状況



第7号住居跡 完掘状況



第7号住居跡 土器出土状況



第7号住居跡 炉検出状況



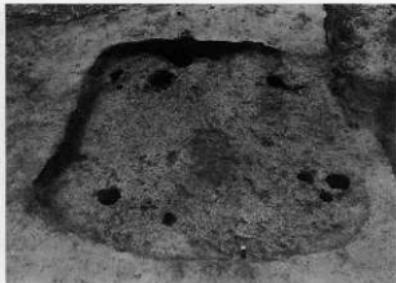
第8号住居跡 完掘状況



第10・11号住居跡 完掘状況



第11号住居跡 土器出土状況



第12号住居跡 完掘状況



第13号住居跡 完掘状況



第13号住居跡 炭化材検出状況



第15号住居跡 完掘状況



第17・18号住居跡 完掘状況



調査風景（第17・18号住居跡）



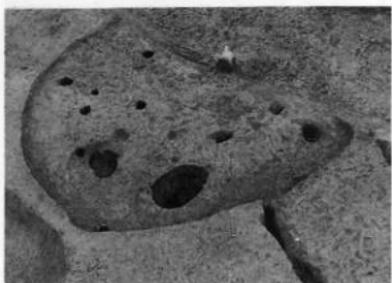
第17号住居跡 土器出土状況



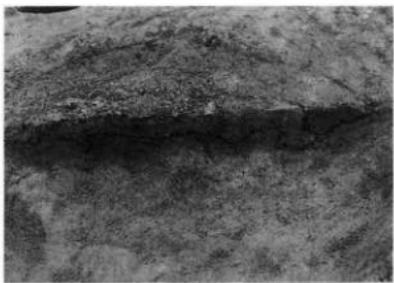
第18号住居跡 土器出土状況 (1) (2)



第19号住居跡 完掘状況



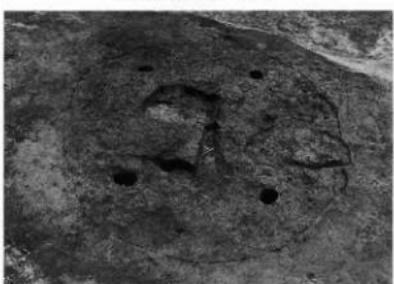
第20号住居跡 完掘状況



第20号住居跡 炉?



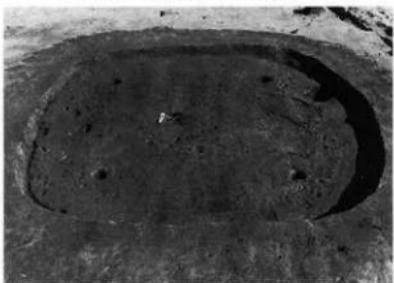
第21号住居跡 完掘状況



第22号住居跡 完掘状況



第23号住居跡 完掘状況



第24号住居跡 完掘状況



第24号住居跡 完掘状況



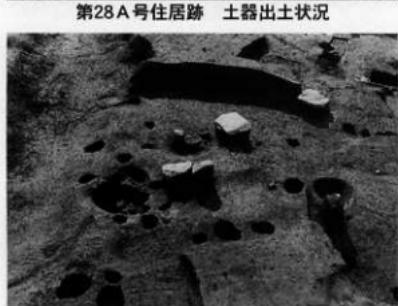
第24号住居跡 土器出土状況



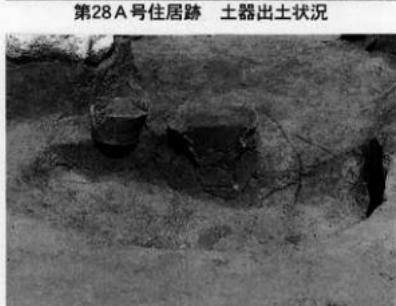
第25号住居跡 完掘状況



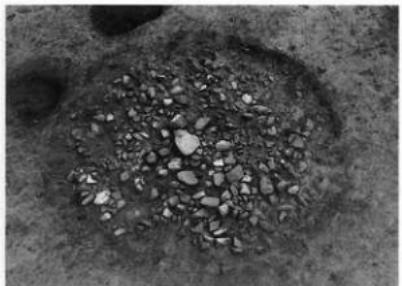
第28A号住居跡 土器出土状況



第28B号住居跡 完掘状況



第28B号住居跡 炉セクション



第1号集石土坑 检出状况



第1号集石土坑 半截状况



第3号集石土坑 检出状况



第3号集石土坑 土器出土状况



第1号方形周溝墓 全体



第1号方形周溝墓 土器出土状況（1）



第1号方形周溝墓 土器出土状況（2）



第1号方形周溝墓 土器出土状況（3）



第1号方形周溝墓 土器出土状況（4）



第1号墳 全体



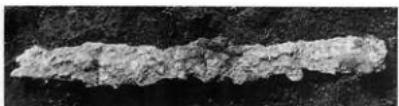
調査風景（第1号墳）



調査風景（第1号墳）



第1号墳 土器出土状況



第1号墳 太刀 出土状況



第2号墳 完掘状況



調査風景（第2号墳）



第2号墳 土器出土状況



第2号墳 土器出土状況



調査風景



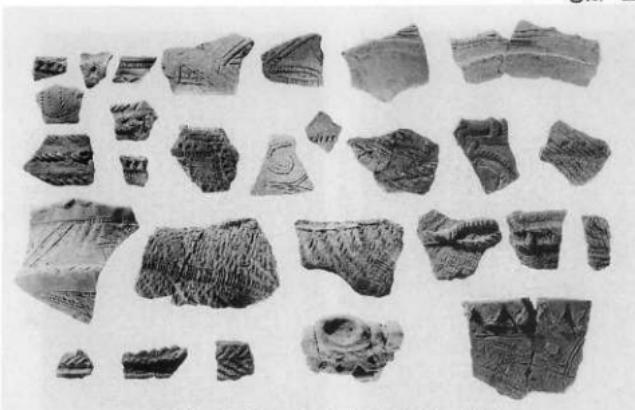
調査風景



調査スタッフ（1998年度）



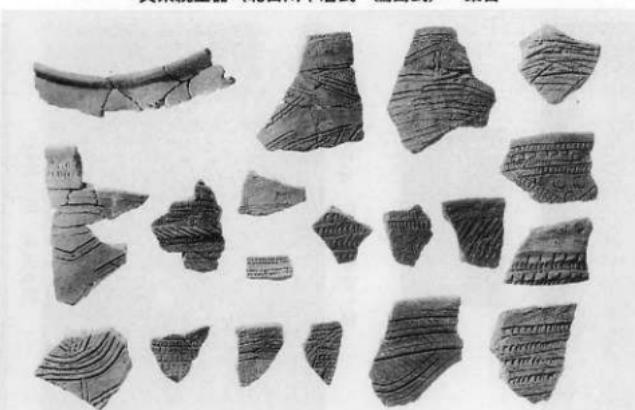
土製品・ミニチュア土器 集合



異系統土器（北白川下層式・鷹島式）集合



第7号住居跡出土土器 集合



諸磯b式土器 集合



台付壺（3住）



台付壺（11住）



台付壺（11住）



壺（11住）



壺（13住）



台付壺（17住）



台付壺（17住）



壺（17住）



壺（18住）



台付壺（24住）



台付壺（24住）



小形台付壺（24住）



壺（24住）



壺（24住）



深鉢（28A住）



深鉢（28A住）



深鉢（炉体土器）28B住



深鉢（28B住）



深鉢（24土）



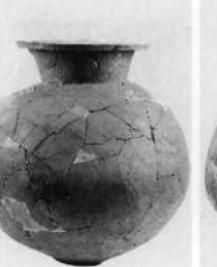
深鉢（集石3）



小形台付壺（1方）



壺（1方）



壺（1方）



壺（1方）



小形S字状口縁壺（1方）



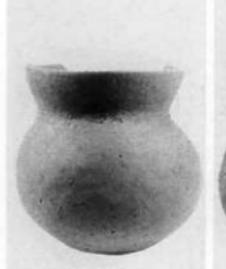
壺（1方）



壺（1方）



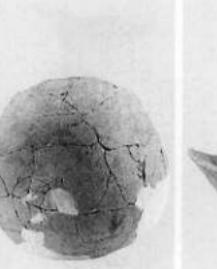
壺（1方）



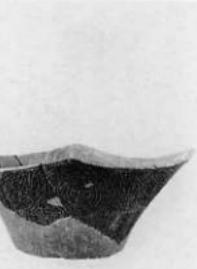
壺（1方）



壺（2方）



壺（2方）



深鉢（造構外）

報告抄録

ふりがな	すわじりいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	諏訪尻遺跡発掘調査報告書
副題	縄文時代前期後半の住居跡、弥生～古墳時代の集落・低墳丘古墳・方形周溝墓の調査
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 180集
著者名	坂本美夫・野代恵子・細倉邦生
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 055-266-3881
印刷所	峠南堂印刷所
発行日	2000年3月31日

諏訪尻遺跡概要

ふりがな	すわじり
所在地	山梨県東八代郡境川村字 諏訪尻 3883-11番地外 やまなしけん ひがしやつしろぐん さかいがわむら あざ すわじり 25,000分の1地形図 甲府市 位置 東経138° 37' 10" 北緯35° 35' 00" 標高365m 市町村コード19325
調査原因	境川分譲地造成事業
調査期間	第1調査1997年5月19日～同12月11日、第2調査1998年6月22日～同10月20日
調査面積	5,000m ²
旧石器時代	
種別	包含層
主な遺物	黒曜石製ナイフ型石器2点、安山岩製尖頭器1点
特記事項	縄文時代
種別	集落
主な遺構	住居跡3軒、集石土坑1基、土坑6基（諸磯b式期）
主な遺物	押型文土器、織維土器、諸磯a式～五領ヶ台I式土器、土偶
特記事項	埋葬炉をもつ住居跡もあり。土偶は前期のもの。北白川下層式、鹿島式も出土 弥生～古墳時代
種別	集落、墳墓
主な遺構	住居跡24軒、方形周溝墓1基、低墳丘古墳2基
主な遺物	土器、ミニチュア土器、鉄剣
特記事項	大形住居跡あり。方形周溝墓出土土器には東海系の土器が含まれていた。 低墳丘古墳は5世紀中頃～後半に位置付けられる。

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第180集

諏訪尻遺跡

境川分譲地造成事業に伴う発掘調査報告書

発 行 2000年3月31日

編 集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県東八代郡中道町下曾根923

TEL 055-266-3881 FAX 055-266-3882

印 刷 株式会社嶽南堂印刷所

